逢魔が時！

高城来夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
逢魔が時！

【Ｎコード】
Ｎ１３４１Ｙ

【作者名】
高城来夏

【あらすじ】
およそ千年ごとに交互に訪れる「生の刻」と「魔の刻」。
生の刻から魔の刻へと移り変わる現代を生きる少年、成瀬巡が出会ったひとりの少女（幼女）。
彼女は人ならざるもの、物の怪だった。
巡と物の怪たちとの交流を描く、ライトシリアスほんのりコメディな、半オムニバスファンタジー。

※以前に自ブログと自サイトで公開したストーリーを、加筆修正の

うえ順次公開。
完結済みのものですが、修正が多いのでのんびりまったりと更新予定です。

……1……

掃除も済ませて終礼も終わった放課後。

放課後はクラブ活動のある児童以外は速やかな帰宅を推奨する『私立藤乃木(ふじのぎ)小学校』の校庭は、今はサッカークラブの活動で賑わっている。その面々を時々横目で見ながら、彼は教室で本を広げていた。

物静かな文学少年。

に見えなくもないが、実際に机の上に広げていたのは「山菜・野草」のミニ図鑑だ。

「なんだー、お前らまだ残ってたのか？　用事がないならさっさと帰れ」

教室で無駄話に盛り上がりを見せていたクラスメイト数人は、のんびり教室に入ってきた担任教師を見とめて「はーい」とお行儀良く返事をしてみせ、仕方ないとばかりに教室を後にする。さよーならー、と間延びした挨拶がお決まりだ。

「で、成瀬。お前はなにやってんの」

歳若い担任教師に広げていた本を覗き込まれて、成瀬巡(なるせめぐる)はパタンとそれを閉じた。

「山菜～？」

首をひねるような仕草を見せた担任、朝比奈高之(あさひなたかゆき)は、ああ、と思い出したように屈めていた背筋を伸ばす。

「もしかして、来週の実習のか」

言われて巡は素直に頷く。

「予習を」
しゃあしゃあと言い放つ少年に、朝比奈は微妙な苦笑いを返す。
「予習結構だが、それはむしろあんちょこってヤツだろが」
来週の実習、と朝比奈が言ったのは、週明けにある家庭の授業での実習だ。
誰にも聞かず頼らずそこいらにある草や木の実を自分の判断で持ち寄り、極力食べられるものは食べる。食せるものが何割あるかというちょっとした実験でもある。
このおかしな実習案を出したのは、朝比奈本人だ。
巡の通う藤乃木小学校では、授業案は担任に一任されている。一任と言っても、もちろん主任、教頭の検閲は入る訳だが、よほどやる気のない案以外は、するりと通ってしまうゆるい校風だ。良い案に関しては、学年を通して採用されたりもする。
それなりに自由だが、教師の技量が試される環境でもある。
もっとも検閲を通ったこの実習、せっかくの家庭の授業でもっと華やかなそれらしい料理を作りたい女子には大変不評だが。菓子だの洋風料理だのを実習で作りたいお年頃、六年生だ。食えるんだかそうでもないんだかわからない葉っぱや木の実を煮たり焼いたりしたい生徒はそれほど多くない。
将来的に役に立ちそうなことほど、子供たちにはつまらないものなのは、世の定説。
まあともかく、今回の実習に関して言えば、予習をするというのはつまりカンニング行為にあたるという訳で。
「別に、実習で見たりしないよ」
「そーゆう問題か」
実習では、二時限連続である時間割の、最初の一時限を校外での収穫に当て、あとの一時限で調理をする計画になっている。せっかくだから、食べられるものを収穫したいと考える者がいるのももっとも、巡のように放課後の教室で堂々とではなくとも、隠れて下調べをする熱心な生徒は他にもいるだろう。だから朝比奈も、深く

は突っ込まない。
「まあいいや、お前もさっさと帰れよ」
授業が終わったら、用事のない者は居残り寄り道せずにまっすぐに帰る。これはこの学校でなくとも、普通にありがちなルールだ。
仕方がないから、巡も読んでいた本を鞄にしまって席を立った。
「先生、さようなら」
「はいさよーなら。下見とか言って寄り道するんじゃねーぞ」
ぎくり。巡、図星をつかれた。
「夕方ってのは、魑魅魍魎や妖怪どもと出遭いやすい時間帯だって言われるからなー」
にこやかに言う担任教師に、巡はなんとも微妙な視線を送る。魑魅魍魎という言葉はよくわからないが、妖怪はわかる。それがいわゆる、フィクションの物語の中でしかお目にかかったことがない存在であることも。
「怪しいヤツを見る目つきをするな」
怪しいヤツを見てるんだから仕方がない。
「昔から言われてることだぜ。まあ、夕暮れ時ってのは、人の心が狂う、犯罪の起きやすい時間でもあるってこった。変な事件に巻き込まれないように、とっとと帰りなって話。オレはまだマスコミに退路をふさがれたくはねーぞ」
人の心が狂うとかはいまいちわかりにくいが、言いたいことは何となくわかった。
しかし「まだ」って、いつか未来ならいいんだろうか。ていうか、建前でももう少し自分の生徒を心配する発言は出来ないだろうかと巡はぼんやりと思う。
「気をつけます」
それだけ言い置いて、巡は鞄を肩からぶら下げて教室を出た。

「メーグー、帰ろ〜」
誰もいなくなった六年一組の教室に、ひょっこりと顔を出した少女がひとり。
くるりと見回す教室には、もちろん、だーれも残っていなかった。
「あれえ？　部活ないから一緒に帰ろうって言っておいたのに……」
巡のふたつ上の姉、芽衣（めい）だ。
暇な日を見つけては、わざわざ隣の敷地の中学校から顔を出す、弟大好きブラコン姉。
完全エスカレーターではないが、小中高と隣接した場所に立つ藤乃木学園グループにおいて、その中学に通う多くの生徒はこの小学校の卒業生だが、卒業して二年も経つのに、未だに我が校のような顔でほっつき歩くのは、この芽衣くらいのものだ。
まとめても、すぐに解けてしまいそうなサラサラのストレートヘアを指にクルクル巻きつけながら、芽衣は唇を尖らせる。
「最近メグって冷たいよねえ。寂しいなあ」
いじける素振りで不満を漏らしてみたところで、他に誰もいないから意味がない。
独り言の多発には気をつけろ。

そしてそんな姉との約束などキレイさっぱり忘れている弟、巡の方はというと。
担任の注意など聞くはずもなく、学校の裏山の雑木林へと足を運んでいた。
別に、実習にそんなに真面目に取り組みたいという情熱があるわけではないのだが、やはりせっかくむしり取って行くのなら、食べられるものの方がいい。自分の選んだものが食えない部類に分類さ

れるのは、ちょっとシャクに障る。一応彼にも、なけなしのプライドのようなものはあるのだ。ウケ狙いに走れる性格だったなら、世渡りの面で将来有望なのだが。

夕方とは言っても、夏も間近な6月の放課後は、まだ太陽が眩しい。今日は天気がいいから、ちょっと暑さも感じるが。

朝比奈の言った、人の心も狂わせがちだという夕暮れ時。

それを俗に、逢魔が時、と言うのだが。

今のこの明るさが、そんな怪しげな雰囲気など、まったくと言っていいくらい感じさせない。もう少し日が落ちなければ。雑木林の中はそれなりに薄暗いが、それは夕闇のせいではなくて、単に木々の作る日陰のせいだ。

一度は鞄にしまった図鑑を取り出しながら歩く。

腰のあたりの高さにある鞄をあさっていたせいで、目の高さくらいの空間をふさぐ細い木の枝に気付くのが遅れた。

危ない、とギリギリでかがみこんで、その枝をくぐり抜けた後に背筋を伸ばして。

次の瞬間、バサリと目の前に降ってきた何かに驚く余裕も無く、巡はその物体にボスンと顔を埋めてしまった。

「ぶっ……」

柔らかい、枕のような布の感触。

二秒ほど固まってしまった後で、慌てて半歩退いた。が、目の前にある物体が何なのか、目視できない。

さらにもう半歩下がってから『それ』をマジマジと眺めた。上から下まで。

なんだ、これは。

見たままを言うなら、それは、少女。というか幼女。

そこいらの幼稚園にでも通っていそうな幼い少女が、絡み合った枝に器用に下半身を支えられて、逆さまにぶら下がっていた。

芽衣のようなまっさらストレートではなく、ふわふわで茶がかった長い髪。

その髪をゆらゆらと揺らしながら、少女は幸せそうな顔で眠っている。ように見えた。逆さ吊り状態で、その顔は微妙に笑っている。

「パンツ丸見え……」

真っ白な肌着らしきものは重力にしたがって盛大にめくれ、巡がこれまで実際に目にしたことのない形状の、ふっくらとギャザーの入った下着――いわゆるかぼちゃパンツ――が丸出しになっていた。

なんでこんなところに女の子が。

なんで幸せそうにぶら下がってるんだ。

大体、いくらちょっと余所見をしていたからって、コレに気付かない訳あるか。ずり下がって来たにしたって、こんなのが進行方向のそう高くもない木の枝に絡まってたら、もっと早くに気付くはずだ。さっきまで確かにいなかったと思うのに。雑木林のマジックだろうか。

というか自分は今、このパンツに顔面から突っ込んだのか。

いやパンツはともかく、何が何だかわからない。

巡の思考の回転は続く。

そう、往々にして変化とは、唐突にやってくるものだ。

――これが、巡と『少女』との出逢いだった。

……2……

とりあえず、だ。
未知との遭遇を果たした巡、思いつく選択肢はふたつあった。
とにかく少女を枝から下ろしてやるか。もしくは、見なかったことにするか。
迷わず後者を選びかけた。別に枝に絡まって難儀している訳でもなさそうだし、むしろ幸せそうな顔で眠っているのを、起こすのも申し訳ない。
そうだ。知ったことではない。

しかし、微笑む寝顔で逆さ吊りになっていた少女が、うっすらと瞼を開き始めた。
手遅れだ。逃亡失敗。
いや、その場で踵を返せばまだ間に合ったのかもしれないが、開きかけた少女の瞼をうっかり注視しているうちに、数秒にも満たない機会を逃してしまった。
間をおかずにパカンと開ききった大きな瞳は、逃げ腰だった巡の姿をしっかりと捉えていた。

「おお～」
逆さ吊りの少女。ニヤリと満面の笑みを作った。
「ひさしぶりだのぉ～」

ひさしぶり？
お前なんか見たことも会ったこともない。

声にできずに心の中だけで反論する巡にはまるで構わずに、少女は下半身に絡まっていた枝から、実に簡単にスルリと抜け出した。

今までずり落ちなかったのが不思議なくらいの滑らかさだ。
そのままクルンと半回転して、ストンと地上に着地する。
幼児のクセに器用な。いや、何でも体得するのが早い幼児なら、これ位のことは朝飯前なのか。そうなのか？
着地した時に巡に背を向ける形になった少女は、元気にクルリと振り返った。
「元気にしていたかの」
ニコニコと巡を見上げる満面の笑顔。
「……」
返事をしていいものかどうかも判断できない。
「元気じゃなかったのかのー？」
笑顔のままでこくりと首をかしげる仕草はまったくもって普通の少女のそれだが。普通の少女が林の中で逆さ吊りになっているのを見たことはない。つまりは普通でないということでいいのか。色々なことがおかしいと認識しつつも、どういう反応が正しいのか、巡にはわからない。
「誰だ、お前」
結局、ひねりも何もないそんな一言が口をついて出た。
見た通り自分は元気だが、見たこともない幼児に、そんなお伺いを立てられるいわれはない。木の枝に絡まって逆さで熟睡する知り合いなどいないはずだ。心当たりがない。
「なんだ、冷たいな。……まあそうか、人間はいちいち面倒くさいからの」
齢十年に満たなそうな少女、まるでこの世を悟ったような口調だ。
「人間と話をしたのは、実に久しぶりだ。ぬしという個人に会ったのは、初めてかもしれんがの。どうだ。人間は元気かえ？」
「……」
言動が、ヤバいような気がする。というか、何かを言われてもそれが意味のある言葉として頭の中にまで届かない。

朝比奈先生、怪しいヤツ扱いしてしまってごめんなさい。
言いつけを守らなかったせいで、本当に怪しいヤツに出遭ってしまいました。

巡は、ジリ、と足を後退させた。
こんなおかしなヤツと、係わり合いになるのはマズい気がする。
巡は、クルリと踵を返すと、物も言わずにその場から駆け出した。
見なかったことにするのは手遅れになったが、とりあえず気持ちが逃げを打った。走りにくい雑木林だが、全力で逃げれば幼児ごときに追いつかれるはずはない。ここで逃げてアレの視界から外れることさえできれば、きっともう会うこともないだろう。そう思いたい。家や学校の近所というのが少々の不安要素だが。

「急に走り出すとは何事だ」
耳元で、声が聞こえた。
「うわあああ！！」
少女が、いつの間にか自分の背中におぶさるように張り付いている。巡は自然の成り行きで急停止した。
「せっかく会えたのに、話もしてくれんのか。大体、今逃げても困るのはぬしなんだがの」
どうやって追いついたのか。どうやって走る巡の背中に飛びついたのか。まるで気付きもしなかった。
さっぱりわからない。気味が悪い。普通じゃない。
「お前、誰だ！　お前なんか知らない！」
「だーから、ぬし個人と会うのは初めてだとちゃんと言っておるだろ。永い時間を眠って過ごすしかなかったわちを、少しくらい歓迎してくれても良さそうなものだ」
何を言われても、頭の中に浸透してこない。ちゃんと日本語でひとつひとつの言葉は聞き取れるが、少女の言い回しが、ひとつの流れで理解できない。こういうのを電波というのだろうか。

「何を言ってるのかわからない！　はなれろ！」
自分を背負ったまま怒鳴る巡に、少女はうーんと困った顔を見せる。
「そりゃあ、きちんと話も出来なければ理解のしようもあるまいよ。まだ先駆けのこの時代、ぬしがわちと出会ったのも、その力ゆえの縁なのだからして、話くらいしても損はないと思うぞ」
言いながらも、少女はフウとやけに大人びたため息をもらす。
「もっとも、いつの世も人間というのは、他のものを受け入れがたい性質をしておるがの～。そうでなければ、いくら魔の刻が過ぎたとはいえ、こんなにわちらが隅に追いやられることもなかったろうに」
さっきから、巡には言っていることがまるでわからない。
どこぞのオカルトマニアが喜びそうな単語が聞こえなくもないが、それを普通の小学生である巡が理解するのは難しい。

ストンと、少女は巡の背から飛び降りて、素早く彼の正面に回った。
「ぬしにもわかりやすいように、結論から言ってやろう」
相変わらずの、満面の笑顔。しかしこの状況では、つられて笑い返すこともできない。
「わちは、人間ではないよ」

きた。
きたきたきた、来ました。
私は宇宙人ですとか異世界から迷い込んだついでに世界を救うとか、そういう発言が得意な人種か。もちろん巡はそういった世界に明るいわけではないが、自分の交友範囲に存在しない怪しいタイプであること位はわかる。余計な心配だが、この子の親は自分の娘がそういう発言をすることを知っているのか。それとも親兄弟が伝説の戦士か。

「世も末だ……」
つい、つられるように難しい言葉で呟いてしまった。
「そうだの。生きる者の全盛の世は終わり、これからは魔の刻となる。その移り変わりの時代。今はまさに、逢魔が時、なのだよ」
巡の言葉を受けて正体不明の少女がにこやかに答えたらしいが、彼はそれをやけに遠くで聞いている感覚があった。
結局やっぱり巡には、言葉の意味はさっぱりわからなかった。

……3……

言っている意味がわからない。
そう呟いた巡に、少女はやれやれと苦笑しつつ左右に首を振った。
「物わかりが悪いの～」
その言葉に、いささかムッとする巡。
「人間じゃないって言うなら何なんだ」
どこからどう見ても人間にしか見えないじゃないか。まあちょっと運動能力が高かったり、木にぶら下がったりはしていたけど。
少女は、一瞬フッと遠くを見るような目を見せる。こういう見た目に似合わない大人びた仕草も、巡のカンに障るというか、馴染めないというか。おおよそこの年頃の少女がやりそうにない振舞いを自然とやられてしまうと、彼の感性が追いつけない。大人びた仕草を好む、ちょっとおませな女の子とかいうのとは、まるで違うのだ。余裕のありそうな笑みとあいまって、その様子を例えるなら「老獪」という言葉が似合うだろうか。もちろんそんな単語は巡は知らないが。
「さあ、何なんだろな。人間にはよく、魔物だの鬼だのと言われておったがの」
これのどこが魔物だ。それに、鬼なら角でも生えていそうなものだ。
巡は、ごくごく一般的に魔物だの鬼だのと呼ばれる架空の姿を思い描いた。もっとも、魔物とひと括りにしてしまうと、それは曖昧すぎて良くわからない。けど少なくとも、魔物というのは恐ろしく人とは違う姿をしているものというのが巡の認識だ。
「ああ、妖怪とも言われたな。わちは、遺伝子を継承してこの世に『生きる』存在ではないからの。生きてもいないし死ぬことも出来

ん。そんな存在だ」

つきあってられない。

魔物だの生きてないだの、意味不明な言動を臆面も無く言い募る幼児の相手など、これ以上していられない。

「妄想なら自分の頭の中だけにしてくれ。僕は帰る」

クルリと振り返って、歩き出す。

「そうだの。立ち話もナンだし、ぬしの住処へ連れて行け」

「冗談じゃない！！」

巡は年相応に大人気なく、マジで少女を睨みつけた。絶対にそれは許さないと、その表情で語っている。しかしあれだけ全力で走る巡に取り付いてきた少女だ。本気で家まで来る気なのだとしたら、それを止める対策は無いように思える。

「いやいやそれはぬしが困る。わちの話は聞いておいた方がいいと思うがの～」

「聞きたくない！」

何が一番苦手って、話の通じない相手が一番苦手だ。

巡はここに来て痛感する。今までそういう相手に出会ったことが無かった。否と申し立ててもスルリとかわされてしまうような経験など無いのだ。いやもちろん、違う嫌だと思うことを聞き入れてもらえなかったことは何度だってあるが、それにはちゃんと、それなりの理由というものがある。今回相手にしている少女は、そういうケースからはかけ離れているのだ。

何を言っても、のれんに手押し。

理解しようがしなかろうが、おとなしく従おうが反抗して怒鳴ろうが、目の前の少女は好きなことを言い、好きなようにする。きっとそのニヤニヤした笑みを顔に張り付かせたままで。巡には、彼女の電波話を聞く以外の選択肢が与えられていないらしい。

もしもちゃんとした理由があるのだとしても。

それは今、巡の理解の範疇外だ。

結局巡は、その場から脱兎のごとく逃げ出した。

再び追いつかれてしまうのかもしれないが、今の巡には、他の方法を思いつくことが出来ない。こういうのとちょっとでも係わったら、絶対にろくな結果が待っていない。

誰かに教わったわけじゃない。そう”思った”のだ。本能と呼べるかもしれない部分で。

「仕方のない奴だの……」

その場に立ち尽くしたままの少女は、その場から巡を追いかけるでもなく、ただ走り去る彼の姿を見送っていた。

何なんだ、あの幼児は。

巡がそう思ったのは、今日何度目だろう。

家に駆け戻る間にも、時折ちょっと道を変えてみたりして、何度も振り返ったり、あたりを見回したりした。背後にも気を遣う。また気付かないうちに背中にぶら下がっているかもしれない。

そんなこんなしながら、いつもの倍以上疲労して、巡は家の前までたどり着いた。

あがった息を整えながら、何かの気配がないか、キョロキョロと家の周りを見回す。そして大きく振り返って、背後も確認した。よし。誰もいないことを確認して、家の門へと向き直った。

「ここがぬしの家かの」

「――、……ッ！」

目の前の開いたままの門の内側、ちょっとした庭ともいえる芝生にはめ込まれている、玄関へと続く石畳の上に、少女が立っていた。

「どッ……」
どうして、とか、どうやって、と言いたかったのかもしれない。けれど動転した巡の口からそれらの言葉は出てこなかった。
「一度話をした人間の気配を追うのは簡単だ。それにわちはこう見えて、ぬしらのように確たる器は持たん存在だからの。重力の束縛から逃れることも可能だし、形を変えることだってできなくはないのだぞ。まあわちはちと、変化の類いは苦手だが」
ぬしは今いち信じられんようだからの、と、少女は勢いをつけることも無く、その場からヒョイと小さな門の上に飛び乗った。直立の姿勢を崩しもせず、スッと飛び上がって音も無く一メートル以上の高さがある狭い門構えの上に、ストッと揃えた両足で立ったのだから、それは尋常な能力ではない。
驚愕で目を見開く巡を尻目に、さらに少女はトンとその足場を蹴った。
一瞬後には、五メートルほど続く石畳の奥にある玄関の遥か上、二階建ての屋根の上に、その姿があった。
「な……ッ！」
「どうだ？　人間にはなかなかできることじゃなかろ？」
ストーンと放物線を描いて、少女は再びこともなげに巡の目の前に飛び降りた。
驚いて一歩後退した拍子に、巡は体勢を崩して尻餅をついてしまう。少女は続けざま、そんな彼の傍にスッと近寄り、その身体をこともなげにひょいと抱き上げてみせた。
「ちょ、あ、……ぅ、……ッ」
支えられるような安心感がない。
まるで宙を浮くような感覚に、巡は身体を硬くしてただ呻いた。
物理的に、彼女の小さな身体で倍ほどの身長がある巡の身体を支えきるのは難しい。土台も小さければ、リーチも短かすぎる。けれど彼女は、純粋にふたつの掌だけで、巡の身体を”持って”いた。
「ぬしの身体がバランスも崩さずにわちのちぃ～ちゃな手の上に収

まっておるのは、わちの『魔』の部分の力ゆえよ」
ニヤーっと笑ったあとで、少女は巡の身体をほいっと地面へと戻した。いささか気遣いのない降ろし方だったが、それに対する感想を持つ余裕すらも、今の巡にはない。

本格的に、それは幼児に出来ることではない。いや、大人だって、多分。

人間じゃない、なんてそんなありえない話を、本気で信じろというのか。いや、人間だって、何か特別な訓練でも受ければ、そのくらいのことはできないわけじゃない。いや絶対できるはずだ。できなくちゃいけない。そうでなければ、目の前にいるこれはなんなんだ？

巡はぼんやりと座り込んだまま、目の前で胸を張る少女を眺めることしか出来なかった。

……4……

だけど人間じゃないって。
人間にしか見えないのに、人間じゃないってどういうことだ？
かといって、犬や猫みたいな動物だの、昆虫だのという訳でもない。
少なくとも今はっきりわかるのは、巡にとって今まで見たことも会ったこともない種類の『人間じゃないもの』ということだ。
「人間じゃないって、魔物とかって、じゃあなんでそんなのが急に僕の目の前に出てくるんだ！」
混乱する巡に、少女はニヤニヤと笑いながら答える。
「だからそれを説明してやろうというのに、ぬしが逃げるから余計な手間になるんだろうが」
「……ッ」
当然の反応だ。
そう言い返そうとした瞬間、玄関のドアがガチャリと開いた。

「巡なの？　なあに？　家の前でそんな大きな声で」
ひょっこりと顔を出したのは、巡の母、由美香（ゆみか）だ。
「母さん」
「やっぱりメグね？　んん？　お友達？」
巡が食って掛かっている相手の少女を見とめて、由美香はキョトンと彼女を眺める。
「違……」
「そうだ、お友達だ。なんだ、ぬしの母親かの。これはまたぷりてぃーなおなごだの～」
専業主婦である母が家にいるのは当然で、玄関前で騒いでいれば発見されてしまうのも至極当然だ。それを失念していた巡は母と少

女を交互に見てひとり焦るが、「ぷりてぃー」とか言われた由美香の方は、あからさまに喜色満面になった。
「正直ないい子ね～。メグったら、こんなところで立ち話してないで、さっさと家に入りなさいよ」
巡は頭を抱える。
少しは疑ってくれないか、母親。こんな歳の離れた友人を見たことなんてないはずだ。その辺で出会った子と、速攻打ち解ける性格でもないのだって知ってるだろうに。けれど、だからこそこうやって玄関前に顔を揃えてしまっている限り、母親から見てお友達にしか見えないのも道理だ。
得意気に『お友達』だと、巡の足に腕を回す少女を振り払いにかかっていると、玄関で別の気配が動いた。
「メグ、帰ってきたの？」
うわ。巡はげんなりとした顔になる。
母の背後から顔を出したのは、姉の芽衣だ。別に姉を嫌っている訳ではないが、さらにこの場の混乱を増幅させそうな存在ではある。
「メグってば、私よりも先に帰っちゃって、どうしてこんなに遅くなるのぉ～？　……あら」
ブンブンと足を振る巡に引っ付いている少女を、ぼんやりと眺める。
「もしかして、デートだった？」
バカをいうな！
心なしか寂しそうな表情を浮かべる姉。
誤解だ寂しがるな！　いや、そうじゃなく！
「部屋に行く！」
これ以上ここでやいやいと言い合っても仕方がない。そうでなくとも騒がしい家族がここに二人もいるのでは、とてもお話し合いなんて出来る訳がない。そもそもなんでお話し合いなんてしなければならないのか、その点が巡には本当に謎だったが、直面してしまった出来事は、解決しなければどうしようもない。

「おやつないから、買って来たらお茶持って行くからね～」
少女を引きずって玄関を通過し、二階にある自室に向かう巡に、由美香が声をかける。が、巡はそれに返事もせずに、ズンズンと階上を目指した。

自室に滑り込み、バタンと勢い良くドアを閉める。

「最近の家は縦にでっかいの～。それに木の匂いはするのに、姿が見えないではないか。どうなってるのだ」
巡の家は、木造モルタル二階建てだ。けれど確かに、目に見える場所にあからさまに発見できる木材は少ない。この家から木の匂い、とやらを感じるこの少女は、一体何なのか。
「お前、何なんだ。なんで僕をつけ狙う？」
「人聞きの悪い……」
詰め寄る巡に、少女は呆れた顔を見せながらも、トコトコと部屋の奥にあるベッドに向かう。そこにボスンと跳ね上がって腰掛けた。どうやらそこが一番居心地が良さそうだと狙いを付けたらしい。
「わちがぬしと会ったのは、別にわちが狙ったからではないよ。むしろ、原因はぬしの方にあるんだがの」
「何だよ、それ」
「ぬしがわちを発見したのは、ぬしが持つ『逢魔（おうま）』の力ゆえだ」
「逢魔？」
巡は、オウム返しに聞き返すことしか出来ない。
「わちが人間ではないということは理解できただろう。そこから話を進めるがな。この世界は、千年ごとに時代を変えて、ふたつの存在の安定を保ってきたのだよ」

生の刻と、魔の刻。

少女はふたつの時代をそう称した。

「生の刻とは、ぬし等のような命ある者たちの繁栄の時代を差す。そして魔の刻とは、わちらのような器や命を持たず、魂だけを持つ存在の繁栄期のことだ」
命が無く魂だけ、というのが、巡には言葉だけでは理解できない。だって普通に動いてしゃべってるじゃないか。
「まあ疑問もあろうが、大筋だけは最初に理解してくれ。つまり、これまで千年の間続いた生の刻が終わりを告げ、これからは魔の刻に移行する、その移り変わりの時代なのだよ、今は」
生の刻においては、少女のような『魔物』と称される存在は、力が弱まり、ひっそりと姿を隠す。対してこれから来る魔の刻においては、その立場は逆転する。
少女は、そう解説した。
「なんだそれ。じゃあ、これからの千年は、人間は消え去るとでも言うつもりか？」
バカバカしいにも程がある。
が、少女はそんな巡の言葉には、首を横に振った。
「生きている者というのは、魂だけのわちらとは存在する力自体が違うからの。わちら魔の刻の住人には存在しない『生命力』を持っているから、消えてしまうことはないよ。ただこれからは、魔物と呼ばれる存在の力が強まる。それらを実際に目にする人間も多くなるだろうよ。少なくとも、人間と同じくらいの数はいるであろう魔物が、徐々に目を覚ましだす。そしてそれらが世界を闊歩し出す。まあ、時代の影響で生きている者の数は少しは減るかもしれんの。これからの千年は、そんな時代だ」
まあ良いではないか、と、少女は高笑いする。
「どうせぬしが生きているのは、せいぜい移行の期間だけではないか。その後の世界など、どうでも良かろうよ」
「……移行？」
うむ、と少女は頷く。
「生の刻から魔の刻までの移行。これにはきっと百年くらいはかか

る。本格的な魔の刻を迎える頃には、今この世に生きている人間の殆どは、残っておらんだろうよ」
そう説明をされれば、そうなのかと思うしかないが。
実際に、百年後の世界のことなんて考えたってピンとこないが、だからといって「そんな未来の話なら、まあいいや～」と笑い飛ばせる訳はない。だって今自分は、人間の危機を宣告されているのではないか？
「なんでそんなことが起こらなきゃいけないんだ」
食って掛かりそうな勢いの巡に、少女はプゥ、と膨れてみせる。
「わちに怒るな。そういう仕組みなのは、どうしようもなかろ」
「そんな無責任な」
これは世界の流れであって、少女のせいではない。そのような説明をされ理屈ではわかっても、誰かのせいにしてしまいたい巡だ。聞かされた話の内容は、巡にとっては事件のようなもので、そして犯人のいない事件など自分には理解できない。天災のようなものだと説明しても納得できるかどうか。
「……結局人間は自分本位だの。わちらは千年間もずっとこの時代を待っておったのだぞ。わちらの存在を隅に追いやって、記憶からも外してしまったのは人間の勝手ではないか。わちらはこの世に存在すらしてはならんということか？」
そういうわけでは、ないけれど。
「昔から人間というのは、他の存在を許さなかったな。人間以外の生物の方が、人間より知能は少ないが、あるがままを受け入れてくれるだけ楽だの。人間は己が世界の王者とでもいうような顔をして、少し異なるものは徹底的に排除しようとする。そんな強い精神を持つ者が力を満ち溢れさせる生の刻では、魔物など殆どこの世に姿を残すことなどできん。ずっとわちらは、目に見えぬ存在となって眠って待つことくらいしか出来んかったわな」
少女はちろりと巡を睨みつける。口角をつり上げたままのそれはどこかあきれたような表情で、怒っているような素振りではなかっ

たが。
しかし、そうは言われても。
魔物なんてそんな存在、自分はこれまでこれっぽっちも知らなくて。いや、知ってはいたが、現実にあるものだなんて思いもしなくて。記憶していないことを人間自身のせいだと言われても、巡にはやはり素直に納得することが出来ない。
「これから増えるだろうが、まだ逢魔の力を持った人間は少ない。だが、いち早く時代の移り変わりを自覚できるぬしは幸運ではないか。しかも優し～いわちが、いちいち言葉で説明してやっているのだぞ」
ありがたがれとでも言うつもりか。
大体、巡には逢魔の力というのが何なのかわからない。
「わちらの様な存在は、生ある者には視覚で捉えにくい。そんなわちらを認識する力を『逢魔の力』というのだ。今は数が少ないが、これから世界が魔物を受け入れる体勢になれば、その力を持つ者も増えてくるだろうよ。それは生ある者が力を増すからではなく、わちらの存在が強くなって、認識しやすくなるからだが。ぬしはつまり、生ある者の中でも敏感な方だったと、そういう訳だな」

「……」
一度に沢山の説明をされて、巡は混乱の渦の中にいた。即座に理解しろと言われても難しい。
「まあいい。本題はこれからだ。わちがどうしてもすぐにぬしに説明をしたかった訳はな、今後ぬしが困る事態に陥るだろうなと思ったからでな」
そう言う割に、少女は悪びれもない様子でニヤニヤと笑っている。この少女、この表情がニュートラルなのだろうか。
「いちどわちという存在と接触したからにはな、ぬしはこれから次から次へと生無き者と出会うことになるだろうな」
「！？」

「一度開いた力のフタは、二度と閉まらんのだよ。覚悟しておくと良いぞ」
覚悟と言われても！
巡は唖然とする。
「そんなバカな話があるか！」
「認めよ。そう深く考えることもない。わちのような、ちと人間とは違った存在との出会いがあるだけだ。賑やかになるな～くらいに思えば良いじゃないか。なんなら知り合いを紹介してやっても良いぞ」

巡はめまいを覚えた。
考えれば考えるほど、混乱の渦に嵌まっていく。本当にこの幼女が人間ではないのかとか、そういうことさえ、どんどんわからなくなって。
誰かが出てきて「冗談だよ」と言ってくれるのを、切に願った。
もちろんそれは、叶うことはなかったけれど。

……5……

冗談だよ、と言ってくれる人間の代わりに、おやつを持った由美香が入ってきた。

「おまたせ～。天笠さんのとこの羊羹で良かった？」

近所の天笠（あまがさ）和菓子店は成瀬家の馴染みだ。にしても母、チョイスが渋すぎる。対して飲み物がアイスレモンティーというあたりが、何が何だか。

由美香は持ってきたトレーを一度巡の勉強机に置くと、壁際に立てかけてあったローテーブルをいそいそと部屋の中央に設える。

「かわいいのね～。お嬢ちゃん、お名前は？」

ニコニコと笑う由美香に、少女もニコニコと笑い返す。

そしてクルリと、巡に向き直って囁いた。

「わちの名前、何がいいのかの」

「！？」

「わち、特に名前など持っておらんでの。ぬし、適当に決めてくれ」

なんだって！？

「そんなこと急に言われたって、無理に決まってるだろ！」

あくまでボソボソと。何かを囁きあう二人を、由美香はニコニコと見守る。

「ほれほれ、早く決めんと、母に疑われてしまうぞ。人間には普通名前があるモノだからの。わちが人間でないなどと、どう説明する気かの」

「～～～～ッ！」

友達として家に上がりこんだからには、名前くらい聞かれるのは当然かもしれないが、巡はそこまで考えていなかった。というか、相手に名前がないなどと、思いつきもしなかった。

でも名前って。
名前……。
……名前……。
「……かぼ」
ようやく出た一言に、少女はくるりと由美香に向き直って笑った。
「”かぼ”だ」
「かぼちゃん？　可愛らしい名前ね～」
そうか？
「どこの子なの？　この辺じゃ見ないわよね。最近引っ越してきたとか。こんな夕方までお出かけしてて大丈夫なの？　おうちの方、心配してない？」
由美香、母パワー炸裂。
悪びれずに質問攻めにする由美香に、たった今かぼという名のついた少女はひたすら笑顔で対応した。
「家も家人もないから大丈夫だ。わちはずっと雑木林で木にぶら下がっていたからの～。おかげで衣食住にも困る勢いでな。良ければここに住まわせてもらっても全然かまわんのだが」
おいおいおい！
母親にバラしたくないんだろなんて脅しておいて、台無しじゃないか！
相変わらず、巡の叫びは声にならない。
「あらまあ……大変なのねえ」
「母さん！」
「まあ別に、わちは人間と違って飲み食いせんでもちーとも困らんのだがの、やはり潤いは欲しいではないか」
そうねそうねと、由美香は頷く。わかっているのか、この母親は。
「永い間寂しい思いをしてきたというのにの～、この男は、すこぶ

るわちを邪険に扱うのだよ、母上」
「まあ……ごめんなさいね、私の教育、何か間違ってたかしら」
間違っているのはこれまでの教育ではなく、母自身の感覚ではないか。
「わちが人間ではないからと言っての～。人間でなくたって、犬でも猫でもクンクンにゃーにゃーと鳴いていたら、つい連れ帰ってしまうのが、健全な子供の精神というものではないかのお？」
「ああ、そうね、そうよね。でもゴメンなさいね、私、子供たちが一度カモを拾ってきた時に、元の場所に戻して来なさいって怒っちゃったことがあったのよ～」
数年前、それで巡は大泣きした。美しいというか、今となっては少々恥ずかしい思い出だ。
それはともかく。
人間ではないと自称する少女と、それを華麗にスルーする母。このやりとりが理解できない巡を、頭の固い人間と分類してしまっていいものか。もっとも、巡は彼女が人間ではないという証拠のようなものを見せられている当事者だから焦っているが、案外母親という人種は幼い子供の虚言にはおおらかだ。自分の子供ならともかく。
「カモは野生だでな。その判断は正しいよ、母上。だがわちは渡り鳥ではないのにの～」
「そうよね～。いいわよかぼちゃん。いくらでも我が家にいてちょうだい！」
「母さん！　何言ってんだよ！」
「だってかわいそうじゃない。人間じゃないんなら別に大丈夫でしょ。養子縁組とかの必要もないんだし」
母、あなたの脳はブラマンジェなのか。
全部冗談だとでも思っているのだろうか。いやそうなんだろう。だが、ここで母が冗談のつもりで了解してしまえば、本当にこの魔物はここに住み着いてしまう。ような気がする。
「じゃあ今日からご飯はひとり分余計に作らないとね。腕が鳴るわ

～。楽しみにしててね！」
由美香は上機嫌で、部屋を出て行った。
……そんな馬鹿な……。
一体どういうつもりか。母もこの少女も。
本当にこいつがここに住みついたら母はどんな反応をするのかと、巡はただただ頭を抱える。その時になってやいやいと説明を求められても、巡にはどうすることもできない。もちろん、今ここで責めたてられたところで同じことだが。
「ものわかりの良い母上だの。とてもぬしの母とは思えん」
「冗談だと思ってるだけだ！」
多分、きっと。
「そうかの？」
そんな巡に、少女はただ笑う。相変わらずの余裕の笑みだ。
バレたら困るのは巡だなどと脅すようなことを言っていた割に、彼女はまったく正体を隠すつもりがない。むしろ積極的に自白しているあたり、わざとやっているとしか思えない巡だ。
「ところで～。『かぼ』か、なかなか良い名前ではないか。良く思いついたの」
よく言う。思いつかなかったらどうするつもりだったのか。
彼女のことだから、その時はその時でのらりくらりとかわすつもりでいたのかもしれないが。結局自分だけがムダに慌てる羽目になるのは変わらないのだろうと、巡はため息を漏らす。
「考えに考え抜いた、お前にぴったりの名前だ。可愛いだろう」
半ばやけくそになって、巡は返す。台詞に反して、その表情と声音は大変に険悪だ。
「可愛いか、そうだの。かぼか、かぼ……。うん、可愛い名前だの」
否。
巡はこの少女を初めて目にした時に最初に視覚で認識したものを、思いつきでその口上に乗せてしまっただけだ。
すなわち、巡の眼前に広がった「かぼちゃパンツ」を。

名前の由来がかぼパンであることなど知る由もない少女は、自分についた名前にご満悦なようだ。

聞きたいことなんてまだ山ほどある。

前途の多難を感じて、巡はふたたび深い深いため息をついた。

……6……

食ってる。本当に食ってるよ。

結局夕食の時間になってもかぼを追い出すことが出来ず、巡は複雑な面持ちで一家の団らんの中にいた。

初対面で居候を申し出る方もアレだが、本当に夕飯まで用意する由美香もナニだ。それとも、今日一日のお泊りごっことでも思っているのか。これまで紹介されたこともない初対面の幼女なのに？

巡の父親は、単身赴任で家を空けている。だから現在家を守っているのは母の由美香で、あとは二人姉弟の芽衣と巡しかいないのだから、こんなに無用心でいいものか。

「最近の食べ物はよくわからんの。このやたら乳臭いトロトロしたのはなんだ？」

かぼは、まるで生まれたときからの家族のように、躊躇も遠慮もなく夕食を楽しんでいる。

「それはシチューよ。食べたことない？　おいしい？」

「初めてだが、これは美味いぞ、母上。もっともわちは、基本的に人間の食べ物であれば好き嫌いはないがの」

何気に普通に会話が成り立っている。居候騒動を冗談だと思っているにしても、かなりノリが良い方と言えるだろう。

「かぼちゃんって～、人間じゃないって、じゃあぁあ犬とか？　それとも猫なのかな」

芽衣ですら、こんな調子だ。

大体、人間じゃないとなれば犬か猫しか思いつかないのか、この姉は。

「犬も猫もマネ事くらいはできるが、あやつらと同じ飯を食わされ

るのはかなわんぞお～」
かぼは、何気にオヤジっぽい。
「で、かぼちゃんって、メグの、か、彼女とかじゃないよね？」
芽衣、見た目幼児に真顔で質問。冗談ではなく、本気で確かめたいらしい。
「芽ー衣！」
「なっははは、カノジョとはあれだな、コイビトというヤツだな！
それは無理だ。そういうのはきちんと人間の中から選んだほうがよかろうよ」
それにしても、巡のように決定的場面を見たわけでもないのに、母も姉もかぼが連発する「人間じゃない」発言を、怪しがりもせずに受け止めているあたりが、巡には理解できない。信用しているいないはともかくとして、しつこくそんなおかしな発言をする少女を苦もなく受け入れているなんて。

夕食後、巡はかぼを自分の部屋に押し込んで、夕食後の洗い物に精を出す由美香に詰め寄った。
「知らないヤツに夕飯まで作ってやるなんて、どうしちゃったんだよ。人間じゃないなんて言われて、変だと思わない？」
こんなおかしなのと一緒にいて平気な顔をしているなんて、巡には母や姉の感覚が、まったく理解できない。もしこの場に、留守にしている父がいたら、どう思うだろう。
由美香はそんな巡にニッコリと微笑んでみせた。
「じゃあ～」
あまりにも、のんびりとした口調。
「メグがちゃんと、おうちに送り届けてあげればいいじゃない」
もっともな意見だが、それを出来れば苦労はない。が、由美香は無言のままの巡に、お構い無しに続けた。
「それが、できないんでしょ？」

ギクリ。
「ご家族のもとに帰してあげられない事情があるんでしょう？　それが出来るようならとっくにしているんじゃない？　だとすれば、あの子には家に帰れない事情があるってことよね。例えば、本当に帰る家がないとか」
もしもまったく知らない子にいきなりまとわり付かれているのなら、それを勢いであれ家に上げるような息子でないことを、由美香はよく理解している。何しろ母親なのだから。そしてもしも彼女がいわゆる普通の理由でただ家に帰りたがっていないような状況なら、巡は由美香にそれをきちんと話すだろう。
「人間じゃないとか～、そういうこと、あの子が言った時だって、あなたはあんな風にうろたえないわよね。それが、冗談なのなら」
ぼんやりしているように見える母親、これできっちり、巡のことを観察している。
「あなた、否定しなかったじゃない。お母さんは～、それがどれだけありえないことでも、バカバカしく思えることでも、息子のことは信じるわよ。世界中が信じてくれなくてもね」
寛大すぎる母親、だろうか。
これほどに無心に、自分の息子のことを信じきることができるなんて。
それともまさか、巡のわからないところで別の計算でもあるとか。でもそんな計算があったとして、それが何であるのか、それによって母にとって何か有益なことがあるのか、さっぱりわからない。
多分本当に、息子を信じているのだろう。
もしも本当に、ここに魔物がいると息子が言ったとしても、それさえも。
「じゃあメグ、一応確認するけど、かぼちゃんをうちに置いておくとして、それで困る人が、どこかにいるかしら？　何か社会的に問題が生じる？」
巡は、首を横に振るしかない。

正直、かぼのことは何も知らない。知らないけれど、かぼの言うことを鵜呑みにするとすれば、彼女は現在天涯孤独で身寄りのない魔物だ。少なくとも、かぼのやってみせたあれやこれやは、とても人間のできることとは思えないし。もしも彼女の言うとおり、うちに居候させたとすれば、彼女が喜ぶ。それだけだ。魔物をうちに住まわせて、何か別の問題が起きるとしても、それは今の巡には想像だにできないことで。

「ならいいじゃない？」

「母さん！」

「かぼちゃんのことは、後でゆっくりと知っていくからいいわよ。それでもしも何か問題が起きたとして、お母さんはメグのせいになんかしないから大丈夫」

それは充分すぎるほどわかっている。わかってはいるが、そういう問題だろうか。

「女の子の家族が増えるなんて、素敵じゃない」

結局そこか！

すでに女二人男ひとりの三人家族の中にあって、さらに女が増えるのか。

第一、ご近所にはどう説明するつもりなのだろう。

「とにかく、あの子に帰る場所がないのなら、うちに置いてあげなさいな」

巡には、返す言葉がない。

母の発言は、この家の中において最大権力なのだ。

そしてだからこそ、家族のためにならないようなことは、決してしない母でもある。

でもあの子をなあ……。

ここでも巡は、ただため息をつくしかなかった。

……7……

ブラブラと道を歩く巡の後を、かぼはトコトコとついてくる。
悶々とした体の巡とは正反対に、かぼの表情は呑気なものだ。何気に楽しそうでもある。
昨日の夕方からの騒動のせいで、巡は夜もまともに寝付けなかったというのに、かぼの方は人間ではないと自称している割に、まさに爆睡状態だった。もっとも、最初に出会った時も幸せそうに眠り込んでいたのだけど。

「大体、なんでお前はあんな木の上に絡み付いてたんだ」
後ろにいるかぼを振り返ると、彼女はキョトンと巡を見返した。
「別に、騒ぎが少なくて寝心地の良さそうなところを選んだだけだ？　何しろなあ、わちが眠りに就いたのは、これから生の刻が来るという時期だったからの」
「何の関係がある」
なんだ、そんなこともわからんのか、とかぼはまた何かを悟ったような表情になる。わからないもなにも、巡にとっては魔物などという存在に出会ったのさえ初めてなのだから、その何たるかだってわかりようがない。
「生の刻が来て魔物の力が弱まるとはいえ、全ての人間に魔物が発見されないというわけではないからな。うっかり寝こけているうちに、もしも生の刻にわちらが発見されて、それで騒動が起こったとしたら、人間の持つわちらに対する負の感情に勝てないからの」
うっかりすれば、そのマイナスのパワーにかき消される魔物も出てくる。だから魔の刻に属する者たちは、生の刻には皆一様にその姿を隠そうとするのだ、とかぼは語った。
「それにわちらは、生の刻の住人を脅かさないように、気を遣ったりもしていたのだぞ～、これでも。急に見知らぬ物体が出てきたり

したら、人間は驚くだろ」
それをやってくれたではないか、昨日。それとも魔の刻になるのだから、もう解禁という訳か。
「かぼは、千年間眠りっぱなしだったって訳か？」
「いやあ～、たまには目を覚ますがの。メグと会う前に目覚めたのは、うん、百年ほど前に一度……かの？　そうやって永いこと眠って待つしかなかった身なのだからな、少しは労われ」
と言われても、どのように労わればいいのか巡にはさっぱりわからない。
「む」
急にかぼが、表情を険しくした。
「なんだよ」
「これは……この匂いは」
これまでにない俊敏さで、かぼはグルリとかぶりを振った。
「あそこに見えるアレは」
かぼの視線の先にあるのは、成瀬家御用達の天笠和菓子店だ。
「あれに見えるはもしや、しゅーくりーむというヤツではないか！？」
かぼが、店頭に山積みに陳列されているビシッと商品を指差した。
本当だ。巡はいぶかしげな顔をする。なんだって天笠、和菓子店のくせに洋菓子にまで手を出しているのか。
「しゅーくりーむとなーーーっ！！」
かぼは、加速装置起動と言わんばかりの瞬発力で駆け出した。
が。
ドタ――――――ン。
景気良く、前のめりに転ぶ。
由美香にはかせてもらったフリルのワンピースのスカートがめくれ上がって、またもかぼちゃパンツが丸出しになった。

しかし屋根まで跳躍可能なこの幼女、なぜ普通に路上でコケるのか。狙っているのか。
「メグ……わちの……わちのことはいいから……早くぬしはしゅーくりーむを……」
「シュークリームは逃げないけどな。なんで僕がお前にシュークリームを買ってやらなきゃならないんだ」
路上に倒れたままのかぼを、巡は冷たい視線で見下ろす。
「なんてケチんぼなんだ……」
「ていうかお前、最後に目覚めたのが百年前って嘘だろ」
ギクリと、かぼが硬直した。
シュークリームという存在を知っているあたり、結構最近外をウロついていたんじゃないのかと巡は想像する。
かぼは、ははは、と乾いた笑いを洩らした。
「いや、そうだの、オホン。訂正するなら、メグの前に最後に人間と会話したのが百年前かの……多分、おそらくは……」
まったく。
巡はため息を洩らす。
別に隠すようなことでもないのに、と思わなくもない。そうまでして人の同情を引きたい訳か？　それにしても、殆ど眠って過ごしたと言う割に、あまりジェネレーションギャップを感じないということに、巡は今気付いた。
「なんでお前、それなりにこの世界に馴染んでるんだ？　全然生きてた時代が違うんじゃないか？」
生きてた、という言葉が合っているかどうかはともかくとして。
「そりゃあ、わちらはいわゆる物の怪というか物の化だからの。世界の変動は、眠っていても勝手に吸収してしまうのだよ。だから世界への適応は早い」
偉そうに語るが、とりあえずは起き上がってくれないものか。
「物の化？」
かぼは、ようやく起き上がった。

本人はまったく無頓着そうなので、巡は仕方なく身体についた砂を払ってやる。放っておいたら、通りすがりの人にどう思われるかわからない。
「魔物にも色々あるがの。最も多いわちらのような魔物は、いわゆるこの世界の物質が転じて魂を持った存在だ」
木とか、火とか水とか石とか。人間が作った物から生まれる者もいる。
「人の言う座敷童子とかな。あれは家に憑く霊のように言われることもあるが、要は家から生まれた物の化だ。そういう、物質が転じて意志を持つようになった物の化は、世の情報を感知するのも得意なのだよ。自然と取り入れてしまう、と言うべきかの。もっとも、感知したくない変化さえも、取り入れなければならない例もあるが」
「なんだよ、それ」
「そのうちわかるだろう」
ニヤリと笑ったかぼは、あらためて和菓子店を見やる。
「ぬしが植物採集に行きたいというから、こうして付き合ってやってるのだぞ。褒美のひとつも寄越してくれても良さそうなものだがの」
こんな時ばかり子供らしい仕草で、かぼは指をくわえる。
ひとりで出かけようとしていたのに勝手について来られた巡にしてみれば、不本意極まりない言い分だ。というか思い出した。週明けにある実習のために、巡は近所の雑草を観察に来たのだった。
「そうだ。こんなことをしてる場合じゃない」
巡はさっさと歩き出した。
「メ〜グ〜」
「うるさいな。そんなに欲しければ、お前に甘い母さんにでも買ってもらえばいいだろ」
歩みを止めない巡に、かぼは仕方なく再びトコトコと追いついて歩き出す。
「親睦を深めるために、二人でしゅーくりーむを食べたかったのに

の〜」
そういうことは、自分で金を払って買ってから言ってくれ。
「メグはかぼに冷たいの。なんでだ？」
「常識で考えてくれ」
普通、急に現れた得体の知れない者にたやすく心を許す人間は少ない。巡の家族が変わっているだけだ。だが、この魔物に常識などという言葉が通じるはずもないということを、巡はそれを口に出してから思い出した。
「今度の逢魔が時は……人間も魔物も苦労しそうだの」
かぼはボソリと呟く。

それはおそらく、頑なな人間のせいで。
でもだからって。

こんな時代が来ることへの覚悟なんて——少しも出来て、いないのに。

……8……

結局、週末はかぼの騒動のせいで予習どころの騒ぎではなかった。
実習のために、図鑑でも眺めて食える草の目星をつけておこうとか思っていたのだが、そのために外に出ても出かける先にかぼがついて来て、あれこれとのべつまくなし話を始めるから、調査にならない。
せっかくだからとかぼに野草について訊ねてみても、結果は芳しくなかった。かぼいわく、いくら彼女でも超自然的に様々なことを知っている訳ではなく、あくまで世の中の知識は人生の先輩程度だ、ということだ。
つまりが、野草については割と一般的なレベルでしか知らないらしい。
世の中の大局的な情報は勝手に取り入れるが、たとえば野草の名前まですべてが頭に記録されるわけではない、ということか。
まったく、おかしなうえに役にも立たないものに取り憑かれてしまった。

月曜日、実習となるのは三～四時限目。
「名簿順で班分けするぞー」
授業の合間の休み時間の後、再び教室に入ってきた担任、朝比奈がやたらはりきって声を上げた瞬間。
「なんだ。行き当たりばったり食用植物を探す授業なのか。こんな時ばかり予習をするなんて、メグはズルっこだの」

「――――！！」
自分の席に座っていた巡の真横に、かぼがいた。
ガタン！！
思いっきり立ち上がってしまう巡。
「静かにしとけ、メグ。心配せんでも、他の者にわちの姿は見えておらんよ。だがぬしがわちを、ここにいる者として扱えば、他の者にも見えてしまうぞ」
「～～～～！！」
「おいおい成瀬。どうしたあ？」
急に立ち上がった巡に、朝比奈が呆れたように声をかける。クラスメイトも何事かと巡を見るが、確かに誰もかぼの存在に気付いていない。ように見える。
「……あ」
引っ込みがつかなくて、巡は逡巡する。
「あの……トイレ」
ドッと教室が沸いた。
「そりゃあ外に出る前にはトイレタイム取るつもりだけどな。今すぐか？」
むしろ休み時間に行っておけと言わんばかりだ。実際その通りだが。
「が、ガマンできません！！」
教室中から笑いが起こる。なんで自分がこんな目に。
行って来いよと笑う担任を尻目に、巡は脱兎のごとく教室から逃げ出した。もちろん、その後にはかぼもついてくる。
「学校にはついてくるなって言っただろ！」
授業中、誰もいない男子トイレの中で、巡はかぼに怒鳴りつける。

いくら人がいないとはいえ、あまり大声を出すのはどうかと思うが、巡にそんなことを考える余裕はない。
「学校とやらを見てみたかっただけだ。ケチケチするな。さっきも言ったが、他の人間にかぼは見えておらんよ。ただ、メグがかぼに話しかけたりすれば、その場にいる皆に発見されてしまうだろうがの」
「どういう意味だ？」
かぼは、どこで憶えたのかビシっと人差し指を立てる。
「わちらはぬしのように逢魔の力のない者にはまず姿から見えない。だが、見えにくい、というだけで、そこに存在するのは確かだ。ぬしにはわちが見えているだろ？　だからな、ぬしが皆の前でかぼと話をしたとすると、皆そこに何かがいるものだと認識する。そうやって意識をされれば、ほとんどの人間にわちの姿は見えてしまうのだよ」
もともと魔物を認識する力のある者には、その姿は視覚として捉えられる。だが、その力のない者でも、そこに誰かがいるのだと脳に情報を送って意識すると、見えてしまうものらしい。特に、これからの時期は。
早い話が、逢魔の力を持つ人間とそうでない人間の差は、その程度ということだ。
力のない者は、そこに何かがいるという情報を受けることで、後天的に魔物を目で見ることができる。対して逢魔は、それがなくとも自発的に魔物を発見してしまう。
「メグを介してわちの存在を知った者は、もうメグなしのわち単体も認識できるようになるがの。もうその人間にとって、わちは”そこにいる”存在になるからの」
なんという不安定な存在。
しかしそれでは、かぼのように一見魔物に見えないようなものを発見してしまった場合、見分けがつかなくて困りそうな気がする巡だ。たとえばもしもかぼが普通に街中を歩いていたとしたら、巡は

誰かに「あんなところに小さい子がひとりでいる」などと言ってしまうかもしれない。その場合、言われた人間はどうなるのだろう。
「あれ、さっきまで誰もいなかったような気がするんだけど勘違いか」みたいなことになるんだろうか。
なんだかとても面倒くさい。

まあそれはともかくとして。
今の問題は目の前のかぼだ。
「だったらボロが出ないうちに帰れ！」
巡は怒鳴るが、かぼはどこ吹く風。
「いいじゃないか～。ボロを出すも出さないもメグ次第だぞ？　わちのことは知らん振りを決め込めば良いだけの話だ」
帰る気はさらさらないらしい。
ここで長く話をしていても、何事かと疑いをかけられるだけだ。
「～～～～～～～……」
問答していても仕方がない。というか、多分お話にならない。
「絶対、変なちょっかいかけるなよ……」
それだけ言うと、かぼは任せろとばかりに胸を張った。

何というか……先が思いやられる。

……9……

実習の最初に、巡たち六年一組の面々が向かったのは、巡がかぼと出会ったあの雑木林だった。

確かに学校のすぐ裏手だし、野生の植物も多い。ちなみにこの辺りの土地の所有者は、藤乃木学園の理事長である。実習の事前承諾も完璧だ。

「先生の目の届かないところに行くんじゃないぞー。三十分で集合な」

朝比奈の合図と共に、持たされたストップウォッチを確認しつつ、それぞれの班があちこちに散る。が、この年頃の子供たちだけに、そこいらの雑草を引っこ抜けばいいと決め込んで遊びに走る者から、何とか食べられる物を探そうと必死になる者までと、反応はまちまちだ。

「きのこは採取禁止な。触るのもダメなのがあるから気をつけろ。それと、採ったものは、一度は自分で口に入れてもらうからな～」

朝比奈の言葉に、生徒たちは「うげ」と表情を変えて、そこそこ真面目に探し出す。もちろん毒性のある物は外すつもりだが、朝比奈はやると言ったことはやる教師だ。食わせると言ったからには、それが雑草でも本当に食わせる。

まったく予習できなかった巡は、班で固まってあれこれと探しながらも、かぼの方をチラチラと気にする。この前まで眠りこけていたこの場で、かぼは楽しそうにひとりで遊んでいる。確かに皆にかぼの姿は見えていないようだが、逆に蹴り飛ばされたりしないのだろうかと思うが、これが器用にお互い避けているというか、自然と接触しない。

いや、アレを心配している場合じゃない。

巡は植物の採集に集中力を戻した。
「成瀬～。この赤い実って、良く見ない？」
同じ班の女子に声をかけられて、巡はしげしげとそれを眺める。背の低い木に小さく実る柔らかい実は、確かにどこかの家の庭で見たことがあるような気がする。けれど、それが食べられるかどうかはわからない。一見食べられそうに見えなくもないが、今ここで試してみるのは厳禁されている。毒のある物だと困るからだ。
「取っていってみる？」
いくつかの実を、潰さないように採ってビニールの袋に入れた。
あちこちを目で追っていた朝比奈は、そんな巡たちの様子も視界に入れている。
――いいもの見つけたなあ。
朝比奈は声に出さずにほくそ笑む。その木は一箇所にしかないようだから他の班は気付いていないようだが、あれはそのままで食べても甘いし、薬にもなる実だ。巡は全然予習など出来なかった様子だが、ひとつはクリアしたらしい。

「メグ～、メグ～」
かぼに呼ばれて、巡は無言のまま彼女に近付いた。
遠目では気付かなかったが、そこには小さな川が流れている。街に流れる河川と合流しているのかもしれない。
「この草、見たことあると思うんだがの～」
気付けば植物採集に参加しているかぼだ。誰にも聞いてはいけないという決まりだが、結局かぼも植物には明るくないらしいから、まあいいだろう。
「たしか食べられると思ったんだがの。しかしこんな形だったかのー？」
怪しいことこの上ない。が、突っ込みたくてもこの場では叶わない。

まあいいやと、それを根ごと引っこ抜いて、数本を仲間のもとに持って帰る。

そうこうしているうちに、三十分が経過した。

全員を集合させて、学校に帰るまでで一時限終了。それから、後半の植物選別が始まる。大したことをする訳でもないのだが、全員スモッグと三角巾着用だ。

「この班は……変わったもの持ってきたなあ」

各班をまわる朝比奈は、巡の班に来て面白そうに顎に手を当てた。

「ユスラウメにマコモに、こりゃパセリか。あんなところに生えてるんだな。ほぼ当たりだが……惜しいな。マコモは、秋になれば何にでも使える食材なんだけどな」

かぼが言っていた草を手にしつつ講釈する朝比奈。しかしこの担任、何気に野草に詳しい。

「ユスラウメはそのまま口に入れてみろ。甘いぞ。同量位の塩で漬けておいても薬になる。パセリは……言わずと知れた、だな。ルールだから一度は食ってみな」

うえ、と嫌な顔をする面々。パセリが単独で好きだという人間は少ない。いわゆる付け合わせのパセリとは姿が違ったから気付かなかった。わかっていたら採って来なかったのに。でも試食からマコモは外してくれたのだから良しとしなければ。マコモは薬草にもなるが、若干刺激が強いから扱いに注意が必要なのだ。

「一応かぼのも正解だったろ？　間違いじゃなかったろ？　季節が違っただけだものな。偉いだろ？　な、メグ？　かぼだってやればできるのだからな！」

ちょろちょろと巡にまとわりつきながら、身振り手振りをくわえてまくし立て、えへんと胸を張るかぼ。

本当にコイツは、他人にバレたら困る自分の立場をわかっている

のか。
「うるさいな、わかってるよ！　少し黙ってろ！！」
つい、振り向きもせずに怒鳴ってしまった。
ピタリと止む、教室内の喧騒。

しまった。

「……それはオレに言ってるのかな？」
笑顔が引きつる朝比奈教諭様。
「いや、違……その」
かぼの存在には気付かれなかったが、代わりに妙な誤解を生んでしまった。
「先生に意見してくれる勇者な成瀬君は、後片付け当番決定な。皆の取ってきた収穫物の残り回収して、放課後教員室に持って来いよ」
バシバシと巡の肩を叩く朝比奈。そういう行動を取る時の担任が本気で怒っていないことを皆知っているから安堵するが、何故巡が急にあんなことを怒鳴ったのか、クラスメイトにはわからない。
「なんだよ、どうしたの成瀬。パセリ、そんなに嫌いだったっけ？」
肝を冷やしたらしい同じ班の男子が、大げさな仕草でこそこそと耳打ちをしてくる。
「ちが、いやえーと、うん、昨日ちょうど家でパセリも食べなさいって口うるさく言われて、それ思い出しちゃって」
「成瀬の家って、パセリも食べなきゃいけないんだ……」
言い訳が苦しい。
なんとかごまかせたようなそうでもないような、けれど他に適当な言い訳も思いつかない。本当に失敗した。

「うっかりだの～、巡は」
ニヤニヤと巡をつつくかぼ。
――誰のせいだと思ってる！！！

今度こそ声を上げずに、かぼと視線も合わせないように注意を払いながら、それでも巡は肩を震わせた。

もう絶対に学校になんて連れて来ない。

巡はかたく心に誓った。

誓ったところで勝手についてきてしまうのだから、どうしようもないのだが。

……10……

放課後になって、巡は職員室に顔を出した。
朝比奈に言われた通り、両手に持つ箱の中にはクラスメイトたちが採集してきた植物の残りが入っている。のはいいのだが、こんなものを集めて担任が何をしようとしているのか、巡には今イチわからない。捨てるのならそのまま焼却炉行きでも構わないと思う。
それとも、巡に説教するための大義名分だろうか。それならただ職員室に呼び出せば良いだけの話だ。
「先生、持って来ました」
巡が朝比奈の机に向かうと、担任は事務椅子をグルリと回転させてにこやかに巡を迎えた。何気に巡の足許にくっついて来ているかぼの方には、視線さえも投げかけない。気付かれることはない、とかぼは言っていたが、なんだか不思議な感じがする巡。すでにかぼの存在から不思議なのだから仕方がないのだが。
「おお、ごくろーさん」
巡から受け取った箱の中を、早速ガサガサとあさり出す朝比奈。
「それ、どうするの？」
「んー、採るだけ採って無駄にするのも、こいつらに申し訳ないからな。使えるものは使おうと……ああ、これとかな」
朝比奈が取り出したのは、どうやらよもぎの一種。使い切れなかったが、結構な人数がこれを持ち帰っていた。
「よもぎは色々と使い道あるからな～。っと、この辺は押し葉にでもしといて、栞でも作らせるか……」
朝比奈、新たな案が浮かんだらしい。
「ところでな、成瀬。お前今日はどうした？　何か悩み事か？」
押し葉にするらしい雑草を選別しながら、朝比奈は巡へと視線を投げかけた。

急にトイレには立つし、実習中もやたら挙動不審だったし、教室では突然怒鳴り出す。詰問されても仕方のない今日一日の巡だ。
「勉学の態度がなっとらんの～」
お前にだけは、言われたくない！！
腕を組んでうんうんと頷くかぼを怒鳴りつけそうになるが、ちらりと横目で睨みつけるだけに留め、巡は何とか言葉を飲み込んだ。今このタイミングでそんなことを叫んだら、本当にシャレにならない。
「すみませんでした。悩み事とかじゃないです」
少々しおらしい口調で否定してみると、朝比奈はハハハと軽快に笑った。
「まあなあ、成瀬だって男だもんなー。他人に言えない悩みのひとつやふたつ、あったっておかしくないけどな！」
そんなんじゃない、と言いかけたが、巡は一瞬躊躇した。男だからかどうかはわからないが、確かにこれも人に言えない悩みと言えなくもない……かもしれない。このままでは血管のひとつも切れてしまいかねない勢いだし。
「話せることなら聞くぜ？　けど言えないモンを無理に聞き出す趣味はないからな。ひとりで悩むってのもアリだ。が、人と共有できれば色々ちがうもんだ」
かぼや魔の刻のことを誰かと共有。
確かにそうできれば、自分の精神状態も大分違うだろうと巡は思う。ひとりで抱えていたら、途方にくれてしまうだろう。そういう意味では、母や姉は共有者といえるかもしれなかった。かぼの存在を知っているというだけのもので、それ以外のことを話し合えるかどうかはわからないが、話してみて、まるで相手にされない相手ではないだろう。
魔の刻とかそういう話はよくよく考えてみれば深刻なことなのかもしれないが、けれど実際のところ目下の巡の悩みといえば、かぼがひょいひょいと巡の行き先についてきてしまうことくらいだ。い

ちいち挙動不審なのだって、ひとりで何かに対し悩みに悩みぬいた末の奇行というわけではなくて、うっかりかぼに反応してしまったゆえだ。

自分にだけ見える存在というのは、本当に面倒くさい。

「ひとりでいると、後ろ向きになりやすい。一緒にいる人間が多くなればなるほど、気持ちは前に向きやすい。そんでまあ、前向きに生きてさえいれば、取り返しのつかない事態までにはそうそう進まんもんだ。あまり深く考え込まんでもな。でもって、誰かのフォローがあるのとないのとでは、いろいろな面で格段に差が出る。見たところ、お前さんはそういうのに不自由してなさそうだけどな」

巡にも、友人はそこそこにいる。クラスで嫌い合っている人間もいない。家族とも仲がいい。けれど今の状況は、おいそれと周りに広めていい問題でもないような気がする。しかしそれはそれとして。

「本当に、悩みとかじゃないです。その、さっきのは、パセリのことで家族にうるさく言われたばかりで、先生に文句を言いたかったわけじゃなくて、うっかり……」

一応矛盾がないように、さっき友人にした言い訳と同じように言っておいてみる。朝比奈は「そっか」と言って笑った。彼が自分で言うように、深入りするつもりはないらしい。少し安心した。

「ま、悟られたくなければ冷静に対処できるようにするんだな。そうでないと周りに心配かけちまうぞ」

軽い口調だが、朝比奈、何気に子供に難しい注文を出す。それともひとりの人間としての意志を尊重しているということだろうか。

「手ぇ出しな」

「？」

言われて素直に手を出すと、朝比奈は巡の掌の上に、小さな茶色の塊をふたつ転がした。

「何これ……」

「キャラメル。オレが作ったの。それでも食って機嫌直せ。……あ、学校では食うなよ。それと、みんなには内緒な」

巡はしげしげと、オブラートにくるまれたそれを眺める。
いちいち小器用な担任だ。

「メグの先生は優しいの～。かぼに飴をくれたぞ」
帰り道、巡に渡されたキャラメルを口の中で転がしながら、かぼは上機嫌で両頬を押さえる。
「お前にくれた訳じゃないよ……」
むしろ自分が今あげたんじゃないかと、憮然とした面持ちで、巡はもうひとつのキャラメルを口に入れる。帰り道だが、学校では食べるなと言われたのだから、まあいいとする。へ理屈だと文句をつける人間は、ここにはいない。
キャラメルは、当然だが甘い。
口に広がる甘さで、ここ数日の疲れが何となく取れていくように感じるのは、あまりにジジくさすぎるだろうか。けれど、心身共に疲れていたのは事実で。
キャラメル効果だろうか、何だか色々考えすぎるのが面倒に思えてきた。

ありのままを受け止めてみた方が、建設的なんじゃないか、と。

あまり深く考え込まなくてもと、朝比奈は言った。どうせ考えようがそうでなかろうが、巡ひとりで変動する世界をどうこうできるわけではないのだから、その波に上手く乗ったほうが楽なのは確かだ。
けれどやはり、かぼに学校に来られるのは困る。じっとしてないし、いつ誰に見られるかもわからないし。巡が持つという逢魔の力とかいうのを、持っている人間だっているかもしれない。
「もう、メグの学校には用がなければ行かんよ」
思っていたことに、そのまま返答されて巡は驚いた。

「わちが行くと、メグは困るようだからの。わちはメグと仲良くしたいだけだ。嫌われてしまったら、意味がないからのー」
散々やってくれた後で、よく言う。
「逢魔が時など、そう深く考えることもあるまいよ。どうあがいたところで、なるようにしかならんし、なるようになる。でも、案外世界は優しいぞ」
「優しい？」
眉を寄せて聞き返す巡に、かぼはいつものごとく笑いかけた。
「世界は命ある者にもなき者にも、平等に存在する力を与えてくれてるだろ。ほれ、こんなに小さい者にもな」
かぼの視線の先に、いつの間にか真っ黒な猫が座っていた。
いつからいたのか。
道の端にいた猫は、ふたりの視線を受けてゆるりと立ち上がると、音もなく歩み寄ってきて、巡の脚に頭を擦りつけフニャンと澄んだ声で鳴いた。子猫と言うには大きいが、近所で見かける飼い猫よりは小ぶりだ。きれいな毛並みなのに、首輪のような「飼い猫」の証は見当たらない。
「そやつも、わちらの仲間よ」
「え？」
ニャーとなく声も、翡翠みたいな目の色も普通の猫とまったく変わらないが――長い尻尾が、半分ほど二股に分かれている。
「！？」
かぼがそれを抱き上げた。
「こやつも魔の刻の住人だ。見たことのないヤツだが……こんな風に、至極本物に近く、力のない者もいる」
ペロペロとかぼの顔を舐める黒猫は、尻尾が二股に分かれている以外はどこからどう見ても普通の猫で、突然人間の言葉をしゃべりだしたり、飛んだり消えたりする様子は見せない。
これも、他の人間には見えないのだろうか。
「ぬし、この辺の者か？　帰る場所はあるのかの。ないならウチに

来るか」
「お前のウチじゃないだろ」
巡は、かぼからその猫を受け取って抱き上げた。
人懐こく、巡の顔も舐め出す黒猫。ゴロゴロという喉の音が、巡の胸の辺りに振動となって伝わる。こうやって抱き上げているのを他の人間に見られたら、この猫の姿も見えてしまうのだろうけど、この猫くらいなら、きっと問題はないだろう。
「な、優しいだろう？　生きる気さえあれば、何とかなるんだものな。そんでもって、そうやって猫を抱き上げるメグも優しい子なんだって、わちは勝手に信じておるのだがの」
「……」
一瞬目を見開いて、すぐに巡はかぼから視線を外した。
急に持ち上げられて多分少し赤くなってしまった頬を、あまり見られたくはない。
「優しくなんかないよ。この猫、かぼが面倒見るんだからな」
ぷいと顔を背けて歩き出した巡に、かぼはグルグルとまとわりついた。
「なんだ、ケチんぼだの、メグは！　共同作業でいいじゃないか！」
「かぼがやるんだよ」
誰の声に反応しているのか、黒猫はニャーンと鳴く。
「かぼがやれって言ってる」
「違う！　メグも世話しろと言っておるのだ！」

やいやいと騒ぐ、かぼの声ばかりがうるさい帰り道を。
少しだけ。
ほんの少しだけ楽しいと感じたのは――ひとりはしゃぐかぼには。
まだ、秘密にしておくことにする。

……11……

外は、生憎の雨。

雨の多い六月なのだから仕方がないが、それにしてもこの時期の湿った空気は、身体中にまとわりつくような感がある。

実習をやった月曜日までは晴れた日が多かったのに、次の日からもう三日、ずっとこんな天気だ。学校から帰っても外に出かけるのもおっくうで、巡はこの三日間、学校から帰ると家に閉じこもりっきりだ。

「雨だのー。退屈だのー。こう湿気っていると、気分まで湿ってくるのー」

かぼはずっとそんなことを呟きながら、巡のベッドの上でゴロゴロしている。月曜日に拾ってきた黒猫も一緒だ。

「退屈ならどこかに遊びに行って来ればいいだろ」

魔物にも湿気なんて関係あるのだろうかと、巡は思う。

「む。メグはこんな雨の中、かぼを追い出しにかかるつもりか」

「そんなことは言ってない」

言ってはいないが、こう何日も同じ部屋の中で、暇だ退屈だと呟かれ続けるのには、さすがに辟易している。そうでなくとも、これまでずっとひとりで過ごしてきた部屋の中に、毎日かぼや猫がいるのだ。慣れない環境に苛つくのも道理で。

「雨はきらいだ」

かぼがぼそりと呟いた。

「メグは知らんだろうが、わちら物の怪にとっては、天候も重要な場合があるのだぞー」

かぼは、ベッドの上で猫と共にゴロゴロと転がる。

「物の怪は、何かの属性から生まれて来る者が多いからな。生きている者のように、寿命や病気で死ぬことがないかわりに、そういった外部からの影響で簡単に消えてしまう者だって多いのだぞ。例えば炎から生まれた物の怪がいるとすれば、そいつは水に当たっただけで消えてしまう。逆に水辺で生まれた者は、長い間水と離れていれば、やはり消えてしまうしの」

それは初耳だ。初耳だが、それは言い訳だろう、かぼとは関係ない、と巡は思う。思ってから、ふと気付いた。

かぼは、一体何の物の化だろう。

「お前は、何から生まれたんだ？」

ふとした拍子の質問だった。けれど、意外やかぼは、巡のその質問に対して珍しく静かになった。

「……」

「なんだよ」

別に悪いことを訊いたつもりはないのに、だんまりを決め込まれて、巡は眉をひそめた。しかしかぼは、その一瞬後にはヘラッといつものように笑う。

「別に何でも良いではないか。わざわざ弱点になるようなことを、そう簡単に教えるヤツなどおらんぞ」

かぼの率直な言葉に、巡は憮然とした。

何だよ、弱点って。

魔物のいわゆる出所は、確かに弱点にはなるだろう。先刻かぼが言ったとおり、火には水をぶっ掛ければいいし、水は枯らせばいい。無論世界中のあらゆる水を枯らすのは不可能だが、つまりその魔物を水から遠ざければいい。

属性が知れれば、弱点も知れる。確かにそうだが。

「調子がいいな、お前は」

眉間にしわを作って呟く巡に、かぼの瞳がキョトンと見開かれる。

「仲良くしたいだとか言ってるけど、結局そんな気さらさら無いだろ。弱点を教える気がないとかって、まるで敵でも相手にしてるみ

たいだよな」
　そりゃあ、自分と異なるものを排除しようとする人間の本能のせいで、物の怪は迫害され続けたんだろうけど。そのせいで人間を信用できないというのなら、わざわざ人間の前に出てきて、馴れ合うことなんて考えなければいい。
「別に、わちはそんなつもりで」
「そんなつもり無くたって、そう聞こえるよ」
　本当は、少し考えれば巡にも理解できるはずだった。いや、実際はわかっているのかもしれない。
　かぼはもちろん巡を敵とみなしてそんな風に言っているのではない。巡に対して秘密にしたいわけではなくて、自分の弱点をわざわざひけらかすような真似をする必要はないということなのだろうと。けれどそれを巡に知らせ、それがもとで、弱点を不用意に露呈することになるかもしれないことを恐れているのだとするなら。
　自分は、まるでかぼに信頼されていないということなのだろうと。
　かぼは、大事なことを何も言わない。自分の都合ばかりを押し付ける。そんな態度で仲良くしたいなんて言われたって、少しも説得力がないと巡は思う。
　かぼに対して怒ってばかりだけど。怒らせているのは彼女の方だと。
「別にそれで構わないよ。好きにすればいい。結局理解し合うことなんてできっこないんだから。どうせ人間は心が狭いんだからな」
　無性にイライラしてくる。
　かぼが出て行かないなら、自分が出て行けばいい。巡は、座っていた椅子から腰を上げた。
「出かけてくる。絶対ついて来るなよ」
　言い残して部屋を出ると、バタンと力強くドアを閉めた。
「……」

ポカンとしていたかぼは、ゴロゴロと転がっていたベッドの上で仰向けになると、黒猫を腹の上に乗せた。
「メグは幸せな中にいるからの……」
生の刻と魔の刻の移り変わりという現実を、人間が本当の意味で知ることは、多分これまでもこれからも、ない。
それだけで幸せなことだと、かぼは思う。
生の刻の住人たちは、ひとつの時代をまたぐことなく寿命を迎えるではないか。その永さを自分の身体と心で痛感することは、決してない。けれど魔の刻の住人たちは、それこそ千年二千年という永き年月の中を、半分は強制的に眠りながら過ごさねばならないのだ。
この年月の、重圧。
その中で起こる、様々な出来事。
これまで、かぼが経験してきた数え切れない、出来事。
弱点という言い方が悪かったかもしれない。けれど、他にどう言えばいいかわからなかった。本当は、別のことを恐れていた。
かぼが何から生まれたのかを知っても、巡はかぼを迫害したりしないだろうか。
そう信じたくたって、そうでないかもしれないという不安は拭いようがない。信用するとかしないとか、そういう話以前に、もう少し一緒にいて、長く時を過ごして、それから自然な話の流れで明かして行きたいことだってあるのだけれど。
ああそうか。
自分と人間では、生きている時間が違いすぎる。
人間は、きっとのんびりと待ってなどいられないのだろう。
短い時を生きる人間は、環境の急激な変化にも弱いのだろうし。
「メグ、怒ったかの……」

ポツリと、かぼは呟いた。
かぼのたった一言だったけれど、きっとずっと溜めていたものだってあったのだろうし。
けど、だけど。
仲良くしたいという言葉に、嘘なんてない。
むしろ、巡の方が仲よくしたがっていないように見えなくもなかったのだけど。
「雨の中、メグはどこに行って時間を潰す気なのかの」
探そうかとも思ったけども、そうすればきっとまた巡は怒ってしまう。
かぼは、ベッドの上で寝転んだまま、寝返りを打ってうつぶせになった。
やっぱり、雨は嫌いだ。

……12……

なんで、あんな風に怒ったかな。
家を出てそう経たないうちに、巡はすでに後悔の中にいた。雨の中、傘も持たずに出てきてしまったせいもある。深く考えずに家を飛び出したせいで、不必要に濡れるハメになってしまうなんて。
「……かぼのせいだ」
呟いてみても。
本当は、こんな風に怒る必要なんて無かったと、今では思う。反射で行動してしまってからしまったと思うことは誰にだってある。
かぼにとっては、巡は弱点を見せられる相手ではなかった。
それが、悔しいのか？
なんで？
まるで、自分が仲良くしてもらいたがってるみたいじゃないか。
巡的には、ただかぼに巻き込まれるだけ巻き込まれて、いちいち反応するのも面倒くさくなってしまったから馴れ合うようになってしまったんだって、そんなつもりでいたのだけど。だって魔物だとか妖怪だとか逢魔が時だとかって、そんな非常識なことをまくしたてられたあげくに、それが冗談でもなんでもなくて、逃げることも叶わずに、状況はこれからどんどん変わっていく。
だったら、反抗し続けるよりは、受け入れた方が遥かに楽だ。
でも、それこそ、そういうつもりでいたのだとしたら、心を許していないという点ではお互い様ということになる。思えば、自分だってそういう態度でいたのだから、かぼのことばかり悪くは言えな

い。

まだ、出会ったばかりだ。

自分にとっても、かぼにとっても。

お互いがまだ出会ったばかりで、そしてそれは、魔物同士でも、人間同士でもなくて。理解するのに時間がかかるのは当然だ。

そしてどうやら、これからこの世界では、それが不可欠になるのであろうし。

特に、自分にとっては。

「はあ……」

考えれば考えるほど、巡の頭の中は混濁してくる。

「坊主、どうした」

声をかけられて、巡はその方向へ顔を向ける。

そこは天笠和菓子店の店先で、店の主人が店先に出したシュークリームを片付けているところだった。雨にあたってしまわないようにだろう。

「こんな雨の中傘も差さんで。散歩か？」

今時珍しい、和装に身を包んだ初老の主人がシュークリームの入った籠をしまう姿というのは、和風建築の店先にあって一種異様だ。

「親戚の子だとかいう小さな子供は、今日は一緒じゃないのか」

母親、かぼのことを親戚の子だとふれ回っているらしい。妥当なラインだ。

「喧嘩でもしたか」

巡の顔色で、天笠の主人はそう判断したらしい。

「なんで、シュークリームなんて始めたの？」

主人の質問に答えず、巡は疑問に思っていたことを口にした。話

をそらすつもりがあったわけではないけれど、そう取られたかもしれない。
「シュークリームが食べたいという子がいたのでな。頑固に主義を通すのも悪くはないが、需要に応えるのも時には必要だろう」
これまでは古式ゆかしく和菓子専門で商っていたということが伺える台詞だ。
しかし、まさかその子供というのはかぼのことではないだろうな。
巡は考えた。
タイミング的には微妙だが、彼女は巡の知らない外で何をやっているかわかったものではないし。だが、店の主人は言った。
「あの子もシュークリームは好きなんじゃないか？　持って行って早く仲直りするがよかろう」
あの子も、ということは、主人の言うシュークリーム好きの子供というのはかぼのことではないらしい。なんてことを考えているうちに、主人はシュークリームをいくつか、店の商品袋に詰め込みはじめた。
「特別だ。そら」
「え、でも……」
タダでくれるらしいそれを断わりかけたが、子供が遠慮などするなと強引に渡された。
「早く仲直りするに越したことはない。せっかくあんなに楽しそうにしていたのに、そんなつまらん状態をいつまでも続けても損なだけだぞ」
巡は何も言わなかったが、主人は巡とかぼが喧嘩をしていると断定したらしい。
「楽しそう？」
確かに、かぼはいつでもおおはしゃぎだったような気がしなくもないが。
「あの子も、お前さんもな。笑って話せる相手というのは、かけがえのないものだぞ。若いうちにはわからんかもしれんがな。そして

失うのもあっという間だ。そうなってからでは遅い」
経験豊富であろう主人の言葉には、それなりの重みがあるが、それ以上に。
かぼだけでなく、自分も楽しそうにしていたらしい事実の方に、巡は驚いていた。少なくとも、傍からはそう見えていたようで。
「……けど」
かぼと自分は、心を許しあってるわけじゃない。主人はもちろん知らないだろうが、彼女は人間ではないのだ。
そんな巡の顔色だけで事情を察したわけではないだろうが、主人は軽くため息をついたようだった。
「子供のくせに、深く考える素振りなど見せんでよろしい。嫌いでないのなら、一緒に楽しいことをせんか。それだけで充分だ」
「……」
一緒に楽しく、だた、それだけを？

本当は、かぼの見た目に反する実年齢の高さが、巡との感性の違いを作っている原因にもなっているのだが、巡自身はそのことに気付いていない。
もともと少し大人びた子供だったから、負けん気が先に立つことが多い。
損とか得とか、楽とかじゃなくて。
せっかくの新しい出会い、友達がひとり増えた分だけ楽しさも増やせばいい。多分、そういうことなのだろう。事実、巡はかぼと楽しそうにしていたらしいし。
うるさくて、人の話を聞かなくて、自分勝手。
けれど巡が怒ったのは、そこではなくて。
認められていないらしいということに腹が立った。けれど、巡だってそれは同じ。魔物であるとかそういうことを抜きにするなら、歩み寄れる姿勢じゃなかったのは、自分の方だ。
少し力を抜いたなら、かぼとちゃんと心から馴染むことができる

だろうか。たとえば自然とできる、友人のように。そうきっと、あまり深く考えないほうがスムーズに進むことだってあるに違いない。

「ありがと……」

巡は受け取ったシュークリームの袋の取っ手を、ギュウ、と握りしめた。

……13……

巡が出て行ってすぐ、かぼは部屋の窓を開けて、外に身を乗り出していた。

「雨、止まんの……」

かぼは昔から、雨に当たるのを極端なくらいに避ける。

振り落ちてくる雨粒がその身体に当たるたびに、その内側にある温かさが失われていくような、そんな感覚があった。

そんな雨の中、巡は出て行ってしまった。

怒られるからついて行くことはできなかったけれど、でも一番に見えるところで待っているのなら構わないかなと。そんな風に思って、窓から外に出る。

雨は嫌いだけど。

少し当たるくらいなら、大丈夫だろう。

雨に当たることよりも、巡がそこにいてくれないことの方が。

だって巡は、かぼが目覚めたときに最初に見つけた、真っ直ぐな瞳だから。かぼに名前をつけてくれたり、何も言わなくても黒猫を家に連れ帰ってくれたり。かぼに世話を押し付けるのは、これからも、かぼが巡の家で暮らしていいって、そう言ってくれているのだ。とても、優しい子なのだ。

だから早く巡を見つけられるように、雨の当たる玄関先に、かぼは座り込んだ。

それでもやっぱり雨は冷たくて。

流れ落ちる水と一緒に、自分の中の何かもこぼれ落ちていくようで。

早く巡を見つけようとする意志と裏腹に、かぼの瞼はゆっくりと、

閉じていった。

天笠和菓子店は、巡の家の近所ではあるけれど、それでも数百メートルは離れている。家を出てからむっつりと歩いて雨に濡れてしまった道を、巡は今度は走って帰った。

あの時、結局買ってやらなかったシュークリーム。これを見たら、かぼは喜ぶだろうか。知ってはいても、食べたことのないような素振りではあったし。そしてかぼが喜んだとしたら、やっぱり自分も嬉しかったりするんだろうか。それはどうだかわからないけれど、今、巡はかぼの喜ぶことをしようとしている。

喜ばせたいと思った訳ではないけれど、喜ぶだろうな、とは考えた。

そしたらまた上機嫌で、魔物のウンチク語りなんて始めるだろうか。そうすれば、巡はもっとかぼやあの黒猫のことを知ることが出来る。それは案外、悪くないことなのかもしれない。

巡は、その勢いのまま、家の小さな門に駆け込んだ。

その足が、止まる。

かぼが、いた。

門から少しだけ離れた玄関先で、うつ伏せになって倒れていた。

「……かぼ？」

返事はない。

雨の中、雨の中なのに、かぼはその場にうつ伏せになったまま、ピクリとも動かなかった。

身体に当たる雨のしずくが、何の抵抗もなしに流れ落ちる。まるで石の上でも滑り落ちるように。

こんな光景を、巡は以前にも目にしたことがある。
あれは確か、車にひかれて道路で死んでいた、小さな猫だ。
硬くなった身体の上を、冷たい水がただただ流れていたあの光景。

かぼは、何と言っていた？
雨は嫌いだと、言っていなかったか。

――そいつは水に当たっただけで消えてしまう。

かぼのあの時の声が、今聞こえた。
そんな物の怪がかぼのことではないと、誰も、言っていない。

動かないかぼを見つめたまま、巡は手に持っていたシュークリームの袋を、バサリと取り落とした。
なんだよ。
「なんだよ……」
なんで、雨の中待ってたりするんだよ。
こんな短時間の間に、そんな姿になってしまうくらいなら、なんで。
命を懸けてまでやらなきゃいけないようなことじゃないだろう！？
雨に当たるだけで死んでしまうような身体だったら、それを本人が知らないはずがない。でももし、もし、知らなかったら？　ただ本能で嫌っていたのが、実は命に関わることだからだって、本人が知らないことだって、あるかもしれない。
だけど、嫌いだって言ってたのに。
嫌いだけど、それでも巡を待つために、こんなところで、ずっと。
だけど死んでしまったら、何の意味もないのに！

「ばっかじゃないのか、お前！！」

雨の中、立ち尽くしたまま。
巡は動かないかぼに向かって叫んだ。
悪態をついても文句のひとつも返ってこないことが、こんなにも胸に衝撃を与えるなんて。喧嘩なんかしたって。文句を言い合ってたって良かったのだ。こんな風に、動かなくなるより、ずっと、ずっと良かった。
どうして、もっと前に気付けなかったのか。
失くすのはあっという間だって、さっき聞いたばかりだ。もっと前に聞いていたら。でももっと前に聞いていたとしたって、きっとその時の自分には、やっぱりわからなかっただろう。
絶対に戻ってこないものなんて、この世にはいくらだってあるのだ。

バカじゃないのか。バカじゃないのか。
こんなにあっさりといっちまうくらいなら、最初から付きまとったりするな。
自分から付きまとってきたのだから、勝手に死ぬな！
文句を言ったって、何を願ったって、失ってからでは、何もかも遅い。

一番バカなのは、自分だ……。

この時。
この、一見普通の少女と変わらない、陽気な物の怪との騒がしい出会いと、突然の別れが。
巡のこれからの人生を、大きく変えることになる――。

――なんて訳はなくて。
「……しゅーくりーむ！！」
ガバリと、少女が頭を持ち上げた。
「……ッ！！」
巡、唖然。
「しゅ、しゅーくりーむがあ、水溜りにいいい！！」
うつ伏せになったまま顔だけ上げたかぼは、まるで脂ぎった羽と長い触角を持つ黒い悪魔のごとくに、カサカサとほふく前進でシュークリームの袋に這い寄った。
「もったいないじゃないか！　このかぐわしき匂い、これはしゅーくりーむだろう！？」

……何が起こった。

「お、お……」
「お？」
「お前、死んでたんじゃないのかよ！？」
巡の叫びにポカンとしたかぼは、さすがに仰天の表情を作った。この少女には珍しい現象。
「何を言うか、失礼な！！」
「だって！！」
ついさっき頭の中を駆け巡った様々なことを、取りとめもなくわめき散らす巡に、かぼはますます目を見開いた。

「メグ……ぬし、案外慌て者だの」
「なんだよ……」
バツの悪そうな巡に、かぼは這いずった格好のまま、呆れたようなため息をつく。
「生きるか死ぬかの問題だったら『好き嫌い』で済むわけがなかろうよ」
それはそうだが、巡は、かぼが無自覚なんじゃないかとまで考えたのだ。難しく考えすぎだと言われたとしても、家の中にいたはずの者が雨の中で倒れていたら、誰だってまずは驚く。
「それになあ、わちら物の怪は、魂が消えれば身体も残らんよ」
「そんなことを知ってるわけがないだろ！！」
そりゃそうかと、かぼはナハナハと笑う。楽しそうな瞳が、巡に向けてさらに細められた。
「そういうことも含めて、思いついたときに話してやるぞ。わちらの色々なことはな」
一度に全てを話すには、情報量が大きすぎるのだ。

しかしそうか、とかぼはニヤつく。かぼが死んだら、巡は慌てるか、と。そう考えたら、自然と笑みがこぼれてしまうかぼだ。まだ、嫌われているわけじゃなかったと。
「ていうか」
巡は一度、大きく息を吸った。
「大体なんでこんなところで倒れてるんだ、お前は！！」
もっともな意見だ。
「あー……わち、雨は嫌いだからの。当たっているうちに、ついつい眠気がきてしまったのだ」
巡には意味がわからない。
「それも追々な」
かぼが雨の中で眠気を来たしてしまったのは、完全な逃避の表れだ。彼女が何かから逃避するには眠るのが一番良いのを、かぼの本

能は一番良く知っている。自分を追いやる生の刻を、ただただ眠ってやりすごしたように。
そして、彼女が雨を嫌うのも、ちゃんと理由があってのことなのだが。
それもいつか、話す時もあるだろう。
「そのうち話してやるから、まずはこれを食べていいかの」
ずっと抱えているシュークリームの袋を、かぼはきらめく眼差しで見つめる。
「その前に風呂に入れ」
かぼの首根っこを捕まえて起き上がらせると、巡はその手からシュークリームを奪い取った。しかしはたしてこのシュークリームは、まだ食べられるのだろうか。
「メグのケチんぼ！！」
その言葉も何度聞いたことか。
なんと言われても、こんな濡れ鼠のまま菓子を食うことを優先させるのは許さない。

ケチと罵られても――生きてて、良かった。

正確には、彼ら魔物は生きてはないらしいけど。
動いてしゃべっているのだから、それはそれで良しとしよう。
手遅れにならなかったことを、自分は心から安堵しているのだから。

手足をバタつかせて抗議するかぼを引きずって、巡は雨の当たらない家の中へ入って行った。

二人が住む、雨の届かない場所へ。

<第一話・了>

……1……

実習で採ったユスラウメは、けっこう美味かった。
苺だのバナナだの、店で売っている果物に比べて大味で青臭かったけど、野生であんな風に食べられる木の実があるというのは、巡にとっては初めての経験だった。母や姉にも見せてやったら喜ぶかもしれない。

そんな訳で、巡は学校裏の雑木林まで足を運んできた。

「メグは雑木林が好きだのー」
何気についてくるかぼ。
これは本当にどうかと思う巡なのだが。
こう外についてこられては、街中に存在を認知されてしまうのも時間の問題なのだ。実際、天笠の主人もかぼのことは知っていた。成瀬家にも来客が無い訳ではないし、隠し通すのは至難の業だ。母や姉にいたっては、隠す気もさらさらないようだし、見た目普通の人間と変わらないから、かまわないのかもしれないが。クラスメイトとかに見られてしまうと、もう学校にかぼがやってきてしまっても、存在を隠せなくなる。
それならそれで、学校に来なければ良いだけの話だし、一応かぼは、もう学校に不用意には行かないと言ってはいる。しかし実際どうなるかはわかったものではない。
だがそういう話をしても、かぼは「メグよりはずっとうまいことやるから大丈夫だ」と、呑気なものだ。
まあ、それはともかく。
この雑木林には、確か小さな川も流れていた。あれは新発見だ。

辿ってみれば街中の河川に繋がっているのかもしれないが、今まで存在も知らなかったのだから、もっとじっくり見てみたい。
歳相応に冒険心旺盛な巡だ。
一応は私有地である場所で好き勝手な巡だが、この辺は立ち入り禁止と区切られている場所ではないので、暗黙の了解で時々近所の人間がヨモギや栗を採りに来たりしている。持ち主である藤乃木学園グループの理事長は、それと知っていて開放したままにしている、案外おおらかな人間だ。そして不必要に森の恵みを乱獲したり、問題を起こす人間は、これまでに現れていない。学校での企画の場合には一応許可を取ったりもするが、実際はそれが通らなかったことはなかった。

記憶の場所に、巡は小さな川を発見した。
「魚とかいるのかな……」
背の低い草の中に忽然と姿を見せる水の流れを、巡はしげしげと眺める。
「魚もいるぞ。ここは中央付近はそこそこ深くなっているから気をつけたほうがいいのー。流れがきつい訳ではないが、ぬしの身長なら腰までは浸かってしまうぞ」
かぼは言いながら、早速川の端に足をつけてバシャバシャと遊びだす。
とりあえずそんなかぼを引きずって上流を目指しだして、巡は一瞬足を止めた。
「！？」
上流の方向に、何かいる。
「かぼ、ちょっと待て。あそこ」
目で良く確認できない。というか、見たこともない造形をしているせいで、その形が上手く頭に入ってこない。
巡はそれを、凝視した。
「ん？　おお、なんだ、ミーシャではないか」

「は、なんだって……？」
駆け出すかぼを追いかけながら、その何かを見極める。足許がおろそかになっているが、そんな場合じゃない。アレは一体、なんだ。
「ミーシャ！　ぬしも目覚めておったのかの～」
大声で呼びかけるかぼに、何だか良くわからないものは、ゆっくりとこっちを見た。つまり、動いた黒っぽい部分が頭部だと目で確認する巡。
「ミーシャ……？」
あれは、ミーシャと呼ばれる類の見た目だろうか。
「なんだ、オメエも目覚めりゃ相変わらず元気だな。オメエよりはオレは頻繁に動いてたぞ」
その何かが、しゃべる。今更だが、生き物だったのか。
というか。
近付いてよく見てみれば、それは形だけは、人とよく似ていた。
真っ黒に見えた頭部は、伸びっぱなしの髪がドレッドのように、しかし中途半端に絡みついたものだ。不思議とボサボサな感じがしない。
そして決してつぶらとはいえない細い瞳。眼光が鋭い。
なにやら柄物のTシャツとハーフパンツをズタっと着こなしたその身体は妙に浅黒く、裸足のままの足と骨ばった手の指の先にある爪はカギ爪だ。引っ掻かれたら、多分致命傷になる。そして指の間にあるそれは、もしかして、水かきか。
何よりも、その顔は。
口があるべき場所に見えるそれは、唇ではなく、くちばしだ。空を飛ぶ鳥ではなく、水辺にいるタイプの平べったいアレ。
そんな物体が、ゆったりと川辺の岩に、腰掛けている。
「こやつは水というか『川』から生まれた物の怪でな。人間で言うところの河童みたいなものかの」

「河童ぁ！？」
言われてみれば、そう見えなくもないが、何しろ巡は河童の実物を見たことがない。しかし本に出てくる河童は、もうちょっとこう、子供っぽいというか可愛いタイプが多かったような気もする。
「もちろん人間の知っている河童は、人間が想像で作り出した河童だ。だがおそらく、こやつのような物の怪がもとになっているのだろうな。だからまあ、河童という種類で呼んで構わんと、そういうことだ」
そういえば、河童には付き物のいくつかが足りない。
「皿と甲羅……」
その河童の姿に見入ってしまっていた巡が、それだけを呟いた。
それを聞いた河童が、ゲタゲタと笑い出す。
「おとぎ話でよく見るアレだな。皿も甲羅も持ってねえ訳じゃねえぞ。別に普段は出さなくてもいいだけだ。ある意味人間の観察力も鋭いからなぁ。オレにそういうアイテムがあるってのを、昔の人間どもは見逃さなかったんだな。一応人間の描くあの姿も、間違いじゃねえな」
鋭い眼光のミーシャ、何気に豪快だがとっつきやすい好印象だ。
「しかしアレだな。もうオメエが人間とツルんでるってことは、いよいよ魔の刻も本領発揮ってことか」
かぼに対して気さくに笑いかけるミーシャに、かぼは「まだまだだがな」と返事をしてから、何気に胸を張った。
「今は『かぼ』だ。そう呼ぶがいいぞ」
「なんだ、また名前変わってんのか」
また？
巡はかぼを見る。確か、名前はないとかそんなことを言ってなかったか。
「昔人間につけられた名前なぞ、もう憶えておらんわ。わちらは本当はこれといった名前は持っておらんものよ」
「でも……」

昔つけられた名前があるなら、それでも良かったんだろうに。
憶えてないというのは、本当だろうか。
「名なぞ、何でも良いわ。ミーシャは、その昔わちがつけてやった名前だからの。こやつもずっとそれを使ってはいるが」
何をどう感じて、この河童にミーシャなどと名付けたのだ、この少女は。

しかしつまりまた、巡は物の怪を発見してしまったということか。
かぼは、自分との出会いがきっかけで、これから次々と物の怪に出会うことになる、とは言っていたが。ここ数日で、黒猫と河童。確かにこれまで、こんな連中を見たことなんてなかったのに。

ただ少なくとも言えるのは。
初めて出会ったのが、この河童ではなくかぼだったのは、巡にとっては幸運だったということだ。
コレと最初に出会っていたら、巡は未だに夜眠れぬ生活だったかもしれない……。

……2……

それにしても。

どうしても、気になる。

「なんでミーシャなんだ？」

この河童のどこがミーシャなのかと、巡は考えに考えた。眼光鋭くいかつい見た目のこの河童に、何ゆえミーシャ。それに昔名付けたという昔は、一体いつの昔なのか。おそらく外国との国交の少ない時代に、なぜ日本らしからぬ名前。

「物の怪に国境はないぞ。だが、別に外国人を意識した名前ではないんだがな。最初は『みーちゃん』と呼んでおったのだが、それが幼子に呼びかけるように『みーしゃん』になり、そしてみーしゃ、と……」

「幼子……」

巡の当然の疑問に、かぼは大げさにため息をついてみせた。

「ミーシャはこれでも生まれた時は本当にかわいかったのだぞ。まるで人間の幼子のようにな。それが今ではこの有様だ」

かわいかった？

幼子のよう？

それが真実なら、今では見る影もない。

というか、物の怪でも成長したりするのだろうか。なら何故、かぼは長い時代、子供の姿のままなのか。大体、物の怪の身体は人間と違って形だけの器でしかないみたいな話をしていなかったか。

ミーシャに対し、疑問大爆発。

「物の怪は、様々なものから変化した者だという話はしただろう。このミーシャは『川』という存在から生まれたわけだがな、常に川というものの変化を受け止めながら、暮らしていかねばならん。…

…昔はどこの川も本当にきれいだったんだがの。今では水質も落ちて、その鏡であるミーシャも、こんな姿になってしまった」
そういえば、感知したくない変化さえも、取り入れなければならない例もある、なんてことを以前にかぼが言ってはいたが。母体である川がどんどん美しくなくなってしまったせいで、ミーシャはこんな風に衰え乱れ、何気に現代ナイズされてしまったのか。
これはこれで味があるような気もするが。
「ミーシャ。ぬしはあくまで『川』が転じた物の怪であって、どこか特定の川の傍でしか暮らしていけないわけじゃなかろう。世界には、いや、日本の中にだって未だ美しい川はいくらでもあるぞ。そこに引越せば、そんな姿には……」
そういうものなのか。
川とひとくくりにしてはいるが、自分が今暮らすその川の影響がその心身に投影されるということらしい。
「別にオレはこれでかまわねえよ。なかなか気に入ってるぜ？　別にこの程度で済むんなら、わざわざ遠くに引越しする方が面倒くせェ」
この辺りのどの川で生まれたのかはわからないが。
巡はミーシャを見ていて、何となく感じた。面倒くさいなんて言い方をしているけれど、きっとミーシャはここの土地や川が好きなんだろうなと。だから、そんな姿になっても離れないんだなと。
そんな姿でも、なんとなくミーシャが幸せに満足しているように見えたのだ。
もちろん、本当は何もかも満足、なんてことはないはずだ。ミーシャが生まれた頃の川というのがそれほど美しいものであったか、巡には到底想像もつかないが。本当だったら、そんな環境で暮らせたらもっといいんだろう。
環境問題とかになると、巡が自分ひとりでどうにかできる次元ではないし。
いまここにあるこの小川は、魚もいるというし、巡からしてみれ

ば随分きれいな環境に見えるのだが、色々と複雑な問題もあるのだろう。
「まあな。結局今そこにあるものを、あるがままに受け止める。それがわちらにとっては当たり前のことだからの」
うんうんとうなずくかぼ。
難しい問題だが、巡も自分なりに考えてみる。
人間でも物の怪でもきっと変わらない。
好きなものについては、案外何でもガマンできてしまうものだし、受け入れてしまうものだ。
好きなもの、という言い方でいいのかはわからないが。
「ミーシャはつまり、ここが好きなんだな」
そう言ってみたら、人相の悪いミーシャは巡に向かって破顔した。
「その通りだな。ぶっちゃけ言っちまえば、ここが故郷というわけじゃねえが、流れて流れ着いたこの場所は、これでなかなか住み心地のいいものだぜ」
ボンボンと、ミーシャはその大きな手で巡の頭を優しく叩く。
爪が食い込んだら痛いでは済まなそうなカギ爪だが、きちんと加減してくれている。
「美しけりゃ何でもいいってわけでもねーや。本来川ってのは、そうなろうとしてなったモンじゃなくて、自然が作り上げた水の形だ。それに沿って清らかに流れるのも悪くはねーが、そこに介入する『営み』があるほうが、オレぁ好きなんだよ。そのせいでちっとばかり環境が変わってもな」
水の流れである川を、多種多様な生物たちが利用し、介入する。そこには確かに営みがある。それを愛おしいと感じるなら、やはりミーシャが『水』ではなく『川』の物の怪であるがゆえなのだろうか。
かぼが、ああそうだな、と思い出したように手を打った。
「そういえば、わちがぬしに名前をつけてやったのは、この土地ではなかったな。あれはどこだったか……」

かぼ、物忘れが激しいにも程ってものがある。
彼らがいつどこで知り合ったのかは知らないが。
それぞれに違う土地から流れ着いたのだとしたら、今ここで二人が再会するというのは、とてつもない確率の偶然ではないのか。
「まあ、わちらには縁というものが生まれているからの。こうして再会するのもそうおかしいことでもない」
巡の疑問を、縁という一言で一蹴してしまうかぼ。
しかしかぼの様子から察するに、かぼよりもこの河童のほうが、後に生まれているということなのか。本当に物の怪というのは、見た目では語れない。
「ていうか、今引っ越すのが面倒って話、してなかった？」
ここが故郷でないなら、どこかから引っ越してきたということではないのかと、巡は自然にそう考える。
「徐々に、流れてきたんだよ。気の向くままにな。そして大分前にここにたどり着いて、そのまま居着いちまったわけだが、ここもその頃から考えたら、随分変わっちまったな」
まあその姿を見れば、そうなのだろうが。それでも環境のいい場所を見つけて、あらためて住み直すという考えはないということか。
この街この場所に、どんな思い入れがあるのかはわからないけど。

「わちは今、こやつの家にいるからの。いつでも遊びに来るといいぞ」
サラリと言うかぼに、巡は内心仰天した。
家主の許可もなしに、なんてことを。
確かにミーシャは悪いヤツではないというか、実際話してみれば、かぼよりもずっと話のわかるタイプなのかもしれないが。何しろその外見を、巡の家族に見られるのは。
かぼを認識した時のように、平然としていてくれるものだろうか。
「おい、かぼ！」
「なんだ、メグ？」

まるで罪のなさそうな顔。
外見云々の話は、かぼにはきっと通じないだろう。
「その、家に来るときには極力厚着で来るようにしてくれ……」
それだけを言うのが精一杯の、土壇場に弱い巡だった。

……3……

現代ナイズされた河童との邂逅から数日。
今日も普通に学校に行って、約束通りかぼもついて来なかったおかげで平凡に一日を過ごして、そして家に帰ってきた巡は、庭での賑わいに気付いてそこを覗き込み、一気に脱力した。
巡の家には家庭菜園くらいできる程度の小さな庭がある。そこには小さな池まであって、昔は父親が趣味で錦鯉を飼っていた。その後はその池の中身が金魚になったりしたものだが、今では水が張ってあるだけで、何もいない。

そこに、ミーシャが浸かっていた。

「……ミーシャ……」
ガクリとひざをつく巡に、池の中で膝を抱えるミーシャがやれやれとため息をよこす。
「かぼが、巡の家にいい水場があるっていうから来てみりゃあ、随分と小さいんで驚いた。膝丈くらいしかねえじゃねえか」
一般家庭にある人工の池なのだから仕方がない。
身長１６０ｃｍもない巡ですら、プールの代わりにもならないささやかな池に、巡よりも頭ふたつ分はでかいミーシャが詰まっている光景は、滑稽ですらある。
「かぼの言うこと鵜呑みにしちゃ……」
彼らは付き合いが長いのではないか。かぼの言うことなんて案外適当で大雑把であるなんて、ミーシャにもわかりそうなものだが。
「なんだ失礼だな。別にかぼは嘘は言っておらん。なかなかハマッているじゃないか」

池の傍で座り込んでいたかぼが、心外とばかりに頬を膨らませながら巡を見上げる。
確かに、嵌まっているが。物理的な意味で。
「あらメグ、帰ってたの？　それなら声かけてよ。メグの分もおやつ用意するから、手を洗ってらっしゃい」
家の中から顔を出す母、由美香。
一瞬ドキリとした巡だが、その手に持っているトレーには、すでに二人分の紅茶のグラスとプリンが乗っていた。
かぼと、ミーシャの分か。
「ミーシャさん、ストローで大丈夫かしら？　でもグラスで直によりは飲みやすいかなあ」
くちばしの形状を気にする母。
「おいこら、かぼ！！」
巡は、小さな声でかぼを招きよせた。
「なんだ」
「お前な、不可抗力で見えるものは仕方ないけど、わざわざうちの連中に物の怪を紹介することはないだろ」
そんな巡に、かぼはいやいやと首を振る。
「これからは、このくらい慣れておいた方が生きやすい世になるぞ。それに別に、わちが母上にあらためて紹介した訳ではないんだが、うっかり庭で話しているのを見られてしまったわ」
「……」
うっかりというか、そりゃあ庭で話なんかしてれば気付かれるのは当然だろう。
しかし本当に母、この河童を見て何とも思わないのか。かぼのことは普通の子供ではないと認識していたとしても、実際かぼは普通の人間と同じようにしか見えないし、あの驚異的な身体能力を見た訳でもないのに。
どこでそんな免疫が出来ているのだ。
「母上も芽衣も確かにおおらかな性質だのー。猫と天井星取りゲー

ムをして遊んでたら、飛んだり跳ねたりしても全然物音がしないと感心しきりで喜んで観戦くれたしの」
「……て、天井星取りゲーム……？」
「天井に沢山星を張ってな、それをジャンプして取って、どっちが早く集められるかのゲームだ。しかし相手は猫だでの。意味がわかっておらんから、かぼの圧勝だったが」
かぼ巡の見ていないところで既に様々な猛威を振るってくれているらしい。
巡の知らないうちに、母や姉は人外に飛んだり跳ねたりしているかぼや、その相手をしている猫を日常で眺めていたということか。
「……少しは加減してくれ……」
学校に来ないからと安心していたが、来ないなら来ないで別の場所で心配の種を増やしていそうだ。
「メグ、わちを誰だと思っているのだ。ぬしよりもずっと長く生きておるのだぞ。人生の先輩に心配は無用だ」
人じゃないだろう。
言えばこじれるから、巡は黙っていたが。
「ほらほらメグ、早く手を洗ってらっしゃい。でもプリン多めに買っておいて良かったわ～」
別段気にかかることのある様子でもない母。
そうだ。かぼよりも、こんな神経で今日に至るまで普通に生きてきた母のほうが脅威だ。これまで気付きもしなかったが。

巡の家の飼い猫になってしまった二股尻尾の黒猫が、母の足に擦り寄ってきた。
「あら……猫ちゃんプリン欲しいの？　でも猫にプリンは良くないわよねえ。今度別のおやつ買ってきてあげるから、今日はガマンしてもらえないかしら」
律儀に猫に話しかける由美香を見て、池の中で座り込んでいるミ

ーシャが細い目を見開いた。
「何だ、良く見たらオメエ、シンじゃねえか」
「え！？」
知り合いか！？
「こんなところにいたのか。久しぶりだな。っつっても、それじゃ話も出来ねえな。シン、変化しろよ」
親しそうに一方的にしゃべるミーシャの言葉の直後に、シンと呼ばれた黒猫は突然グワッと、その姿を歪ませた。
一瞬にして、その容積が数倍に膨れ上がる。
「！？」
膨れ上がって、変形しているような、輪郭がブレているような。猫だったシルエットが高速で形を変え、形成されていくのは、人のような姿。
目の前の光景を把握できずに瞬きも忘れる巡の目の前に、真っ黒な上下、TシャツとGパン？　らしき衣服に身を包んだ、十五〜十六歳くらいに見える少年が現れた。
「はー、助かった……」
それは歳若い男の、巡よりほんの少し低めの声。
キョトンとする母の足許――庭に面した廊下に尻をつき脱力するその少年は、バサバサの黒い髪を掻きあげて、巡に向かって「よう」と片手を挙げてみせる。
……今度はまた、何が起こったのか。

……4……

巡の目の前であぐらをかく少年は、さっきまで確かに黒猫だったはず。

巡は、マジマジとその少年を眺めてしまった。

「……ホントに、あの黒猫？」

目の前で変身した姿を見ても、にわかには信じがたい。かぼやミーシャを散々見た後でも、こうもありえない光景を見せ付けられてしまうと、やはり頭は追いついてこないものだ。

「そだよ」

こともなげな黒猫。

「しっかしなー、いつまたこの姿になれるかわからなかったから、ミーシャがいてくれて助かったわ」

廊下にあぐらをかいたまま、両手を後ろについてリラックスする元黒猫。

「あらあ……人なら、プリン食べても大丈夫かしら……」

そして、相変わらず天然な発言をかます母。

「あ、おかまいなくー。いちいちこの人数分おやつ用意してたらキリがないでしょ、ママさん」

「ま、いい子ね。心配しなくても大丈夫よ」

猫のくせに気遣いのできる彼にいたく感心した母は、いそいそとプリンを取りに台所に向かってしまった。

「どうなってんだ……」

そんな母と確かに血は繋がっているはずなのだが、この事態にひとりついていけない巡。それが普通の感覚というものだが、往々にして状況というものは、多数決で動いて行くものだ。この光景に疑問を抱く巡に同調してくれる存在は、今ここには無い。

「なんだ、ぬしは人型になれたのか。なぜ今まで隠しておったのだ？」
かぼが呆れたように腕を組んで見せたが、もちろんこの状況そのものはすっかり受け入れてしまっている。まあ、彼女はもちろん人間ではないのだから当然だ。
シンと呼ばれた元黒猫の少年は、疲れたように首を振った。
「いや、隠してた訳じゃないんだけどな……」
見ての通り、彼は猫が変化した物の怪だ。猫と人と、ふたつの姿を持ち合わせる。が、その仕組みに問題があった。
「一応オレ、基本形は猫なんだよ。人でいるよりは猫でいるほうが楽は楽なんだけど、困ったことに、猫でいる時のオレは、マジで猫なんだよなあ」
言われている意味が、巡にだけはわからない。

つまり、彼は。
人でいる時は、人の言葉も解するし、人と同じ行動パターンを持つ。故に、人としての常識や理性も理解する。猫でいたときの自分の行動も憶えている。
が、ひとたび猫に戻ると。
彼は、本当に猫なのだ。
たとえば人間相手に機嫌を読んだりはできるが、基本的には人の言葉を解さない。猫として生き、猫としての本能を持つ。まるっきり存在が猫。だから、自分の意志では人間型に変化することはできないし、また、しようとも思わない。彼は、猫だから。
日向ぼっこをしたり遊んだり、犬と張り合って走り回ったり。人型でいれば減らない腹も猫の時は減るし、もちろんご不浄だって人目をはばかることなく砂場でカリカリやったりする。物の怪でありながら、しつこいようだが、まるっきり本物の、猫。ただしかぼたちと同じように、通常、生の刻の生物には見えにくい。
「さっきミーシャが言ったキーワードで他人から命令されないと、

オレは人になれないんだよ」
「キーワード？」
巡とかぼは、同時に首をかしげる。
「変化しろ、ってな意味合いの言葉だな」
訳知り顔で、ミーシャが呟いた。
「こいつは先の魔の刻の終わり頃に生まれた若い物の怪でな。オレがシンと初対面のときはこいつ人型だったからこういう性質だってのも知れたが、生の刻ではまったく顔を合わせてなかったからな。久しぶりだろう、人型になったのは」
ミーシャの言葉に、シンはうんうんと頷く。
「ミーシャ以外に知り合いがいないわけじゃないけどな。生の刻でみんな篭っちまってたし、実際人型になったのは数百年ぶりだ」
進んで人間の姿になりたい訳ではないが、猫の姿の時は、他の誰ともコミュニケーションが取れないから、そういう意味では苦労することになる。もちろん、猫でいるときの彼はそんな苦労を感じることもないわけだが。
「不便だの……」
げんなりするシンに向かって、かぼは同情の目を向けている。

実際、物の怪というのは基本的に、この世に存在するありとあらゆるものの思考を理解できるものだ。たとえば動物と人間では思考形態も違うわけだが、それすらもおおよそ理解することが出来る。人間のように言葉でコミュニケーションを取る訳にはいかない動物でも、相手が今どんな気持ちでいるのかとか、その相手の立場で理解することが可能なのだ。だから、それと同じように、人間とも人間特有の言葉でのコミュニケーションを取ることができる。時代が流れて言葉や社会が変わっても、その時代に瞬時に馴染むことができる、器を持たない魂の存在。それが物の怪なのだが。
時々、シンのような物の怪も存在する。
人型になってさえいれば、他の物の怪と変わらない能力を有する

のだが、猫の姿をしている時の彼は、本当に猫でしかない。ゆえに、物の怪の中では、かぼの言うようにかなり不便な部類に入る。
魔の刻の社会も色々複雑なようだ。
「道理でどんな名前で呼んでも反応しないはずだ。ちゃんと名前を持っていたのだな」
かぼは妙な方向で納得している。
実際、拾ってから名前をつけようとしなかった訳ではないのだが、どんな名前をつけても、それに関してだけは、黒猫はまったく反応を示さなかったのだ。むしろ、ただ「猫」と呼んでやった方が、まだ反応があった。
なるほど名前があったのなら仕方がないと、かぼは合点がいったような顔をする。
そして説明を聞くうちに少々落ち着いてきた巡は、言っていいものかと悩みつつ、シンを眺めた。
「でもそれって……人型になった時、かなり恥ずかしかったりしない？」
それでも言ってしまった巡の言葉に、シンはガックリと首を垂れる。
「恥ずかしいなんてモンじゃないぜ……」
猫であるシンは、猫以外の何者でもないから、人間であった頃のことなど何一つ憶えてはいない。だが人型になったシンは、猫であったときの自分の状況をいちいち覚えている。
例えば人に腹を撫でられて伸びている姿や、用を足すためにバリバリと地面を引っかく姿、追いかけているうちに切れたトカゲの尻尾にはしゃぎまくる自分。その他もろもろの、猫として過ごした時間を、全て覚えているのだ。そんな姿を、惜しげもなく他にさらしていたという事実を。
恥ずかしくない訳がない。
シンは猫の物の怪なのだから、猫でいる自分やその習慣を自ら否

定する気もないのだが、いかんせんこうして人の形をとり、人間のように振舞える人型バージョンのシンからしてみれば。猫でいるときの自分はこう、無邪気で何の罪もない幼い子供の姿を晒しているような、そんな気分になってしまうのだ。

「で、まあ、ずっと人の姿でいるのは正直疲れるんでさ。やっぱり猫でいることが多いんだけど、ぶっちゃけ猫でいる時は何もすることがないから、用事ができたときはいつでも変化させて構わないぜ」

人から猫への変化は自力でできるらしく、くったくなくそんなことを言うシンだが。

「そうか。では今度、母上か芽衣の膝の上でくつろいでいる時にでも、変化させてみようかの」

楽しそうにからかい混じりで提案するかぼの一言に、シンはブルブルと首を振りまくった。

「そ、それはちょっと！！」

由美香と芽衣の膝の上は居心地がいいだけに、一番発生しやすいシチュエーションだ。

本当にかわいそうだから、それだけはやめてやれ。

巡は早々に、シンに対して同情の眼差しを向けるようになっていた。

……5……

さて、六月といえば、梅雨だ。
夏休みまであとひと月というこの時期、雨はもちろん多いのだが、それよりも暑さが勝る日もある。しかも、初夏特有の湿気も加わっているから始末におえない。
今日の巡は、かなり寝苦しい夜を過ごしていた。
本格的な夏を迎える頃には、そこそこ暑さにも慣れてくるものだが、夏の入り口というこの時期は、なんだかんだ言って身体にこたえるものかもしれない。
暑い。というか息苦しい。
なのに。
それなのに、ベッドに横たわる巡の腹の上には、黒い猫がどっかりと乗っている。
暑苦しくてかなわない。
何度か下ろしてみたのだが、巡の腹の何が気に入っているのか、すぐにまた乗りあがってくる。彼も物の怪とはいえ、猫でいる時は猫そのものだから、人間に良く懐いているのは納得できなくはないが、それにしたって、普通の猫だって、暑い日には人肌に寄り付かないものなのに。そうでなくとも猫は暑がりなのではないのか。いっそかぼの寝る部屋にでも行ってくれれば楽なのだが、どうもこの猫は、寝る時は巡のことがお気に入りらしい。かぼは寝相が悪いのかもしれない。
寝る時まで一緒ではさすがに落ち着かないからと、せっかく余っていた部屋をかぼに使わせているというのに、これでは状況が変わらない。冬なら歓迎するが。
ガマンできなくなった巡は、再び猫を掴んでベッドの隅に放った

後、間髪入れずに呟いた。
「シン……変化……」
その瞬間、その小さな身体が大きく歪み、黒猫は巡よりも数センチ身長の高い少年に変化した。
ベッドの上に尻をついて座り込んだ姿勢で、シンはキョトンと巡を見る。
五秒ほどの無言の間の後。
「……う暑っちいぃぃ！！」
バタバタと手を使って自分の顔を仰ぎだす。
だから暑いと言っているではないか（言ってはいないが）。
「何だよ何だよメグ、なんでこんなムシムシした部屋の中で、狭い場所に固まって寝てなきゃならないんだ！？」
その言葉をそっくりお返ししたい巡だ。
「だから人間に変わってもらったんだよ……。できれば離れてそこいらで寝てよ」
巡はゴロリと寝返りを打ってシンに背中を向けた。
「え？　オレ床で寝なきゃいけないの？　ていうか目覚めちゃったんだけど。こんな寝苦しい日に呑気に寝てられないよ」
さっきまで爆睡していなかっただろうか。
「なあ、アンタ今小学生なんだっけ。六年生だよな。あれか？　宿題とかやっぱりあるわけ？　そろそろ勉強難しくない？」
「……」
人間にしたらしたで寝苦しい。これならいっそ猫の方がマシだったかとげんなりしてしまう巡だが、生憎と人間から猫にする方法は聞いていない。というか他人には不可能かもしれない。
「あのな、僕は明日学校あるんだから……」
「学校かあ。人間てさー、あんなとこ毎日通ってて疲れないわけ？　でも時々顔出すと、子供が給食の残りくれたりするんだよな。今の子って結構いいもの食べてるよなー。本当は人間の食べ物は猫にとっては良くないものが多いっての、ほとんどのヤツがまだ知らな

いんだよな。まあオレは物の怪だから関係ないんだけど～」
……本当にうるさい。
「ホントに頼むから、お前かぼのところにでも行って……」
「呼んだかのー」
ガチャリ。
かぼ登場。巡はベッドの上に撃沈した。
「なんだシン、人間の姿になどなって、メグと楽しく世間話か。ならかぼも仲間に入れてくれなければ寂しいじゃないか」
プウ、とふくれるかぼ。しかしその愛らしい？　姿は、枕に突っ伏す巡には見えていない。
「いや、仲間はずれになんてしてないよ。メグの学校の話をしてて さー」
かなり一方的にだが。
「そうかそうか、かぼは一度だけ、メグの教室に行ったことがあるがな、最近の学校というのはなかなか変わった造りだの」
「え、マジ？　おれ建物の中には入ったことないんだよ。ここより涼しいのかな？」
問題がずれてきている。というか。
多分、ここで起き上がって怒鳴り散らすのは簡単だ。近所迷惑など知ったことか。しかし、それをやったところで、おそらく状況がこじれる一方であることを、巡もそろそろ学習してきている。
ここは、黙殺した方が得策ではないだろうか。
しかし、ここで上掛けをかぶる訳にもいかない（暑い）し、どうしたものか。巡はうつぶせたまま思考を走らせた。
そんなことを考えれば考えるだけ睡眠が遠のいて行くだけなのだが。
「なあメグ、今日の給食ってなんだ？　美味いものか？」
ゆさゆさ。
「……」
「猫もいいけど、あれ人間で食べたらどんな味なのかな。やっぱ違

うかな」
多分、人間の姿でうちのものを食べるのと大差ないと思うよ。
心の中だけで呟く巡。
「メグ、今度変わったもの出てきたら、持って帰ってくれよ」
巡は、むくりと起きだした。
「……給食は、食べられる限り残しちゃいけないんだ」
ベッドから降りて、巡は自分の机の引き出しをガタガタとあさり出す。母が買っておいた猫用のジャーキーが、この中に仕舞ってある。
引き出しをかき回しながら、巡は少々顔をしかめた。
しまった。引き出しの中がジャーキーくさい。場所を考え直さないと。
そこからジャーキーの袋を取り出すと、巡はクルリと振り返り、シンにその袋を手渡した。
「お腹すいてたんだな。給食はあんまり持ってこられないけど、とりあえずこれ食べてガマンしててくれないかな。うまいよ」
ニッコリ笑って渡すと、別に今腹減ってる訳じゃないけど～、などと言いながらも、シンは素直にそれを受け取った。
かぼだけが、微妙な顔つきでシンを見る。
「のお、シン。どうせ眠れんのなら、たまにはかぼの部屋に来て話をせんか。話せることは山ほどあるぞ～」
「え？　なんで？　ここでもいいじゃん」
「かぼの部屋の方が面白いぞ」
シンにジャーキーを渡したあと、静かな仕草で再びベッドに横たわった巡に視線を流すかぼ。さっきから極端に口数の少ない巡だが。この状況で笑顔で話す彼の、目は笑っていなかった。
そろそろかぼも、巡のことを学習しつつある。
マジで爆発、五秒前。

悪気があるわけではない。
しかし、巡に悪いと思っている訳でもない。何しろ悪気はないから。
ただ、悪気は無くても怒られることはある。悪いと思っている訳ではないのに、そのことで怒られるのは、逆にシャクでもあったりするわけで。
かぼはシンを連れて、いそいそと巡の部屋を出た。

静かになった部屋で、巡はゴロリと寝返りを打って仰向けになった。そうでなくとも寝苦しいのに、あの騒ぎのあとスラリと眠れる訳がない。
どうすればいいのか。
人間にしてうるさいくらいなら、猫のままで暑苦しいのがまだマシなのか。
巡は二者択一にせまられる。

遠慮しないで猫の姿のシンを締め出してしまえば良いということに気付かない巡、彼が安眠できる日は遠い。

……6……

土曜日の夕方、かぼは、珍しくひとりで近所の公園に遊びに来ていた。

公園と言ってもそこは結構大きな敷地で、遊歩道や池や売店などが完備されている、地域の憩いの場だ。スポーツに趣味にと、この公園を活用する人も多い。

そこをトコトコと歩くかぼを、誰も目に留めない。彼女からアクションをかけなければ、その存在に気付かない人間がほとんどだろう。

菓子や飲み物を置いている売店を横目で見ながら、かぼはその誘惑を断ち切るように足早に歩く。

ふと、売店の近くのベンチに見知った顔を見つけた。

巡のクラスの担任、朝比奈だ。

無言のまま歩み寄り、ベンチで足を組んでぼんやりしている朝比奈の隣にちょこんと腰掛ける。

かぼの存在は、大抵に人間には気付かれないが、かぼの座る場所には誰も後から腰掛けようとはしない。そこに誰かがいることを認識している訳ではないのに、実に自然に、人々はその場を避ける。物の怪とは、そういうものだ。

「こんな時間までひとりで出歩いてて大丈夫なのか？　嬢ちゃん」

頭上から降ってきた声に、かぼは隣に座る朝比奈を見る。

「心配は無用だ」

ニパッと笑って見せたら、朝比奈もそうかと頷き、ポケットをあさった。

「キャラメル、食うか？」
そう言って出された、前にも一度目にしたことのある小さな包みに向かって、かぼは何の抵抗も無く手を差し出す。
「おくれ」
両の手を上に向かって差し出したかぼに苦笑しながら、朝比奈は指でつまんだキャラメルを、彼女の手にポトリと落とした。
早速包みを開いて、キャラメルを口に放り込むかぼ。
「知らない人から物をもらったりして、怒られないか？」
片眉を吊り上げて笑う朝比奈に、かぼはむぐむぐと答える。
「わちには説教する親はいないから大丈夫だ」
それに一応、かぼにとっては知らない人間ではない。
「いや、親じゃなくてもいるじゃん。うるさそうなのがひとりさ」
かぼは、うんうんと頷く。
「確かにうるさいの。けど今メグは宿題をやっているでな。邪魔になるから追い出されてる最中なのだ。そうでなくとも一昨日の夜、わちらが騒いだせいで寝不足になって、えらく不機嫌だからの。これ以上怒らせるのも面倒だから、こうしてブラブラしてる訳だが」
朝比奈は、合点がいったように頷いた。
「それで昨日、ダルそうだったのか……」
てっきりこのところの蒸し暑さで眠れていないのかと思っていたが、別の理由があるらしいことを悟って、朝比奈はまた苦笑する。
かぼは、そんな朝比奈を眺めた。その視線に気付いて、朝比奈はかぼの口許を指差す。
「前に作ったのよりも砂糖の量を減らしてみたんだよ。うまいか？」
かぼは、素直にこくりと頷く。
「前のもこれもうまいぞ。ぬし、器用だの」
「それはどうも。ちゃんとわけてもらえたなら良かったな」
ハハハと笑う朝比奈を、さらに眺める。
「ぬしは、最初からわちのこと見えておったよな」
真っ直ぐなかぼの視線を受けて、朝比奈はこともなげに頷いた。

「うん。成瀬は気付いてなかったろうけどな」
かぼが何気なく教室後部の戸を開けて入ってきた時から、朝比奈はかぼの存在に気付いていた。そのかぼが隣まで来た時に、初めて仰天して叫んだ巡に、噴き出しそうになるのをこらえるのが大変だった。
朝比奈が巡にキャラメルをふたつ渡したのは、最初からかぼにも分けることを想定していたからだ。だからかぼは巡に「かぼに飴をくれた」と言ったのだが、それでも巡は気付かなかった。もっとも、それだけで気付く訳もないが。
「ぬしは自覚のある逢魔だの」
朝比奈の様子から、物の怪に出会ったのはかぼが最初ではないことを察して、かぼは言う。朝比奈はまた頷いた。
「逢魔が時だからな。オレはその仕組みも知ってる。だから、近いうちにきみと話をしたいとは思ってたんだ」
「そうか？」
かぼに向かって小首をかしげる朝比奈に、かぼも同じように首をかしげて問いかけた。
「時代が進めば人間も進むんでさ。昔と違う点も、いくつかある」
朝比奈は、フウ、と軽くため息をつく。
「今のこの時代はさ、逢魔が時に関する研究機関もあるんだ」
「そうなのか！　それは初耳だの」
この世界の何事も理解しているような素振りを見せるかぼだが、実は知らないことも多々ある。
「完全水面下の話で、一般人はまったく知らないけどさ。これから来る魔の刻への対策として、対魔物用の公的機関を、これから何十年かかけて作り上げようとしているんだよ、人間も」
それは本当に、誰も知らない。
知っているのは、機関に属しているかその直近の人間のみだ。それらは皆、魔の刻や魔物の存在を、先祖や先達から密かに伝え聞き、あるいはその目で確かめてきた者たち。

普通はそんな漫画のような団体の話など、口で言われても誰も信用すらしないだろう。
「オレは機関の人間じゃないっていうか、その機関すらまだ正式には動いてないんだけど、その機関と色々と関わりもあったりしてさ。だから言っておくんだけど」
朝比奈は、一呼吸おいてから、再び口を開いた。
「一応、気をつけときなよ。変なのに目を付けられないようにさ。彼らの中には、物の怪に悪印象を抱いている人間もいるから」
朝比奈の言葉に、かぼは軽くため息をつく。
「それは仕方がないの」
研究機関というからには。魔の刻についての情報も持っているということなのだろう。
すなわち。
今の逢魔が時はまだいいが、時が進んで本格的な魔の刻が訪れれば、生の刻の住人、つまり人間を中心とする生物に、危害を加える魔物が出現してくるという事実を。
「対抗策を打ち立てているのだな。人間も」
「何か困ったことがあれば、呼んでくれていいから。多分、キミの知らないことも結構知ってると思うぜ、オレは。人間の側のことならな」
意外なところに、意外な人間もいたものだ。
これも、この地ならではということか。
かぼは思う。
この街に存在する、生の刻と魔の刻を繋ぐゲートの存在を。
いつか、巡にも知らせなければならないのだろう。

＜第二話・了＞

……1……

7月になっても、梅雨が尾を引いてじめじめした日が続いている。からりとした天気の日は少なく、雨天も多い今日この頃だ。

幸いにして雨の降っていない曇天の今日、巡はまたも雑木林を歩く。

うっそうとした木々の間は湿気も強く感じるが、心なしか快適に感じるのは茂る緑のせいか、流れる小川のせいか。ともかく巡は、雑木林を流れる川の上流を目指す。そこいらにいるであろう、ミーシャに会うためだ。

歩くたびにガサガサと音を立てるのは、スーパーの袋。その中には、プリンがみっつ入っている。

「あまり乱暴に歩くな。プリンが崩れるではないか」

文句を言うのは、巡の後を軽やかな足取りでついてくるかぼ。

「ならお前が持てよ」

雑木林の中はそうでなくとも歩きにくいのだ。多少の揺れは仕方がない。どんな場所でもヒョイヒョイと越えられるかぼなのだから、文句を言うならかぼが持てばいいと巡は思ったのだが、彼女は口をへの字につぐんでそっぽを向いた。持つ気なしだ。

川のほとりで寝そべっているミーシャはすぐに見つかった。

「よう。どうした今日は」

人の気配にムクリと起き上がったミーシャは、巡とかぼの姿を見とめて片手を挙げた。相変わらずの彼はいつでもフレンドリーだ。

「プリン持ってきた」

用件だけを直球で口にする巡。

本当は、プリンがあるからミーシャも連れて来いと母がうるさかったのだが、ミーシャのような特殊な姿の物の怪を、そうそう家に呼ぶのはあまり都合がよろしくない。いつ誰にバレてしまうやもしれないのだ。巡という逢魔の力を持った人間が存在しているのだから、他に力を持つ人間がいないとも限らないし、そうでなくたって、ミーシャを相手にしている光景を見られただけでも、力のない人間にだってこの姿は見えてしまう可能性が高い。

いくら魔の刻になりつつある世の中といっても、何も知らない人間にいきなりこれは刺激が強いだろう。

なので、仕方なく巡はかぼも連れて雑木林まで足を運んできたのだ。

三人で、プリンを食べるためだけに。

とりあえず、シンは猫の姿で気持ちよく寝ていたから置いてきたが。プリンのために今起こさなくてもいいだろうし、人間にして一緒に連れてくると、多分相当やかましい。

「……プリン？」

心なしか顔をしかめたように見えたミーシャだが、袋をあさって元気良くプリンを取り出したかぼから、彼は黙ってそれを受け取る。

プラスチックで出来た容器からラップのフタを外して、スプーンですくい上げる。かぼや巡はともかく、ミーシャのそんな姿はやはり異様というか笑いを誘うというか。そもそも雑木林の中でプリンを食す三人組というあたりから、ありえない光景ではあるが。

「ん？　なんだこりゃ。この前のと違うな」

ひとくち口に入れて、ミーシャは不思議そうな顔をする。

「おいしくない？」

かぼは喜んで食べているが、ミーシャが同じ趣味とは限らない。巡の質問に、ミーシャはいや、と首をかしげた。

「この前初めて食べたときは、正直甘っとろくてかなわんと思ってたんだが、今日のは全然違うな。やけに美味いぞ。これが同じものか？」

「それ母さんの手作りなんだよね。この前のは買ってきたやつ」
へえ、と感心する仕草を見せるミーシャ。同じプリンという名を持つものが、こうも味も食感も違うものなのかと、そこが不思議でたまらないらしい。美味いと言っているのだからそれは何よりだが、正直甘すぎた前回のプリンも黙って食べていたのだから、ミーシャ、物の怪のくせに人間が出来ている。
かぼだけが、そんな他人のことなどまるで気にもせずに、プリンに夢中だ。ひとくちふたくちと笑顔で口に運んで、みくち目をすくおうとした時。

何かが、かぼのプリンの中に垂直落下してきた。

ベシャッ。
音を立てて、飛び散るプリンと、それを顔面に食らって「ぶへッ」と奇妙なうめき声を上げるかぼ。
「……か……か、かぼのぷりんが！！」
顔中プリンまみれになりながら、しかしかぼはそれどころの話ではないらしい。
「かぼのぷりんに何かが、かぼの～ッ！！」
そんなに錯乱状態にならなくても。
「ちょと待て、かぼ。プリンなら僕のをやるから。ていうか、なんだそれ」
巡はプリンよりも、落下してきた物体の方が気になる。木の実でも落ちてきたのかと思ったが、それにしては白っぽいような、むしろピンク色に見えたような。巡はかぼのプリンを凝視した。

足が、見える。

見間違いでなければ、掌の上に乗るくらいの、小さな人間の形をしているように見えなくもない何かの、下半身が。容器からはみ出

た場所で、バタバタともがいていた。
ミーシャが、その足をヒョイとつまんでプリンの中から引きずり出す。
姿を現したそれは、息も絶え絶えに口をパクパクとさせていた。
「な、なんでこんなところに、かすた～どのうみがぁ～？」
ボロボロと涙をこぼしながら訴えるその物体は、掌大ではあるが、人間の女の子のようにも見える。が、いかんせんプリンでぐちゃぐちゃになっているので、何が何だかわからない。

また、物の怪か……。
逆さ吊り状態でわめく少女を見て、巡はハア、と、深くため息をついた。

……2……

川の水に浸かって身体の汚れを落とした彼女は、フウ、と深いため息をついた。

「まさかこんなところにプリンがあるなんて、思わなかったよぉ～」

川べりから水面すれすれまで伸びている草の先を両手で掴んで、タプタプと胸まで水に浸かりながら足をばたつかせる物の怪。こうして掴まっていないと流されてしまうのかもしれない。

「こっちだって、こんなところでプリンを台無しにされるとは夢にも思わんかった」

巡の分のプリンを分けてもらってなお、かぼは不機嫌極まりないといった体で頬を膨らませる。食べ物の恨みは怖いのだ。本来、物の怪は何を食べる必要もないはずではあるのだが。

「ゴメンねぇ。最近ミズ、元気がなくて～、新鮮なお水を求めてたら、こんなところに辿り着いちゃったんだけどぉ」

掌大の少女、名前はミズというらしい。

「ぬし、水蓮の精か何かか？」

身にまとうフレアのワンピースのようなピンクの着衣と背中についている羽が、水蓮の花びらに酷似している。もっとも、背中の羽は実際に身体から生えているわけではなさそうだから、ただの飾りなのだろうが。物の怪は物の怪なりの洒落っ気があるらしい。

「いんやぁ、そういうわけじゃないんだけどねぇ。水蓮には何かと縁があるんでぇ。この花って可愛いでしょ～？」

全身で水蓮をアピールしているのだが、彼女は水蓮の精というわけではないらしい。

「で、なんでこんなところに来たんだ。お前、どこの子だ？」

ミーシャがミズの身体をつまみあげる。ピタピタと水を跳ねてい

た足が、何度か空を切った。
「つままないでぇ。だから～、ミズ最近元気なくてね」
「それは聞いた」
回りくどい表現を一蹴するミーシャ。顔が顔だけに迫力があるが、同じ物の怪同士だからだろうか、ミズは悪びれない様子でミーシャを見返す。
「ん～、ミズはねぇ、こう見えても水盤の物の怪なのね」
「……すいばん？」
その単語を初めて聞く巡が、眉を寄せる。
「花器の一種だの。少し深い皿のような陶器での、そこに水を張って、花を活けたりするものだ。なるほど、それで水蓮か」
水盤のような花器には、水蓮を生けることも多い。ミズが水蓮に縁があるというのは、その花器に水蓮が生けられることが多いということなのだろう。
「また思いもよらない無機物の物の怪だな。で？」
川から生まれたというミーシャも大差ないような気もしないでもない巡である。川だとか水盤だとか、もともと動物のような命を持っていないものが、こんな風に人間とも話せる物の怪になるという事実が、今いちピンとこない。
どういった拍子で、彼らが意志を持つようになるのだろう？
「ミズは～、ここから少し離れたところにあるおうちの水盤の物の怪なんだけどね。最近そこのおじいさんがぁ、ミズの水盤に、きれいなお水を入れてくれなくなっちゃったのね」
ちょっと前まで、ちゃんと塩素を抜いた美味しい水をいつも張ってくれて、そこに綺麗な花を活けてくれていたのに、最近の水は、美味しくないらしい。ここで言う「美味しい」という表現は、そのままの意味ではないかもしれないが。
「だからミズ、どんどん元気なくなっちゃって……」
「それはそうだろうの」
シュンとするミズに、かぼはうんうんと頷いてみせる。

「それはそうだって、どうしてだよ」
どうも話の流れが掴めない巡。水盤は、綺麗な水を入れてもらえないだけでダメになってしまうものなのだろうかと思う。
「それはの、うーん、面倒くさいの。後で説明してやるから待ってろ。で、ミズ。つまりぬしは、そのじいさんが最近手抜きしているおかげで元気がなくなってしまって、それで綺麗な水を求めるうちにここに来てしまった、ということなのだな？」
巡からあっさりとミズに視線を移してしまうかぼ。巡は意味がわからないままだが、今ここでかぼを問い詰めたところで、まともな答えが返ってくるとも思えなくて、だんまりを決め込んだ。
ミズはブンブンと小さな手と頭を振った。
「違うのよ。おじいさんは悪くないのね。だって今までずっとミズのこと、ホントに可愛がってくれたんだもん。だからね、もしかして、最近おじいさんの体調が良くないんじゃないかって思ってねぇ。だから、おじいさんも綺麗な水を飲めば、きっと身体も良くなるのよ。それで持って帰れる綺麗な水を探してたんだぁ」
「そのちっさい身体で、どうやって水を持って帰るつもりなんだ……」
「気持ちの問題だよぉ」
他人の気持ちの問題では、大概身体は治せない。大体、新鮮な水をひとくちやふたくち飲んだところで、人間はそうそう元気になったりしないものだが。
そのおじいさんというのが、本当に体調不良なのかどうかも怪しい。今ここで聞いている話は、すべてミズの主観でしかない。
「ぬしひとりの考えと行動では、解決にならんのではないかの。ぬし、どこから来たのだ。帰り道はわかるのか？」
微妙に嫌な予感のする巡。
かぼが、何やら首を突っ込もうとしている気配。ドライに思われるかもしれないが、他人の問題にいちいち介入していたらキリがないのだが。

――かぼは物の怪だから、時間だけはたっぷりあるのか。
巡は得心する。
「帰り道はわかるよぉ。もと来た道を帰ればいいんだもんね」
ニコニコと返事するミズに、かぼは頷いた。
「ここの水は、人間にはあまり知られてないだろうが、街の河川に合流するまでは、確かに人間でも飲める位綺麗なのだよ。ぬしじゃ無理だろうから、そのじいさんにはかぼたちが水を運んでやろうぞ」
うええ、と顔色を変える巡。
その行動に、何か意味なんてあるのだろうか。良い水なら、今時コンビニでも買える。それに、本当にそのおじいさんが体調不良なのだとしたら、水を飲む前に病院に行った方が良いだろうし。綺麗な水で即座に元気が出るなんて、ミズが水盤だから思いつく考え方だ。
「なあメグ。わちらに任せておけば良いよな？」
ニッコリと巡に笑いかけるかぼ。
最近になってわかるようになった、かぼの微妙な表情。これは何かの企みがあるというか、何事か考えを巡らせている時の表情だ。
仕方なく、巡は頷いた。
かぼがここまで乗り気なのなら、意地を張って放っておくのも後味が悪い。というか、どうせ巻き込まれるのだろうし。
「そぉ？　良かったぁ。おじいさんが元気なくなっちゃったらぁ、ミズ悲しくて泣いちゃうもん」
ミズは純粋にそのおじいさんとやらに好意を抱いているらしいが、一体どんな関係なのだろうかと巡は思う。本当に、可愛がられていたのだろうか？
そしてそれは、物言わぬ水盤として？　それとも、この姿が見えていて？
とにもかくにも巡だけが、水を入れる容器を取りに家まで走ることになってしまった。

かぼの方が楽に移動できるのだが、彼女に任せておくと、どんな騒ぎを起こしてしまうかもわからなかったし。

どうも、面倒くさい事態になりそうな予感のする巡だった。

……3……

綺麗な水を入れてもらえないと、どうして元気がなくなるのか。
結局かぼは、全て忘れ去ってしまったかのようなノリで、まったく巡にその話を聞かせる気配が見えない。黙っていても教えてくれそうなミーシャはついて来なかったから、知りたければかぼかミズに聞くしかない。
かぼの肩に座って道案内をするミズを眺めながら、巡はそれをかぼに訊ねてみた。
「ん～」
珍しくかぼが、言葉を選ぶような素振りを見せる。
もしかして、聞いてはいけないような類のことなのだろうか。それにしては、あまり深刻な様子でもない。
「メグがこれまで出会ってきた物の怪はな、全部、そのカテゴリ全体の物の怪なんだな」
急に難しい言い回しをするかぼ。
「ミーシャは、川から生まれた物の怪。シンは猫から。それは知っておろう？」
「うん」
「ぶっちゃけた話をすれば、彼らはその存在が無くならない限り、消える……いわゆる「死ぬ」ことはない。わかりやすく言えば、ミーシャは『川』から生じた物の怪だから、川そのものが無くならない限りは、この世界に存在し続ける物の怪なんだ」
もしもミーシャの傍から川という存在が消えてしまった場合、ミーシャがこの世界に存在し続けるためには、川のある場所に移動しなければならない。逆に、近くに川さえあれば、よほどの不具合が生じない限り、ミーシャはそこで生き続けることになる。

シンもしかりだ。
猫から生まれた存在であるシンは、この世界から猫そのものがいなくならない限り、生き続ける。
彼ら物の怪は、その元となるものの象徴か守り神であるかのように、そのものの傍で存在し続けるのだ。

「だが、ミズは違う」

「……？」
「さっきこやつは、ここから少し離れた場所にある、家の中にある水盤の物の怪だと言ったな。つまりミズは、水盤という存在そのものの物の怪という訳ではなくて、どこぞの家にある、ひとつの水盤から生まれた物の怪ということなのだ」
種類としての『水盤』の物の怪ではなくて。
どこかの家の、たったひとつの『水盤』の物の怪。
「それって、ぜんぜん違う存在なのよぉ」
かぼの肩から、ミズの声が跳ね上がった。
「私は～。人間に大事にされなかったら、生まれなかった存在なのね」
「大事にされなかったら？」
物の怪たちの言葉は、巡にはいちいち難しい。
「ミズはの、人間の言葉で言うなら、付喪神のようなものだ。付喪神ってのはつまり、道具や器物も永い時間が経つと魂が宿る、と言われている、その精霊のことなんだがの。ミズが生まれたのは、その家にある水盤が、永い時間をかけてとてもとても大切にされたからだ。そうだろう？」
かぼの言葉に、ミズはうんうんと頷く。
「物の怪は～、偶発的に生まれるのも多いんだけど～。ミズはね、人に、うんと大事にされたから宿った、ひとつの水盤の魂なのね。だから」

だから、人間に大事にされなくなったら、ミズの魂は力を失くしてしまう。
きれいな水を注いでもらえないということを、イコールで「大切でなくなった」「どうでもよくなった」と解釈するなら。人間の注ぐ情の大きさに比例して、ミズの存在は弱くなってしまうから困るということらしい。
かぼやミーシャやシンと、ミズとの決定的な違いはそこにある。
多くの物の怪は、母体となる物体が魂を持ち、形を成した、独立した存在だ。だからその母体さえあれば、弱点を衝かれるような事故が起こらない限りは、ほとんど消えることはない。
けれどミズのように、人間から注がれた情によって魂を得た存在は、もちろん母体である物体そのものが壊れたりするのも困りものだが、それとは別に。
人から愛されなくなったら、その存在は消えてしまう。
「ミズの水盤はね～、もう二百年位前からあのおうちにあるのよ。凄いでしょ。で、ミズは百年位前に生まれたのね。二百年ずっと大事にされてきたんだから。いまのおじいさんだって、生まれたときからあの水盤の近くで生きてて、長い間大事にしてくれてたのよ。だもの、そのおじいさんがミズに美味しいお水をくれなくなったのには～、絶対に何か理由があるはずなのね」
別にどうでもよくなったとか、面倒くさくなったという可能性は微塵も考えていないのだろうか、ミズはただ、おじいさんが体調不良を起こしているのではないかと心配をしている。
人に情を注がれることによって生まれた存在なのだから、当然かもしれないが。
彼女が、人間を疑うことなど無いのかもしれない。
だから、巡も憶測で余計なことは言わないことにした。
それに、本当にそのおじいさんの体調が良くないのかもしれないし。だとしたら、ミズではなく人間からの意見として、おじいさんは病院に行った方が良い。巡が肩からぶら下げている水筒の中の水

は、ただ綺麗な水というだけで、万病に効く魔法の薬ではない。そもそも飲んでも平気ではあるらしいが、この水をそのおじいさんに飲ませるつもりは、巡にはさらさらない。ミズが望むから言うとおりにはしたが、体調を崩している老人にその辺の川の水を飲ませるなど、現実的ではないと思う。

けれど事情を知ってしまえば、それなりに気にはなるものだ。
あまり面倒事には関わりたくない巡でも、そのおじいさんとやらに会って、事実関係を確認したくなってしまった。
結局は、お人よしなのかもしれない。
それとも単に、かぼの勢いにつられているだけなのか。それはわからないけれど。

「ほら、あそこの家がそうだよぉ～」

「ぬ？」
「あれ？」
道案内をするミズの指し示す方角の通りに歩くしかなかった巡とかぼだが、やけに巡の家の近所に近付いていると思えば。
示されたのは、天笠和菓子店だった。
なんてこった。
それならそうと、もっと早く言ってくれれば良かったのに。
ミズがフラフラと飛び回った軌跡をきっちり逆戻りしていた一行。目的地が天笠和菓子店だったのなら、雑木林からここまで、最短距離の三倍ほどの距離を歩き回っていたことになる。

巡はがっくりと肩を落とした。
この気持ちは、体力バカの物の怪たちには絶対にわかるまい。

……4……

「ただいまぁ〜」
それまでかぼの肩にとまっていたミズは、元気に跳ね上がって天笠和菓子店の正面まで飛んでいってしまった。重力に反した飛行能力だが、背中の羽がまったく動いていないところを見ると、やはりそれはただの飾りであるらしい。

かぼが、ぼそりと呟いた。
「ミズのいうおじいさんとやらが、天笠のじいさまだとするなら、やはりもうひとつの可能性の方が高くなってきたの……」
「もうひとつの可能性？」
かぼの小さな声は、巡にだけ聞こえる。オウム返しで聞き返した巡に、かぼは苦笑とも取れる微妙な表情をして見せた。
「場合によっては、メグがちょっと嫌な思いをするかもしれん」
「僕が？」
「わちは慣れておるからの。構わないが……」
いちいち歯切れ悪く、しかしあまり歓迎したくないようなことを言うかぼ。しかし「慣れている」というのだから、巡だけでなく、かぼにとってもあまり良くない状況が待っている、ということなのだろう。
嫌な予言をしてくれる。
「まあ、なるようにしかならんものだ。様子を見てみるかの」
「……」
巡とかぼは、そろって天笠和菓子店ののれんの前に立った。
店の前に姿を現した和菓子店の主人は、巡とかぼの姿を見とめて、

いささか目を見開いたようだった。
「綺麗なお水持って～、ここまでついてきてくれたのぉ」
クルクルと飛び回りながら歌うように話すミズの姿を追うでもなく、店の主人は巡とかぼだけを、数秒眺めていた。
「……入りなさい」
それだけ言って、主人は店の奥へ引っ込んでしまう。
厳格そうに見えるが、商売をやっているだけに、普段はそれなりに愛想の良い主人だが、今日のこの様子は、歓迎されているのかどうかも微妙だ。だが入れと言ったのだから、門前払いという訳ではないし。そもそも門前払いされるいわれもないのだが、先ほどの主人の表情の硬さが、予想外の来訪者を拒んでいるようにも見えたのだ。

巡がこの店の奥まで通されるのは、初めてのことだった。
普段は用事もないのだから当然かもしれないが。
店の主人――天笠荘二郎（あまがさそうじろう）は、決して人付き合いの嫌いなタイプではないが、いかんせん巡は子供だから、個人的に荘二郎と親しくなる機会など、これまでには無かった。

「店先であまり大きな声を出すものではない」
荘二郎は、ミズに対して言う。
「はあ～い」
年寄りに説教されてもおののくこともないミズだ。もっとも、荘二郎が生まれた時からミズは彼を知っているのだから、恐れる必要などないのかもしれないが。
「少し遊んで来なさい。私はこの子達と話がある」
「えぇ～、だって、ミズが連れてきたんだよぉ」
自分だけ追い出されることに納得のいかない様子のミズだが、荘二郎の性格を知っているのか、一度反論しても聞き入れてもらえないと見るや、仕方ないといった体で部屋から出て行ってしまった。

荘二郎、頑固親父の部類なのかもしれない。

静かな和室の中で、かぼが口火を切った。

「姿が、見えておるのだの」

「ああ」

かぼの言葉に、短い言葉だけで頷く荘二郎。

「じゃあ聞くが、あの子は最近、水盤に綺麗な水を入れてもらえないせいで元気が無いとか言っていたが、本当なのかの」

「……」

「物の怪や、付喪神といった存在のことを、ぬしはどれだけ知っているのかの？」

「……」

かぼが何を言っても、荘二郎は黙ったままだ。

「もしもぬしが、己の持ち物である水盤を邪険に扱っているのだとすれば、その水盤の物の怪であるあの子はいずれ消えてしまうだろう。それを知っているか？」

直球で物を言い続けるかぼの言葉をずっと黙って聞いていた荘二郎だが、ややあって一言だけ、そうなのだろうな、と呟いた。

「わちは別にそれについて説教する気はないがの。人が人に対してそうであるように、物の怪に対してだって、個人が個人をどう思おうが勝手だ。たとえそれで己が消えることになろうが、わちらにとってはそれもまた運命。人間が運に見放されて早死にするのと何ら変わらん。ただミズは、ぬしが水盤を大切にしないのは、主の身体が悪いからなのではないかと心配しておる。実際そうなのだとしたら、そっちの問題もあるでな。せっかくの縁だし、確認のためにもこうして出向いてきた訳だが」

荘二郎は、巡とかぼを交互に見つめた後で、口を開いた。

「その物言いから察するに、お前さんは人間ではないようだな。あの子以外にも、そういう存在があったのだな」

荘二郎は立ち上がり、二人に背を向けた。

「私があの子の存在を知ったのは、つい最近だ。まだひと月と経っておらん。ただ大切にしてきた水盤に、あんな幽霊のようなものが取り憑いているのだと知って、平静でいられる人間はそうはおらん。そうだろうが」
「……だから、その元である水盤を放って、あの子を消滅させようとしているというのか？」
「だとしたらどうだというのだ？」
言い捨てる荘二郎に、かぼも立ち上がった。
「別に、ならこちらも何も言うことはない。物の怪も人間と同様、結局は己の手の届かぬ部分には常に受身でしかないのだからな。例えそれが己の魂の存続に関わることであっても、ミズだって納得せざるを得まいよ」
畳の上に座ったまま黙り込んでいた巡の袖を、かぼはくいくいと引いた。
「帰るぞ、メグ。これ以上話すことはない」
淡々と話を進行させるかぼだが、巡は黙って立ち上がった。
「期待に添えなくて済まんな」
二人に背中を向けたまま、荘二郎は呟く。さっさと帰れと言わんばかりの態度だ。
立ち上がった二人は、挨拶もないまま奥の和室から出た。

「どうしたメグ。やけに大人しいの」
かぼと荘二郎のやり取りの間、黙って聞いていた巡の顔を、かぼは覗き込んだ。何事かの意見でも言いそうなものなのに。
「ん……」
和室から店先に出て、そこでフワフワと飛び回っているミズを見つけた。ただ黙って飛んでいる分には、誰かに発見されることはまずないだろう。
他に客の姿が見えないことを確認して、巡はミズに対して一言だけ質した。

「ミズ、シュークリームは好き？」
巡たちの姿を見て飛んできたミズは、いきなりの質問にキョトンと目を見開いた。
「うん？　好きだよぉ。初めて食べたのは最近なんだけどぉ。テレビとかで見て、ずっと憧れてたからぁ。あれ、ホントおいしいよねえ」
ほんわかと顔をほころばせるミズに、巡はそう、とただ頷いた。
「また来るよ」
多くは語らずに、巡とかぼは店を後にした。
きっと何事か話し合ったのだろうと単純に考えているらしいミズは、にこやかに手を振って巡たちを送り出す。

「どうした、メグ」
良くわからない行動を取る巡に、かぼはゆっくり歩きながら、彼の顔を見上げる。
「うそだよ」
一言だけ、呟く巡。
「なんで、うそなんかつくんだ」
足許に視線を落とす巡に、かぼはうんうん、と頷いてみせる。
「さあな……でも、わちらのためかもしれん」
巡が何を言わないでも、かぼはわかっているようだった。

多分また、天笠和菓子店には出向くことになるだろう。

……5……

二人きりの和室で、巡と荘二郎は、しばし無言で向き合っていた。

再び天笠和菓子店を訪ねた巡だが、今日はかぼはつれてきていない。というよりは、かぼ自身がついて来ることを辞退した。

「どうせ、黙って聞いていることしかできないからの」

というのは、かぼの談。おそらく、これから巡が荘二郎から聞きだそうとしている話の大筋を、かぼはもう理解しているのだろう。そしてそれがどんな内容であれ、かぼは反抗する気も意見する気もない。ならば、巡が自分で聞いて、自分で判断した方がいいだろうと、そう考えたのかもしれない。

巡の方にも、確信できていることが少なくともひとつはあった。

「なんで、嘘をついたの？」

巡の言葉に、荘二郎は無言のまま見返してくる。

ミズは今、巡の家でかぼたちと遊んでいて、ここにはいないから直球での会話が出来る。正確には、巡が心置きなく話を進められるように、かぼがミズを家に呼び出したのだが。

「天笠さんがミズを良く思ってなくて、それで水盤をいい加減に扱ってミズを消そうとしているなんて、嘘だ」

「……」

だって、ミズはシュークリームが好きだと言っていた。

天笠和菓子店が、洋菓子であるシュークリームを店頭に置き始めたのはいつだ。巡の考えが間違っていないなら、それはちょうど、荘二郎がミズと出会った頃ではないのか。

巡がシュークリームをもらったとき、荘二郎は言った。シューク

リームが食べたいと言っている子がいると。それはミズのことだろう。だから、いつでも彼女に食べさせてやれるようにと、むしろそれが一番の目的ではなかったのか。
ミズは、シュークリームの存在をテレビで知ったとも言っていた。どんな形でかは知らないが、ちゃんとテレビだって見させていたということだ。ミズのことを、その魂ですらどうでもいいと思うくらいにうとましく思っているのなら、そんなことをするだろうか。
「なんで、そんな嘘をつくのかが知りたい」
荘二郎の言を嘘だと決め付けて、巡は話を進めた。
多分、間違いではないだろうと。
「……」
荘二郎は、一瞬だけ目を閉じる。
「あまり深入りをさせて、嫌な思いをさせるのもどうかと思っていたのだがな……あれから考えたが、お前さんも物の怪と共にある身、あまり子供扱いして隠すのも良くないのだろうな」
物の怪というものの性質を知っておくのも悪くないだろう、と、荘二郎は前置きした。
「私の水盤の扱いは、以前も今も変わってはおらん」
「……え？」
「変わったのは、ミズの方だ」
言いながら、荘二郎はほんの少しだけ、ため息をついたように見えた。
「どういうこと？」
「水盤に張る水も、活ける花も、これまでとなんら変わってはおらん。水盤で花を活けるのに最良であるはずの水を、そうでないように感じるようになったのは、ミズの方だ」
荘二郎は、再び目を伏せた。
「寿命なのだよ。ミズのな」
荘二郎の率直な一言に、巡は目を見張った。
「……寿命？」

荘二郎が本当のことを言っていないというのはわかってはいたが、今のその言葉は予想外だった。というか、巡にはその言葉のちゃんとした意味が、上手く頭の中に浸透してこない。

荘二郎は、床の間に飾られた水盤を見やった。

「我が家に伝わるこの水盤はな、随分長いこと大切に扱われてきたが、これといった名品ではない。銘もない数物のひとつだ。むしろあまり出来のよくないものでな。焼きも上薬も甘いものを、見た目が気に入ったという理由だけでタダ同然で譲り受けたというのが真相だ。これまで良くもったものだとさえ思える」

それは、つまり？

「限界なのだよ。ミズの本体である水盤は、もう壊れかけておる」

大切にとは言うが、誤って畳の上に落としたことだって、荘二郎が生まれる遥か前からの長い長い時間の中で一度や二度ではない。そういった衝撃だって、その場ではなんともなく見えても、疲労がたまって行く原因になる。

焼きも上薬も甘いといういわゆる不良品であるなら、水など注がずに、ただ飾っておいたほうが良かっただろう。けれど天笠家はその水盤に水を張り、花を活け続けた。本来そうであるべきものとして。そういう意味でも、大切に扱ってきたと言えるかもしれない。

だが、つまり。

「本体である水盤が壊れたら、ミズの魂も、保ってはいられまい」

「……」

人間が年を取っていくのと同じように。

そしていつかはその生涯を終えるのと同じように。

形のある物はいつかは朽ち、その役割を終えるときが来る。

「知っての通りであろうが、ミズは水盤そのものの物の怪ではなく、うちにある水盤のそれだ。その水盤が壊れれば、ミズはミズとして生きてはいられないということだ」

「……そんな」

ミズは、年老いて生涯を閉じようとしている存在なのだと。

荘二郎は、そう言っている。
「物には必ず寿命がある。今が、ミズのその時なのだ。だから、どんなに大切に扱ってやろうが、朽ちかけているミズの身体は、それを正常には感じ取れなくなっているのだよ」
美味しいと言っていた水を、美味しく感じられなくなってしまったのは。
壊れかけた水盤が、その身に無遠慮に水を注がれているから。
ミズの魂そのものが、老いて壊れて消えかけているから。
「それを薄々感じ取ってはいるはずなのだがな。ミズは表面上認めようとはしていない。だから、多くを言えないでいたのだが……うちの水盤は、もういつ壊れてもおかしくはない状態だ」
「ミズが……」
消えようとしている。
そして彼女は、それを認めようとはしていない。
だから、美味しくなくなった水を、おじいさんの体調不良のせいにしようとしている。

語られたことの意味を悟るのに、頭が追いついてこなくて、どう反応していいのかもわからないまま。

巡は、俯いた視界に広がる畳を、ただ意味も無く見つめていた。

……6……

荘二郎から聞いた話を、巡はそのままかぼに伝えた。が、やはりかぼは、さして驚いた様子は見せなかった。

「そんな感じはしていたよ。魂の消えかけてる物の怪は、案外とわかるものだ。だが……」

「だが？」

思案顔になるかぼに、巡はその表情を覗き込む。

「大抵、物の怪なんてのはその運命を甘受するようにできているというか、それが常なんだがの。ミズがそれを受け入れようといていないというのが、気になるところではあるな」

荘二郎も、そんなようなことを言っていた。

人間の姿になっているシンが、巡のベッドの上でゴロリと寝転がる。

「オレらみたいなのは、正直寿命なんて存在しないようなものだけどな。だから、寿命があるヤツの考え方ってのは、根本からは理解できねえけど……」

かぼやシンは、元となるそのものの存在が消えて無くならない限りは、その魂は消えることはない。かぼが何の物の怪であるのかは聞かされていないが、これまでの言から察するならば、シンやミーシャと同じ存在なのだろう。だがミズは、荘二郎の持っている水盤の寿命が尽きれば一緒に消えてしまう。

「もともと『生きている』者たちと違って、わちらには存在するという事に関しての執着はあまりない。聞き分けのない人間と違って、運命を受け入れるのがたやすくできているからな」

聞き分けのない人間で悪かったな。

心の中だけで悪態をつく巡だが、ここで毒づいても始まらないので黙っている。今話しているのはそんなことではない。
「人間に愛されて生まれた存在だから、ということかもしれんが、ミズのような物の怪など、他にも星の数ほどいるからの。もっともわちらも、その全てを掌握している訳ではないから、実際は己の消滅についてどう思っているかなど、わからんのだが」
存在し続けることへの執着があろうがなかろうが、それは必ず受け入れなければならない運命。何故ミズは、それを認めようとしていないのだろう。
「薄々わかっているはずだって、天笠さんも言ってたけど」
「人間だってそうだしの。メグにはまだわからんだろうが、事故にしろ病気にしろ突発的に死んで行く者以外、大抵は自分の命が終わりかけていることくらいはわかるものだ。だがミズは、それを受け入れようとしていない。理由はあるんだろうが……」
未練とか、そういうものだろうか。それとも何か別の。
「なんにせよ、それがあるなら聞いてやること位はできなくはないが、運命は変わらん」
だからな、と、かぼは巡を見た。
「ぬしはどうする。ミズとはあまり関わらない方がいいのではないか？」
巡はえ、と表情を変える。
「なんで」
「別にぬしがそれでいいのなら、わちは構わんがの……ミズと関わっていれば、必ず、ミズの死に目に遭うことになるぞ」
「！」
ミズと関わった時に、かぼが言っていたことの意味が、今わかった。
場合によっては、嫌な思いをすることになると。
ミズは人間ではないが、人間のように会話のできる存在だ。だから、もう話をして、ひとりの人間のように、その存在を認めてしま

った。ものの死は全て等しいとはいえ、やはり名も知らぬ存在の死を伝えられるのと、知っている者が死んでいくのは、全然違うものだ。
だが巡は、まだ本当の意味で「死」というものを知らない。
まだ誰のことも、失ったことはないのだ。
「それでもまあ、人間の死と物の怪の死は、まったく違うものだがの」
ほんの少し、巡に気を遣ってるのだろうか、かぼは軽い調子でそんなことを言う。
「違うって？」
幾度もの死と向かい合ってきたであろうかぼは、フウ、とため息をつく。
「物の怪は、その魂が消えるときに、器もあとかたも残らない。だが生の刻の生き物は……死体というものが、残る」
そんなことはわかっている。わかってはいるが、それがどれほどの差であるのか、巡にはよくわからない。
「身体が残っているからこそ、その喪失感は、恐ろしくでかいぞ。……まあ、こんなことは口で言ってもわかるものではないし、本当は、その時になって初めてわかるものなんだがの」
これまで動いてしゃべって息をしていたものが、その機能を一切停止する。
例えば病気で、もう心臓が動いているだけのような状態になっていたとしても、それはまだ、生きている。
それがすべて止まったときに。
その身体は、嘘のように、違うものに、なる。
もう二度と動かないし、しゃべらない。まるでこれまでのことが、夢であったかのように。
流れていた血が止まり、体温が無くなった身体は、とてもとても冷たい。
何年も動いてきたものなのに、そうなった瞬間から、腐敗が始ま

る。
生と死の、境界線。
それを知らない巡には、やはり言われても、心から理解することは難しい。
「話が逸れたな。とにかく、そういう『生物』よりは、物の怪の消失はあっという間だということだ。それでもな、そこにいた者が消えてなくなるという事実に変わりはない」
だから、それが嫌なら回避することもできるのだぞ、と、かぼは言う。
ミズと関わるのをやめればいいのだと。
「ミズは、もうそんなにすぐに、消えてしまうの？」
巡の質問に、かぼは頷く。
「水盤次第だからの。今日消えてもおかしくはないのだよ」
水盤が壊れたら、どうしてもダメなのだろうか。
水盤を大事にする気持ちから生まれた物の怪なのに。その大事にしていた人の気持ちが、残ったりはしないのだろうか。
いや、こんな風に往生際が悪いのが、人間なのかもしれないが。
かぼがダメだと言っているのだから、そうなのだろう。
「それでも」
巡は俯きがちになっていた顔を上げた。
「だからって僕は、逃げたりはしないよ。誰も逃げられないのに」
ミズも、荘二郎も。
巡が直接の当事者という訳ではないが、そのことを知ってしまったからには、まるで無関係という状態には戻れない。ミズの死に目に遭わないようになんて、今さらだ。
「天笠さんだってきっと、辛くない訳はない。ミズだって」
荘二郎やミズが、今どういう風に考えているのかも、ちゃんとはわからない。けれど、それを知っていてやる存在は、多い方がいい

ような、そんな気がしたのだ。
「もっと、天笠さんにもミズにも話を聞きたい。僕だけ無関係を決め込みたくない」
一大決心をするような感じでもなく、淡々と言う巡。
「そうか」
そんな巡に、かぼはただ頷いた。

巡がそういう気でいるのなら、かぼはもう、何も言うつもりもなかった。

……7……

巡は荘二郎と二人で話したときに、初めてミズの元となっている水盤の姿を見た。

それは深い深い藍色で。絵柄は入っていないが、意識して作られた色むらが目を楽しませる、上品な雰囲気を持つ水盤だ。荘二郎は何の銘もない上に不良品のようなものだと言っていたが、見た目だけなら、大量生産とはいえなるほどひとつひとつ手で作られたであろう特有の趣をかもし出している。

今日もそこには、薄いピンク色の水蓮が活けられていた。

「おじいさんはいつも、お庭の蓮の池から、このお花を持ってきてくれるんだよぉ」

その水盤に腰掛けながら、ミズはニコニコと笑っている。

今のミズを水盤からあまり離してしまうのは良くないんじゃないかと考えて、ミズと遊ぶという名目で天笠家まで足を運んだ巡だったが、一見して今のミズに、弱っているような変化は見えない。

水盤自体も、巡の目から見てどこが良くないのか判断することは出来なかったが、荘二郎の話によると、もう全体的に弱っていて、目には見えにくい亀裂もあちこちに生じているらしい。片手に持って振り回してみれば真っ二つに割れてしまってもおかしくないほどで、おいそれと動かすことも出来ない状態なのだ、と、少し悲しそうに見える表情で言っていた。

それでもこうやって、ちゃんと水を張って花を活けている。

「ミズはさ、どうしてこうやって、物の怪になったんだと思う？」

何とはなしに、巡はミズに訪ねてみた。その言葉に、巡について遊びに来ていたかぼも彼に視線を向ける。
ミズは、いきなりの巡の質問に、うーんと首をかしげて困った顔を作る。
「わかんない。でもぉ、この水盤を大事にしてくれる人と、お話が出来るかもしれない存在になれたのは、嬉しいよぉ」
物の怪になったからといって、全ての人間と会話できる訳ではない。ミズはまだ生まれてから百年しか経っていないという話だが、その間に、ミズの存在に気付いたのは、荘二郎が初めてであったらしい。
なにもこんな今際の際になってと思わなくもないが、こういう時だからこそ、ミズの存在力が強くなったのだと考えられなくもない。
命の、最後の灯し火のように。
「そうだよな。物の怪と人間は、会話が出来る。……なあ、かぼ」
巡は、今度はかぼの方に話を振った。
「物の怪はどうして、人間の姿で生まれてくるんだ？」
巡の言葉に、かぼはキョトンと目を見開く。
数秒そうしたあと、かぼはあからさまに呆れた表情で巡を見た。
「別に全ての物の怪が人間の格好をしている訳じゃないぞ。人間であるぬしが、人間の形をした物の怪しか認識できていないだけだ」
物の怪の総数で言ったら、人間と話の出来る物の怪のほうが、出来ない物の怪よりも数は少ないらしい。話す機会がないからこそ、人間である巡には認識しにくいだけで、本当はそこかしこに物の怪は存在しているのだ。
「だとしてもだ。じゃあなんで、かぼやミーシャやシンや、ミズみたいな物の怪は、人間みたいな姿で生まれてきたんだ？　元は人間じゃないだろう？」
かぼは何だかわからないが、ミーシャは川で、シンは猫で、ミズは水盤だ。人間でないものから魂を独立させて生まれてきた彼らが、どうして人間の姿でいるのかが、巡にはわからない。

かぼは、どこか遠くを見つめるような表情で、巡から視線を外した。
「正直、そこのところの真実は、わちら物の怪にもわからんよ。だが……」
「だが？」
「人間の姿に転じる物の怪の多くは、人間と関わりの深い環境にいることが多い。だから、人間の姿になって生まれてくるのかもしれん」
かぼは再び、巡を見た。
「人間と、話がしたいのかもしれんの」
人間の使う言語を用いなければ、人間と交流を図るのは難しい。
人間を含む、全ての生物の力が弱まる魔の刻でしか大手を振って存在できない魔物たち。けれど、それでも、いつの世もその生命力で大股闊歩で生きる人間に。
憧れて、いるのかもしれない。

「己らを生物の代表のように勘違いしている種族だがの。それをまるごと否定できない魂の強さを持っているのが人間だ」
憎まれ口も忘れないかぼ。だが、別にそんな人間を責めている様子でもない。
「人間と、何らかの形で関わりたい願望の表れなのかもしれんの」
もちろんかぼにも、真実はわからないけれど。

「ミズはぁ、おじいさんと話がしたかったよぉ、ずっと～。やっとそれが叶ったんだもん、すごく嬉しいさぁ～」
これまで生きてきた百年間のうちの、まだほんの一ヶ月ほど。
「ミズの水盤をこの家に置いてくれた人のことは、ミズも憶えてないけどねぇ」
物の怪として魂を得る前のことは、ミズもさすがにわからないら

しい。
「だから他の物の怪のことはわからないけどぉ、ミズは絶対、人とお話したくて、お礼言いたくて物の怪になったんじゃないかなあって、そう思うよぉ。この水盤で心を癒されてる人たちに、ちゃんとその気持ちを、水盤も受け止めてるよって、そう教えてあげたくて……」
嬉しそうにそこまで言って、ミズはふと俯いた。
「でもぉ……おじいさん、まだミズに美味しい水くれないんだよ。どうしてなのかなあ。ミズのこと、嫌いになっちゃったのかなあ」
それでもそんなはずはないとでも言いたそうに、ミズは言葉にしてしまった後で、フルフルと首を振った。

そうではないのだと、巡はミズに言えなかった。

水が変わったのではない。ミズが変わったのだ。
巡があの小川の水を持ち帰った日だって、荘二郎はその水を、水盤に張ったらしい。けれどその時ですら、ミズは水が綺麗になったと喜ぶ気配はなかったそうだから。

どう言えばいいのかわからない。
自分が言っていいのかどうかも。

多くを言えず、「おじいさん、どこかからだの具合悪くないんじゃない？　大丈夫？」と、荘二郎に対し気を遣う言葉しか掛けられないミズと、それをわかっていても沈黙を貫く荘二郎。
彼はこれから、どうするつもりでいるのだろう。

……8……

ミズが、急に弱くなった。

この一日二日で、ミズの姿を見なくなったと思っていたら、ミズは水盤の前でじっとしたきり、ほとんど動かなくなっていた。

今にも死にそうという訳ではないが、水盤の縁に腰掛けたまま、ただぼんやりと一日を過ごしているらしい。その表情も、明らかに精彩を欠いている。

天笠家に様子を見に来た巡は、それを目の当たりにして緊張を覚えた。

隣に立つかぼは、表情ひとつ変えていないように見える。どんなことを考えているのかも、巡には読み取ることはできない。

巡とかぼの姿を見て、ミズはその来訪を喜んだが、すぐにとても悲しそうな表情を見せて俯く。

「もうずっと、ミズ美味しいお水入れてもらってないよぉ。どんどん元気じゃなくなっていくんだよ。どうしてなのかなあ？」

荘二郎の体調を気にしていたミズだが、ここへ来てそんな余裕も無くなって来ているらしい。それに、体調が悪いはずの荘二郎は、いたって普段通りの毎日を送っている。

「なんでかなあ？　おじいさん、そんなにミズのこと嫌いなのかな。嫌われて、放っておかれて消えちゃうなんてことないよね？　おじいさん、どうしてる？　元気なのかな？」

もう、自ら確認に動くのも億劫なのだろう。荘二郎のことを気に掛けているというよりは、自分のことに必死になっているようにも見える、今のミズだ。

巡は、どうすればいいのかわからない。

このままではミズは本当に、自分は嫌われていると誤解したままこの世から消えてしまうことになるのではないか。そんな風に思った。

本当のことを、言ってやるべきなのではないかと。

けれど、それを知らせてどうなる？

キミは荘二郎のせいではなく、自分の寿命が尽きて消えていくのだと。

ミズにしてみれば、同じことではないか。

それにこれはおそらく荘二郎とミズの問題であって、巡が口出しすることでは無いように思える。けれど。このままミズを黙って見ていることしか出来ないなんて。ミズがいなくなってしまうかもしれないという事実も悲しいが、それをこうやって傍観するしかないことも、悲しい。かぼの言う『嫌な思い』が、こんなところにも形を成している。

スルリと音を立てて、巡の背後の襖が開いた。

そこに、荘二郎が立っている。

「天笠さん……」

「おじいさぁん」

荘二郎の顔を見ると同時にその名を呟いた巡の声に被るように、ミズの呼びかけが部屋に響いた。

「おじいさん、そこにあるのは新鮮な、綺麗なお水？　ミズに持ってきてくれたの？　もうおじいさんは元気になった？　ミズのこと嫌いで、いじわるになったんじゃないよねえ？」

矢継ぎ早に問いかけるミズ。

いじわるなどと言われなければならないことを荘二郎がしていた訳ではないが、そう言われても荘二郎はもちろん怒り出すこともなく、その手に持つ水筒を水の目前に掲げて見せた。

「これは、今日そこの坊主と嬢ちゃんがミズのためにと持ってきて

くれた、小川の清流の水だ。この前、お前が私にと持ってきたものと同じな」
正確に言えば、あの時運んできたのは巡だが。
「今朝、水盤に入れてやったのはこの水だ。どうだ？」
そう言われて、ミズはわからなそうな顔で首を傾げる。
「……？」
言われている意味がわからない。
今朝の水？　それは違うはず。美味しくなかった。はず。
だってミズは、こんなに元気をなくしているのに。
ミズが元気をなくしているのは、荘二郎がミズのために綺麗な水を用意してくれなくなったからであって。すなわちそれは、ミズの水盤が大事にされなくなったからであって。そうでなければいけないはずだ。
他に、ミズが元気をなくす原因の心当たりが、あってはいけない。
本当は、水が綺麗かどうかが最終的な問題ではない。この家の水盤が、魂というものを形作るほどに大切にされているかどうかが問題なのだ。

愛で生まれた魔物は、愛が無ければ存在し続けられない。
だから逆に、大切にさえされていれば、ミズはずっとここにいられるはずなのに。
ちゃんと綺麗な水を与えられてもミズが元気にならないのは。
本当は水盤なんてもうどうでもいいのに、仕方なくやったことだから？
そんな風に、思いたくない。
けれど、そんな風に思いたくないけれど、じゃあそうでなかったとしたら、どうしてミズは、どんどん弱くなってきているのか。
愛されていても、こんなに弱くなっているのだとしたら。

ミズがたどり着く結論は、ひとつしかありえない。

「ミズ……認めなさい」

荘二郎の一言に、ミズは両目を大きく見開いた。

「出ていた方がいいかの？」

かぼが小さく呟く。

だが、荘二郎は緩やかに首を振った。

「お前さんがたが嫌なのでなければ、構わん」

小さな声で言う荘二郎は、ミズに本当のことを話すつもりでいるらしかった。

……9……

多分、お前さんも憶えているだろうな。

荘二郎は、ミズに向かってそんな風に話し出した。

「水盤のあるこの部屋では騒ぐことが出来ずに、私はいつも不満に思っていた」

荘二郎がまだ幼かった頃の話だろうか。

ミズの水盤のあるこの部屋は、中庭に続いている和室で、水盤のほかにも年季の入っていそうな掛け軸やら用途の良くわからない調度品やらが置いてあって、確かに子供が遊ぶには向かない場所のようにも思える。

「私は兄と違って乱暴者だったし、暴れたい盛りだったからな。兄が入っても怒られないこの部屋に、自分だけが入るのを許されないことに腹を立てていたな」

意外な過去だ。

物腰静かな荘二郎にも、子供時代はあったという訳だ。

元気のないミズも、それにはうんうんと頷いた。

「あの時は驚いたんだよぉ。ミズ、こわされちゃうかと思ったんだもん」

にゃは、と笑うミズ。けれど当時、笑い事では済まされない事態が起こっていた。

「兄ばかりが可愛がられていると思いこんでいた私は、役にも立たない古いものがこの部屋にあるのが悪いのだと、この部屋にある装飾品を次々と壊してまわったな」

「うわ……」

ついつい声を上げてしまう巡。

荘二郎、かなりの悪たれ坊主だったらしい。

床の間に掛けてあった掛け軸を外して放り、壷は中庭に投げて壊した。使いもしない日本刀は池に投げ込み、薬箱や茶器も散らかしまくって、そのいくつかは使い物にならなくなった。そのどれも、法外に値段の張るものではなかったが、どれも年季の入ったそれなりに高価なものであることは間違いなかった。

「そして水盤に手を掛けたときに父親に見つかって、大目玉を食らったな」

ミズが命拾いした瞬間だ。

閻魔か鬼神かのように怒った父親は、散らかり放題のその部屋に、荘二郎を丸一日閉じ込めた。つまりこの部屋だ。

この部屋には鍵はついていない。襖を開ければ隣の部屋だし、脱出する気になれば、中庭にも出られた。けれど、当時の荘二郎にそれはできなかった。それほどまでに、父の存在は脅威だったのだ。この部屋を抜け出そうものなら、今度はどんな厳罰が待っていることか。当時の家庭の多くがそうであったように、天笠家の大黒柱も例にもれず厳格で、逆らえる人間など家族の中には誰ひとりいなかった。

そんな風に、どれほどの処遇が待っているかも最初から想像できたのに、荘二郎は衝動を抑えることが出来なかった。結果、予想通りに父を怒らせた。

「この世に存在する全てのものは、いつかは壊れて無くなる。いつかは消えてゆかねばならぬ物を、お前が途中で壊すとは何事かと、相当絞られたな」

そして、時代を越えて残せるものを大切にする精神。それがいかに尊いものであるか。そんな説教も時間をかけてされた。やんちゃ盛りの当時の荘二郎には、到底心から納得できるものではなかった

が。
そうして薄暗い部屋にただ押し込められて。
荘二郎はその間、唯一壊れていないミズの水盤と向き合っていた。
荘二郎が壊し、散らかした部屋の中で、唯一無事であった水盤。
そこには、いつも通り淡い色の水蓮の花が、活けられていた。
水に浮かび、けれど揺れることも無く、ただ静かに。
はかない時間を咲き誇る花と、それを抱える、藍色の水盤。
長いことただそれを眺めなければならかなった荘二郎は、物言わぬそれに、確かに慰められたのだ。その、静かな美しさに。

「ミズはそのときずっと、いいこいいこっておじいさんの頭なでてたんだよぉ」

ニコニコと笑うミズ。
もちろん当時の荘二郎には、ミズのそんな姿は見えていない。
けれど、人や動物のようには動かない彼らが与えてくれる潤いのようなものに、初めて気付いたのだ。彼らのそんな恩恵はあまりにも密やかすぎて、じっと静かに感じようとしなければ、気付けるはずもなかった。
それがとても大切なことであるのだと、荘二郎はその時初めて感じた。
「それからだよねぇ。おじいさんが、自分でミズに花を活けてくれるようになったのは」
ミズは嬉しそうに言う。
荘二郎はまだ子供だったから、時には手折ってきた桜の枝を不恰好に無理やり飾るなどという無茶をしたこともあったが。そのときは、父には叱られなかった。いや、桜を折って持ってきたことだけ注意されたような気もするが。
「それ以来、水盤は私にとってとても身近なものになっていたし、きっとミズにとっても、私が一番身近な人間であったろうと、自負

はしているよ」
うん、とミズは頷く。
「みんなミズの水盤を大事に大事にしてくれたけど、水盤を嫌ってたおじいさんが一所懸命お世話してくれるのが、本当に嬉しかったんだぁ。だからこの人だけにでも、ミズの姿が見えるようになればいいのになって、ずっとずっと思ってたんだよ」
お願い叶って、しかもミズの存在を受け入れてくれて、とーっても嬉しかった。
そう言って、ミズはくふふ、と笑った。

「私はつい最近までミズの存在に気付かなかったが、随分長い時間を共に過ごしてきた。だから、ミズ、その私が言うことを、しっかりと聞きなさい」
「なぁに？」

荘二郎の言葉に、巡だけがそっと目を伏せた。

来る。
ミズがすべてを知るであろう、その瞬間が。

……10……

ミズは、無表情だった。
もう、寿命なのだと教えられても。
それが逃げられない運命であると聞かされても。

思ってもみないことを言われて、思考がついて来ないのか。それとも薄々感じていたことを認めるのに時間がかかっているのか。ミズの心の中を、巡が読み透かすことはできなかったけれど。
「最近この部屋からあまり水盤を移動しなくなったのは、もういつ壊れてもおかしくなかったからだ」
荘二郎は、水盤と、そこに座るミズを見つめたまま、ゆっくりと話す。
それまで荘二郎は、水盤を陽のあたる場所に出したり店先に移動してみたりと、色々なことをやっていたらしい。
けれど、ここ最近それが出来なくなっていた。
流れるというほどではないが、微かな水漏れも発生しているような状態だったのだ。持ち運ぶ際に、突然壊れてもおかしくない。

「物には絶対に寿命がある。無機物でも有機物でも。魂にだって、終わりは必ず来るものだ」
魂の大きな流れについては、荘二郎の知るところではない。人にしろ物の怪にしろ、心とか魂とかいう物が、形を失った後にどこへ行くのか。どのような形になるのか。あるいは完全に消滅するのか。それは、誰にも、わからない。
けれど、個々としての魂、たとえば今そこにある『ミズ』という魂が、終わりを迎えようとしているのは紛れもない事実だ。

いずれは荘二郎や巡だって。
そして、ずっと遠い未来に、かぼやミーシャやシンだって。
いつかは。必ず。
「だから、ミズ……」
それでも、言いよどむ荘二郎。
こんな告知など、したいはずはない。けれど、それをしなければ、ミズは大きな誤解を残したまま、この世から消えることになる。

荘二郎の言葉を遮るように、ミズはフワリと飛んだ。

「ミズ？」
呼びかけにも応えずに、ゆるりと荘二郎の目前を横切り、開いたままの襖の向こうへと向かう。
「ミズ！」
どこへ行こうとしているのか。
そのままどこかへ消えやしないかと、一瞬戦慄した荘二郎が立ち上がりかけた。
「今の状態で、水盤から離れて遠くへは行けないと思うがの……」
ボソリと呟くかぼを、立ち上がりかけた荘二郎と巡が見つめる。
「弱くなった魂は、拠り所を離れては存在できんよ。別に弱ってもいない、わちらですら長いこと遠ざかってはいられんのだからの」
例えばミーシャが川から離れてはいられないように。
弱ったミズは、なおさら水盤からは離れられない。
「でも……」
あまりに無表情だったミズの様子が気になった巡が口を開きかけた時、ミズが先程と同じ調子でゆるゆると戻ってきた。
腕に、何かを抱えている。
どこにでもあるような、木工用ボンドだった。
「ミズ！？」
片腕一杯にそれを抱え込んで、グルグルとそのボンドのフタを回

すミズ。外したフタを投げ捨てて、ボンドの口を水盤へと向けたミズの目前に、荘二郎は瞬間の判断で腕を差し出した。
水盤との間に入り込んだ荘二郎の和服の袖に、全身のあらん限りの力を振り絞って圧迫された容器から飛び出した白いボンドが大量にかかる。
「何をする！」
荘二郎の声に、ミズはパッチリと見開いた目を彼のほうへと向けた。
「何って、ボンドで水盤をくっつけるんだよぉ。壊れかけてるなら、ボンドで直せば大丈夫じゃない。水漏れしそうな部分、ミズが一番知ってるしぃ」
さも当然のように言うミズから、荘二郎はボンドの容器を取り上げようと手を伸ばした。
「やめなさい」
厳しい顔を見せる荘二郎に、ミズは眉を寄せる。
「なんでぇ？　どうしてジャマするの？」
荘二郎の手から、ボンドを守るように抱え込むミズだが、掌サイズのミズと荘二郎では、力に差がありすぎる。そうでなくともミズは弱っているのだ。ミズはすぐに荘二郎の手で捕まえられてしまった。
「そんなことをして何になる！」
荘二郎にボンドを取り上げられて。怒気を帯びた声で責められるような形になって、ミズの表情に初めて感情が浮かんだ。
「なんでよぉ！？　水盤が壊れたら、ミズが死んじゃうんだよ！？　消えちゃうよ？　おじいさんはその方がいいのお！？」
「だが、だめだ！」
多分、ミズは気付いていた。
水盤自体が寿命を迎えていることを知っていて、それでも認めたくなかったのだろう。だから無理やり理由付けをして言い逃れをしていたのに、止めを刺すように真実を突きつけたのは、荘二郎だ。

ミズは激しく首を振る。
「物の怪は凄く長生きなんだから！　人間よりずっとずっと！　だから、ミズは人間がミズより先にいなくなっちゃうのだって、ずっと見守ってきたよ。悲しくたって寂しくたって、それが運命だって思って、思うようにして、せめて静かに見守るのが一番いいんだって」
まくし立てるミズは、そこで大きく息を吸い込んだ。
「長生きなのに！　なのになんで、よりによって、やっとミズのこと見えるようになったおじいさんより先に、ミズが消えなくちゃならないの！？」
「ミズ……」
「ミズがいなくなったら、おじいさんひとりぼっちじゃない！！ミズはひとりだって平気だよ、慣れてるもん。そうやって生きていくのが物の怪だもん。でもおじいさんは違うじゃない。おじいさんをひとり残して、ミズだけが消えちゃう訳にいかないでしょお！？」
人は、いつか死ぬ。
ミズが生まれてからまだ百年ほどしか経っていないが、その間だけでも、ミズは自分が知る人間を幾人か見送ってきた。ただひとり、ミズの存在を見つけてくれた荘二郎だって、いつかは。
それをわかっていて、ミズはずっと見送る覚悟をしてきたというのに。
自分が先に行かなければならないなんて。
この家でひとりで暮らす、荘二郎を残して。
その事実を否定するように、ミズはただ首を振って硬く目を閉じる。
「長ければいいというものではないわ……」
かぼが、俯いたまま小さな声で呟いた。

……11……

かぼは、あっという間の仕草でミズの身体を掴むと、自分の洋服の飾り紐をするすると外し、それでミズの胴体をきつく縛り上げた。
「痛い、いたーい！！」
「ぬしが妙な真似をするからだ」
背中で固く結ばれた紐を、ミズは自分で解くことはできない。
その端をしっかりと握ったまま、かぼはこともなげに座りなおした。
「しばらく大人しくして頭を冷やせ」
「ちょっと、かぼ……」
巡が呟きかけても、かぼはその紐を解く様子はない。縛り上げるなんて、ちょっとやりすぎなんじゃないかと巡は思ったのだが。
巡は、頑として聴く耳を持たないかぼではなく、荘二郎の方へと向き直った。
「天笠さん……その、その水盤は、修復、みたいなことは、できないの？」
恐る恐る、といった体で、巡は荘二郎に問いかける。
ミズの出してきたボンドで思い出したのだが、骨董品の修復、なんて言葉を巡はテレビで何度か聞いたことがあった。
けれど荘二郎は無表情のまま。
「できなくはないだろうな」
「……それなら……」
荘二郎は、そんな巡の言葉に首を振る。
「お前さんの言うこともわからんでもない。だがな、それをやったとして、いつかもたなくなるのは逆らえない運命だ。確かに私が生きている間くらいは過ごせるかもしれない。だが、傷つき壊れかけた身体を無理やりつぎはぎだらけにして生きて行きたいと、お前さ

んなら思うかね？」
「……」
巡は、正直言葉を返すことができなかった。
それでも、少しでも長く生きられるのなら、その方がいいんじゃないかと。そんな風にさえ思えるのだけれど。
「お前さんはまだ若い。それでも長く保てる方がいいと、そういう風に思うかもしれんな。若者が生に執着するのは当然だし、むしろそれでいい。だが老いというものはな。自分の持つ機能が、正常に働かなくなるということなのだよ。弱って折れた足や腕を無理やり縫い付けて、長く息をし続けなければならないというのは、決して幸せなことではない。……歳を取るとな、そういうことも、わかってくるようになる」
言っていることの意味はわからなくはないけれど。
でも。だけど。
ミズは、ただ。
「ミズは……天笠さんを残して行きたくないと、そう願っているだけなんでしょう？」
それだけが彼女の唯一の願いなのだとしたら、それに伴う苦しみなんて、承知の上なのではないかと。難しいことはわからないけれど、その願いくらい、叶えてあげたっていいんじゃないかと、巡は考えた。
「そうだよ。ミズは、ミズはただぁ……」
「わがまま娘は黙っておれ」
乗り出して巡の言葉に勢いをつけようとするミズの行動を、かぼは普段の己の行動を省みない一言で一蹴した。
「メグ。こやつのは、ただのわがままだ。ぬしが真面目に取り合ってやる必要はない」
「……かぼ」
あまりに冷たい、かぼの態度。
物の怪は全体的にドライかもしれないが、ここまでだったろうか。

「天笠の爺をひとりで残したくないなどと言ってはいるがな。そんなことは余計な世話というものだ。こやつは爺のために言っているのではない。自分のためだ。全てな」
「そんなあ！」
かぼの言葉には、当然のごとくに反発するミズ。
自分はただ荘二郎に寂しい思いをさせたくないと、それだけを考えていたのに。
「爺がひとりだなどと決めているのは、ぬしの勝手だ。ぬしは、ひとりきりになる爺のために言っているのではない。己が『ひとりきりの爺』に必要とされている存在だと、思いたいだけではないか」
「……！！」
違う、と、ミズは力なくその首を振る。
「違うよ、そうじゃない。ミズは本当に……」
「本当に爺のことを考えていると言うのなら、自分がいなくなった後のぬしのことを考えている爺の気持ちが何故わからない。存在の理を捻じ曲げることで、ぬし自身にまで歪みを与えてしまうことを良しとしない爺の意志を、何故汲めない！　ぬしはただ、行くな傍にいてくれと言って欲しい、必要とされていたいだけだ」
ひとりの寂しさを味わわせたくないということは。
それを真剣に考えているということは。
ミズ自身が、そんな寂しさを過去に何度も味わって、辛い思いをしてきたということだ。
その寂しさを知らないのなら、荘二郎にそんな思いをさせたくないなどとは思わないはずで。慣れていようがいまいが、そこに逃げられない辛さがあるのは事実。
荘二郎だって、人工的に永らえさせてまで、ミズにそんな思いをさせたいわけがない。
「人間のように、未練がましいことを言うな、ミズ」
巡には、かぼや荘二郎の理屈は素直に納得することができない。

けれど、一番身近な年長者である母のことを考えた。
これまで意識したことは無かったけれど、順当に行けば、親子ほどの差がある母のほうが、巡よりも先に死ぬことになる。巡のほうが先に逝くという事態は、親不孝というものだ。
もしもその時が来たら。
死の縁に立つ母がもし、生きることを望んだとしたら。
死への行進を続ける身体を引きずって、「お前を残して行くのが心配だから、この身体をとりあえず長く保ってくれ」と懇願されたとしたら。
自分はどう思うのだろう。
それは苦しみの時間の延長。
そうまでして母を長らえさせることを、自分は望むのか、望まないのか。
今の自分なら、きっと母の言うことを自分でも望み、彼女を永らえさせようとするだろう。けれど、長く生きていると考え方が多様化するという理屈もわからなくはない。納得できなかろうが、それは事実なのだと当事者が言うのだから。

ミズの願いと荘二郎の願いは同じであったとしても、選んだ道は、相容れない。
とてもとても、難しい問題だ。
そして難しいからこそ、荘二郎は、殉ずることを選んだのかもしれない。
ミズにわざわざ厳しい物言いをするかぼも、きっとそんな荘二郎の意思を汲んだ。

そういうことなんだろうな。

巡は自分なりに、そんなことを考えていた。

……12……

「運命は変えられんよ」
かぼは呟く。

「時の流れは、物体を消耗させる。物体が消耗すれば、魂だって消耗する。それがどういうことなのか、わからなくはないだろう」
かぼの言葉に、ミズは黙ったままだ。
巡には、かぼの言うことはやっぱり理解しがたかったけれど。
「抵抗などできないのだ。ミズは皆を置いて旅立つのではなく、そこに残されるのだからな」
魂が消えるということは、魂を持つものを置いていくことと同義ではない。むしろ、置いていかれるのはミズの方だ。
例えば天国のような場所へと駆け上って行くのではなく。
歩くことをやめて立ち止まったミズの魂は、時間の流れから置いて行かれる。それが、魂の死というものだ。本当のところはともかく、かぼはそういう風に、魂の消失というものを位置づけていた。
「いつかは皆、そうやって足を止める。そして自分の傍を通り抜けていく『時間』というものを、操ることなど出来ない。他の皆の『生きている時間』はな」
だから。
だからミズは、怖かったのかもしれない。

死ぬ、ということは。
魂が身体を抜けて飛翔するのではなく。
疲れきった魂が、時間から取り残されるということ。

多分きっと、そういうこと。

「私も、そう長いこと生き続けるわけではないよ」

静かな口調で、荘二郎が言った。

「どうせあと十年か二十年か。すぐに私も、この世からいなくなる。悠久の時間の中では、瞬きほどにも満たない一瞬だ」

荘二郎が、ほんの少し、笑った。巡たちには初めて見せる表情かもしれない。

「そして私が立ち止まる場所は、きっとミズのいる場所だろう。そこは、時間から取り残されている場所なのだからな」

その言葉は、ただの慰めでしかない。本当のところは、誰にだってわからないのだ。けれど荘二郎は、根拠のない慰めをミズに向け続けた。

「だからミズは、安心してそこで待っていれば良い。ほんの僅かな時間だ」

この世での、時間稼ぎがバカバカしく思えるくらいに。

「おじいさんは、悲しくないの？」

ミズは、荘二郎を見上げた。

しかし荘二郎は、首を振る。

「悲しいことなどあるものか。私は何も失いはしない」

朝が来て夜となるように。生の刻と魔の刻も、どちらもきちんと訪れる。

表裏一体であるこれらのように。

すべてのものは、もとをただせばきっとひとつだ。そして荘二郎の中から、ミズの存在が消えることはない。

「天笠さんは、ひとりじゃないよ。少なくとも、僕やかぼにはもう出会ってる。この街には、天笠さんのお菓子を楽しみにしている人も沢山いる」

巡がようやく、自分なりの結論を口にした。
「そしてミズも、ひとりじゃない。君がどこで立ち止まっても、そこにはみんないる」
これまで見送ってきた、沢山の人たちが。
だから、悲しむ必要なんて、どこにもない。

それが真実であるかどうかはわからない。けれど、それはどうでもよかった。
避けられない運命を目前にする相手に、差し出さずにはいられない優しさがあるだけだ。見つからない真実を詮索するくらいなら、例えば優しい嘘がいい。
かぼが、その後を引き継いだ。
「ミズ、ぬしは運命に対して絶対的に無力だ。だがそれは、全てのものがそうだ」
だから、折り合いを付けていかなければ。
生きているものも、そうでないものも。
「ミズと出会えたことは、私にとって幸運だったのだ。だから、お前に関することで悲しいことなど、何もない」
荘二郎が、ミズを縛っていた紐を解いた。もうミズは、その場から動いたりはしない。

愛するという心を、そのままその姿へと変えて返してくれるそんな存在に。
出会えたことが、幸運だ。

「ミズと出会えて、幸せ？」
「幸せだ。ミズもそうだろう？」
「ミズはおじいさんに出会えて……」

幸せ。

「うわあああああぁぁん」
ミズは声を上げて、泣き出した。
迫り来る瞬間を、その小さな身体全部で受け止めようとするかのように。

……13……

別れるくらいなら、出会わないほうが良かった？
死ぬことがつらいなら、生まれてこないほうが、良かった？

でも、ミズは幸せだったよ。

せっかくお話できるようになったおじいさんとお別れするのが悲しくて悲しくて、ミズはそれを認めようとしなかったよね。
だけど、それを悲しんでちゃいけなかったんだ。
だって、最後におじいさんと一緒に暮らせたことが、ミズにとっては幸せ。
存在を知られないままで消えていったとしたら、今ほど悲しくはなかったかもしれないけど、今ほどの幸せも知らないままだった。
幸せの裏には、悲しみがある。
悲しみの裏には、幸せがある。
大きければ、片方も大きく。小さければ、片方も小さく。
振り子みたいなものだね。

明かりを落とした真夜中の和室の中。
水盤の傍で眠る荘二郎の掛け布団に身体を預けて、ミズはずっと囁くような声で話し続けていた。
「ミズは幸せ。だってミズがこうしているのは、ミズの水盤が、人にとてもとても愛されてるってことの証明だもんね」
愛が、自分を生み出した。
自分はなんと幸福な存在であることか。

愛されたまま消え行くことの出来る自分は、この上なく、幸せだ。
「おじいさんがまだ小さかった頃、みんなに荘ちゃんって呼ばれてたよね。ミズも、そう呼んでれば良かったなあ」
呼んでも気付くことなく、振り返らない人間に対して、ミズは一度も名前で呼びかけたことはなかった。呼びかけたって意味がないような気がしていたから。
「沢山名前を呼んでいたら、もっと早く気付いてもらえたのかもね」
もう、確認する術はないけれど。
「荘ちゃん……にゃは、なんか照れるなあ。やっぱおじいさん、でいいや」
ポリポリと、ミズは頭をかく。
「メグちゃんも、かぼちゃんも優しい子だよねぇ」
かぼにはしこたま怒られたけれど。
荘二郎や巡を傷つけないための、精一杯の優しさだったのだろう。ミズがわがままを言わずに、全て納得して運命を受け入れられるように。誰かが、言わなければならないことで。
それをかぼは、自分が引き受けたのだ。
「ミズのために作ってくれたシュークリーム、凄くおいしいから、あの子達にもわけてあげてね。あ、でもそしたら、お金儲けられなくなっちゃうかあ。う〜ん……でもでも、メグちゃんやかぼちゃんと、ずっと仲良くしていてね。そしたらおじいさんだって、寂しいことなんてないもんね。それに」
そうしたらきっと、ずっとミズのことも忘れないでいてくれるだろうし。
「忘れないでね。ミズのこと……なんて、言わなくてもきっと、おじいさんはミズのこと忘れたりしないと思うけどね〜」
ミズは、掛け布団の上から荘二郎の身体を抱きしめた。傍から見えたとすればそれは、荘二郎の身体の上に張り付いているようであ

ったろうけれど。
「あったかい……眠いなぁ。とっても眠い。今日はここて寝ていいよねー……？」
大好きな荘二郎の上で、あたたかな、やすらかな。
なんて幸せなまどろみ。
「恥ずかしいけど、明日おじいさんが起きたら、うふふ、言ってみようかな。言っちゃおうかな～。ミズは、おじいさんのこと」

コトン。

静かな音を立てて、床の間に置かれた水盤が、綺麗にふたつに割れた。

長い年月を経て刻み込まれていた亀裂が、己の重みに耐えられなくなって、無理に繋がっていることを、今、やめたのだ。

器を失って、そこにたたえられていた水が床の間の上に広がり、音もなく畳の上に流れ落ちた。
活けられていた水蓮の花だけが、割れた水盤の上に静かに佇んでいる。

荘二郎の身体の上から、ミズの姿はあとかたもなく消えていた。
これまでのことが、まるで夢であるかのように。

荘二郎は、そっと閉じていた目を開けた。
暗闇の中、水に濡れた床の間の上で、ふたつに割れたまま役目を

終えた水盤を静かに見つめる。

――悲しいことなど、何もない。

そう、すぐに、自分も行くのだから。

それまではそう、老いぼれは老いぼれなりに、この世界で満足いくまで生き抜かねば。悔いのない人生を歩んでいかなければ、ミズに合わせる顔がない。

きっと幼いあの少年は、泣いてしまうかもしれないし。

そうしたら、泣くなと肩を叩いてやらねばならないだろう。

もしも泣かずに耐えることが出来たら、強い子だと褒めてあげよう。

あの物の怪の少女には――ありがとうと。

明日はこんなにも、忙しい一日になる。

大丈夫だ。悲しんでいる暇もなさそうだ。

ミズの言葉だって、ちゃんと聞くことが出来た。

「お前の言葉、しかと、最後まで……」

荘二郎は、再びそっと目を閉じた。

『明日おじいさんが起きたら言っちゃおうかな。ミズは、おじいさんのこと』

ミズは、おじいさんのこと。

おじいさんのこと、だーいすき。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1341y/

逢魔が時！

2011年11月24日21時45分発行